

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第13集

関越自動車道関係

埋蔵文化財発掘調査報告

— XII —

なか こう
中 郷

1 9 8 2

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県を縦貫する関越自動車道は、県西南部から北部にかけて約71kmに亘ります。

すでに、東松山市までは昭和50年に完成し、現在では群馬県前橋市に至る区間が供用を開始しています。

本道路敷にかかる遺跡は、新座市内畠に始まり、上里町若宮台まで延38遺跡を数え、考古学上に貴重な事実を提供し、その資料は膨大な量として残されております。

この資料の作成にあたりましては、発掘調査に従事された方々や、地元の皆様の多大なる御協力をいただいた事は申すまでもありません。

しかし、開発に先き立つ記録保存という発掘調査は、その結果を公正、かつ速やかに報告書に記録し、歴史的位置づけを明確にすることが責務とされています。

県内関越自動車道の開通後、既に3ヶ年を経過しますが、関係遺跡の報告書刊行は本事業団の主な職務として総力をあげ、社会的要求に沿う様、努力して行きたいと思います。

ここに、本書を刊行するにあたり、現代に生きる我々の生活の中に、前人が残した文化財が活用される事を望むと共に、今後より一層多くの方々の文化財に対する認識及び理解に役立てば幸いと存じます。

最後に、この記録が完成するまでに、県内文化財関係者はじめより、多くの御協力をいただきました日本道路公団、嵐山町教育委員会、地元関係各位に改めて感謝いたします。

昭和57年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

例　　言

- 1 本書は関越自動車道にかかる、比企郡嵐山町に所在する中郷遺跡の発掘調査報告書である。（昭和53年10月6日付け53委保記第17—1955号）
- 2 発掘調査は日本道路公団の委託により、埼玉県教育委員会が昭和53年度に実施し、整理・報告書作成は財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和56年度に受託し、実施した。
- 3 発掘調査は埼玉県教育局文化財保護課第3係があたり、中島宏、井上尚明が担当した。
- 4 出土品の整理及び図の作成は、中島宏、井上尚明、稻生美代子がこれにあたり、本間岳史、樋口誠司、西井幸雄の協力があった。
- 5 本書の執筆は、横川好富、中島宏、井上尚明、稻生美代子がこれにあたり、分担は次のとおりである。

横川 I・中島、IV（土器）、V-2

井上 III-1、2、IV（遺構）、V-1

稻生 II、IV（石器）

- 6 本書の編集は埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究部第四課及び第一課調査員稻生美代子があたり、横川好富が監修した。

目 次

序

例 言

I 発掘調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	5
III 遺跡の概観と調査の経過	9
1 遺跡の概観	9
2 調査の経過	11
IV 遺構と遺物	13
1 1号住居跡	13
2 2号住居跡	16
3 3号住居跡	27
4 4号住居跡	32
5 5号住居跡	43
6 6号住居跡	47
7 7号住居跡	50
8 ピット群	50
9 1号土壙	51
10 2号土壙	53
11 3号土壙	53
12 4号土壙	53
13 5号土壙	53
14 6号土壙	54
15 大溝	55
16 小溝	59
17 出土石器	64
V 結語	108
1 住居跡と集落について	108
2 出土土器について	110

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	6	第33図 5号住居跡出土土器拓影図	45
第2図 繩文時代中期遺跡分布図	8	第34図 5号住居跡出土石器実測図	46
第3図 遺跡地形図	10	第35図 6・7号住居跡	47
第4図 中郷遺跡全測図	12	第36図 6・7号住居跡出土土器実測図	48
第5図 1号住居跡出土土器拓影図	13	第37図 6・7号住居跡出土土器拓影図	48
第6図 1号住居跡	14	第38図 6・7号住居跡出土石器実測図	49
第7図 1号住居跡遺物分布図	15	第39図 ピット群	51
第8図 2号住居跡	18	第40図 土 壤	52
第9図 2号住居跡遺物分布図	19	第41図 2号土壤出土土器拓影図	53
第10図 2号住居跡出土土器実測図	20	第42図 5号土壤出土土器拓影図	54
第11図 2号住居跡出土土器拓影図(1)	21	第43図 5・6号土壤出土土器実測図	54
第12図 2号住居跡出土土器拓影図(2)	22	第44図 大溝	(折入込み)
第13図 2号住居跡出土土器拓影図(3)	23	第45図 大溝土層断面図	56
第14図 2号住居跡出土石器実測図(1)	24	第46図 大溝出土土器拓影図(1)	57
第15図 2号住居跡出土石器実測図(2)	25	第47図 大溝出土土器拓影図(2)	58
第16図 2号住居跡出土石器実測図(3)	26	第48図 小 溝	59
第17図 3号住居跡	28	第49図 A-4グリッド出土土器拓影図	60
第18図 3号住居跡遺物分布図	29	第50図 C-3・C-4グリッド出土土器	
第19図 3号住居跡出土土器実測図	30	拓影図	61
第20図 3号住居跡出土土器拓影図	30	第51図 D-4グリッド出土土器実測図	62
第21図 2・3号住居跡出土石器実測図	31	第52図 D-2・D-4グリッド出土土器	
第22図 4号住居跡	32	拓影図	63
第23図 4号住居跡遺物分布図	33	第53図 溝・グリッド出土石器実測図(1)	70
第24図 4号住居跡出土土器実測図(1)	34	第54図 溝・グリッド出土石器実測図(2)	71
第25図 4号住居跡出土土器実測図(2)	35	第55図 溝・グリッド出土石器実測図(3)	72
第26図 4号住居跡出土土器拓影図(1)	37	第56図 溝・グリッド出土石器実測図(4)	73
第27図 4号住居跡出土土器拓影図(2)	38	第57図 溝・グリッド出土石器実測図(5)	74
第28図 4号住居跡出土土器拓影図(3)	39	第58図 溝・グリッド出土石器実測図(6)	75
第29図 4号住居跡出土石器実測図(1)	40	第59図 溝・グリッド出土石器実測図(7)	76
第30図 4号住居跡出土石器実測図(2)	41	第60図 溝・グリッド出土石器実測図(8)	77
第31図 4号住居跡出土石器実測図(3)	42	第61図 溝・グリッド出土石器実測図(9)	78
第32図 5号住居跡	44	第62図 溝・グリッド出土石器実測図(10)	79

第63図	溝・グリッド出土石器実測図01	80
第64図	溝・グリッド出土石器実測図02	81
第65図	溝・グリッド出土石器実測図03	82
第66図	溝・グリッド出土石器実測図04	83
第67図	溝・グリッド出土石器実測図05	84
第68図	溝・グリッド出土石器実測図06	85
第69図	溝・グリッド出土石器実測図07	86
第70図	溝・グリッド出土石器実測図08	87
第71図	溝・グリッド出土石器実測図09	88
第72図	溝・グリッド出土石器実測図10	89
第73図	溝・グリッド出土石器実測図11	90
第74図	溝・グリッド出土石器実測図12	91
第75図	溝・グリッド出土石器実測図13	92
第76図	溝・グリッド出土石器実測図14	93
第77図	溝・グリッド出土石器実測図15	94
第78図	溝・グリッド出土石器実測図16	95
第79図	溝・グリッド出土石器実測図17	96
第80図	溝・グリッド出土石器実測図18	97
第81図	溝・グリッド出土石器実測図19	98
第82図	溝・グリッド出土石器実測図20	99
第83図	溝・グリッド出土石器実測図21	100

写真図版目次

- | | | |
|------|-------------------------|-----------------|
| 図版1 | 中郷遺跡航空写真 | 4号住居跡出土土器 |
| 図版2 | 1号住居跡・小溝 | 4号住居跡出土土器 |
| | 2・3号住居跡遠景・大溝 | 4号住居跡出土土器 |
| 図版3 | 2号住居跡 | 5号住居跡出土土器 |
| | 2号住居跡遺物出土状態 | 6・7号住居跡出土土器 |
| 図版4 | 2号住居跡遺物出土状態 | 2・5号土壤出土土器 |
| | 2号住居跡遺物出土状態 | 大溝出土土器 |
| 図版5 | 3号住居跡 | 大溝出土土器 |
| | 3号住居跡遺物出土状態 | 大溝出土土器 |
| 図版6 | 4号住居跡 | 大溝出土土器 |
| | 4号住居跡遺物出土状態 | A-4・C-3グリッド出土土器 |
| 図版7 | 6・7号住居跡 | C-4グリッド出土土器 |
| | ピット群 | D-2・D-4グリッド出土土器 |
| 図版8 | 1号土壤 | D-4グリッド出土土器 |
| | 2号土壤 | 石鐵・石核 |
| 図版9 | 3号土壤 | 2号住居跡出土石器(1) |
| | 4号土壤 | 2号住居跡出土石器(2) |
| 図版10 | 5号土壤 | 2号住居跡出土石器(3) |
| | 6号土壤 | 3・4号住居跡出土石器 |
| 図版11 | 大溝 | 3号住居跡出土石器(1) |
| | 大溝土層断面図 | 3号住居跡出土石器(2) |
| 図版12 | 2・4号住居跡出土土器 | 5・6号住居跡出土石器 |
| 図版13 | 7号住・5・6号土壤・グリッド出土
土器 | 溝・グリッド出土石器(1) |
| | 1号・2号住居跡出土土器 | 溝・グリッド出土石器(2) |
| 図版14 | 2号住居跡出土土器 | 溝・グリッド出土石器(3) |
| | 2号住居跡出土土器 | 溝・グリッド出土石器(4) |
| 図版15 | 2号住居跡出土土器 | 溝・グリッド出土石器(5) |
| | 2号住居跡出土土器 | 溝・グリッド出土石器(6) |
| 図版16 | 3号住居跡出土土器 | 溝・グリッド出土石器(7) |
| | 4号住居跡出土土器 | 溝・グリッド出土石器(8) |
| 図版17 | 4号住居跡出土土器 | 溝・グリッド出土石器(9) |
| | | 溝・グリッド出土石器(10) |

溝・グリッド出土石器00

図版34 溝・グリッド出土石器02

溝・グリッド出土石器03

図版35 溝・グリッド出土石器04

溝・グリッド出土石器05

I 発掘調査に至る経過

関越自動車道新潟線は、東京都練馬区を起点として、本県の川越市・東松山市・上里町を経て群馬県・新潟県新潟市に至る 310 km の高速道路である。すでに、東京川越市間は、昭和46年12月に、また、川越市東松山市間は昭和50年8月に供用が開始されている。埼玉県内のこの供用区間の埋蔵文化財包蔵地の発掘調査は、東京川越市間2遺跡を埼玉県遺跡調査会が、また、川越市東松山市の12遺跡を埼玉県教育委員会が直営で実施し、すでに調査報告書が刊行されているところである。

さて、東松山市から県境の児玉郡上里町に至る、いわゆる東松山以北については、昭和44年4月埼玉県行政推進対策委員会高速自動車道部会幹事会において、5万分の1の地形図に基本計画ルートが示された。この案を、昭和36年度に実施した、埼玉県埋蔵文化財包蔵地分布図と照合すると、20箇所の遺跡と、埼玉県指定史跡杉山城跡（嵐山町）と十条条里遺跡（美里村）が含まれていた。

そこで、この基本ルートに対する文化財保護側の意見を次のようにとりまとめ、高速自動車道部会長（企画部長）あて提出した。

- 1 県指定史跡杉山城跡、県指定史跡十条条里遺跡のルートの変更を検討されたい。
- 2 その他のルート内に所在する埋蔵文化財については、事前調査、発掘調査等により対処可能と思われる。
- 3 出土品が多量にあると予想されるので、資料館・陳列館等の建設による保存について考慮してもらいたい（サービスエリア内でも可）。
- 4 当面事前調査が必要となる関係箇所が多いので、計画的に調査できるよう検討する必要がある。

関越自動車道東松山以北のルートは、丘陵上・丘陵裾部・平野地帯を約36キロメートルにわたって建設されるもので、かなり多くの埋蔵文化財包蔵地が所在するものと予想されたので、昭和45年度、文化庁から国庫補助金の交付を受けて、改めて分布調査を実施した。この調査は、県内の考古学研究者を調査員に委嘱して実施したもので、基本計画ルートの東西約2キロメートルの範囲を対象にした。その結果、244箇所の遺跡が確認され、ルートをどのように変更しても、かなりの遺跡が建設用地内に入ることが確実となった。

昭和45年5月、埼玉県行政推進対策委員会高速道路部会幹事会において、建設省関東地方建設局から、5千分の1の図面によるルート説明、さらに、本年6月上旬には、日本道路公団に事業を委託することになっている、との説明があった。一方、この5千分の1のルート図は、県道路建設課にある地図によって各課が検討することにし、重大な支障のある場合は、5月中に、県企画課を通して建設省へ通知することになった。

それから約1年が経過。昭和46年4月、行政推進委員会高速道路部会幹事会において、関越自動車道設計画にかかる東松山市～上里町間の関連公共事業調査について日本道路公団との打合せ会が行われ、同年8月以降、関係各課による調査が開始された。この年、県教育局内の組織改正が行われ、社会教育課から文化財係が分離し、文化財保護室が新設され、まだ日本道路公団高速道路建

設局と協議の最中であった関越自動車道川越市～東松山市間と並行して、文化財第二係がこの事務に当たった。さて、関連公共事業調査で、文化財保護室が担当した調査は、5万分の1の地形図上にルート案のセンター両側2キロメートル、さらに2千分の1の平面図でセンターの両側100メートルに所在する埋蔵文化財を調べることであった。この調査の結果、5万分の1の地形図を利用したセンター両側2キロメートルでは112箇所の埋蔵文化財が、またセンターの両側100メートルの範囲では、23箇所の埋蔵文化財が含まれていることを確認し、一応この結果を日本道路公団に通知し、埋蔵文化財については、損傷を最少限度にとどめてルートを決定するよう要望した。

この間、日本道路公団は、県指定史跡杉山城跡及び十条条里遺跡をルートから大きくはずす努力がなされた。

昭和47年4月、日本道路公団高速道路建設局から千分の1平面図（設計図）が届けられ、本線内の遺跡分布確認調査が文化財保護室第二係の職員によって東松山側と上里町側からの二班に分かれてセンター杭をたどって幅約100メートルの範囲内で行われ、時期的に地上観察の困難な寄居町の一部を後日に残して、一応次の17箇所を日本道路公団に提示した。

遺跡番号	遺跡名稱	所 在 地	種 別	時 代
滑川 1号	星田遺跡	比企郡滑川村大字月輪字西新井	古墳群	古墳
滑川 2号	寺ノ台遺跡	比企郡滑川村大字水房寺字の台	塚	
嵐山 1号	越畠城跡	比企郡嵐山町大字越畠字城山	城館跡	戦国
寄居 1号	お金塚	大里郡寄居町大字慶原	塚	
花園 1号	台耕地遺跡	大里郡花園村大字黒田	集落跡・古墳群	縄文・古墳
寄居 2号	新堀遺跡	大里郡寄居町大字用土字新堀	塚	
寄居 3号	沼下遺跡	大里郡寄居町大字用土字沼下	集落跡	奈良・平安
岡部 1号	清水谷遺跡	大里郡岡部町大字本郷字北坂	集落跡	縄文・古墳・奈良
岡部 2号	安光寺古墳群	大里郡岡部町大字本郷字清水谷 児玉郡美里村大字古郡字石神	古墳群	古群
美里 1号	塚本山古墳群	児玉郡美里村大字下児玉字西山	古墳群	古墳
児玉 1号	雷電下遺跡	児玉郡児玉町大字浅見字雷電下	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉 2号	飯玉東遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字飯玉東	集落跡	古墳・奈良・平安
児玉 3号	女婿条里遺跡	児玉郡児玉町大字下浅見字四方田前 本庄市四方田字農場	条里跡	奈良・平安
上里 1号	本郷東遺跡	児玉郡上里町大字七木本郷下	集落跡	古墳
上里 2号	愛宕遺跡	児玉郡上里町大字七木本郷愛宕耕地	集落跡	古墳
上里 3号	中掘遺跡	児玉郡上里町大字堤字中掘北	集落跡	奈良・平安
上里 4号	若宮台遺跡	児玉郡上里町大字帝刀字掘の内	集落跡	奈良・平安

日本道路公団の用地買収および工事計画案の整ってきた昭和48年2月、高速道路建設局及び東松山工事事務所と、工事発注予定と埋蔵文化財についての打合せ会が行われた。東松山以北の工事区は、東松山側から滑川・嵐山・寄居・花園・美里・上里の六工区に分かれており、工事発注は、48年11月、上里工区から始まるという。ここで問題となったのは、48年度に発掘調査を実施しなければならないとなると、関越自動車道川越市～東松山市間で発掘調査した遺跡の整理報告書刊行事業とから合って調査員が大幅に不足することになる。そこで、今後の工事発注計画と発掘調査を要する遺跡との関係を詳細に検討し、調査員の人員増に関する資料を整え、教育局内人事担当課と協議を開始した。

その後、公團側と48年度に調査事業を開始する方針で、細部の協議がもたれ、発掘調査から整理報告書刊行に至る調査事業年次もほぼ了解点に達した。

昭和48年4月7日付け東建總第222号で、日本道路公團高速道路建設局長から、埼玉県教育委員会を経由して、文化庁長官あて、昭和42年9月30日付けで締結した「日本道路公團の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」の第1項に基づく協議が行われ、埼玉県教育委員会は「当該地内に所在する埋蔵文化財については、公團と十分協議し、記録保存のための発掘調査を実施する」との副申を受け、文化庁に進呈した。

これについて、文化庁は、昭和48年6月2日付け委保第59号で「当該施行地内の遺跡については工事前に発掘調査を実施すること。重要な遺構を発見した場合には、設計変更等によりその保存に配慮すること。」と回答した。

問題となっていた調査員の人員増も解決し、調査体制も整い、上里町地内の4遺跡の調査経費が48年9月、県議会に上程可決され、昭和48年9月25日付けで日本道路公團東京建設局長あて、発掘調査の実施について、昭和48年度計画書を添えて通知し、10月25日、上里1号(本郷東遺跡)をトップに関越自動車道東松山—上里間約36キロメートル所在する埋蔵文化財包蔵地の調査が開始された。

発掘調査を進める一方、山林や宅地等、時期的に地上観察の困難な場所についても、隨時確認調査を進めた。その場合、新たに次の11箇所が確認され、その都度、日本道路公團に提示し、発掘調査を実施した。

(横川好富)

発 堀 調 査 の 組 織

1. 発 堀

主 体 者 埼玉県教育委員会

教 育 長 石 田 正 利
事 務 局 埼玉県教育局文化財保護課

課 長 杉 山 泰 之
課長補佐 奥 泉 信
木 戸 一 恵

企画調整 埼玉県教育局文化財保護課
文化財第二係長 早 川 智 明
柿 沼 幹 夫
駒 宮 史 朗
本 間 岳 史

庶務経理 埼玉県教育局文化財保護課
庶務係 太 田 和 夫
千 村 修 平
沼 野 勉

発 堀 埼玉県教育局文化財保護課
文化財第三係長 横 川 好 富

中 島 宏

井 上 尚 明

2. 整 理

主 体 者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 井 五 郎
副理事長 沼 尻 和 也
常務理事 渡 辺 澄 夫

庶務經理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
管理部長 伊 藤 悅 光
関 野 栄 一
福 田 浩
本 庄 朗 人

整 理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
調査研究部長 横 川 好 富
調査研究第四課長 増 田 逸 朗
稻 生 美 代 子

3. 協 力 者

嵐山町教育委員会、地元区長及び地元住民

関越高速道関係遺跡一覧表

番号	遺跡名	所 在 地	調査年	時 代	* 遺 槽	報告・遺跡№
A 内 烟	新座市片山字池田		44	縄文前	住居跡9他	埼玉県遺跡調査会報告
B 城	所沢市城		44	縄文前	住居跡3、土墳	タ
1 南大塚	川越市豊田本字中原		46・47	古墳3基	埼玉県発掘調査報告書	第6集(1970)
2 中 鉢	川越市鶴字六畠		46	古墳・平安	土墳、溝	第3集(1974)
3 上 鉢	川越市笠幡字後大町		47	縄文早・弥生	古墳 住居跡14	タ
4 鶴ヶ丘	川越市笠幡字下丹草 鶴ヶ島町鶴ヶ丘字富士見		47	縄文	鍾乳 土墳、溝	タ
5 花 影	坂戸市戸山花影		47	縄文中・奈良・平安	住居跡16、方形周溝墓8	タ
6 駒 堀	東松山市田木字立野		46・48	弥生・古墳	住居跡35、方形周溝墓1、古墳2	第4集(1974)
7 田木山	東松山市田木字相生		47	古墳2基		第5集(1974)
8 弁天山	東松山市田木字弁天山		47	塚5基		タ
9 舞 台	東松山市田木字舞台		46・48	古墳2基、縄文中	・古墳住居跡11	タ
10 宿ヶ谷戸	東松山市西本宿字宿ヶ谷戸		47	中世	井戸2、溝	タ
11 附 川	東松山市石橋字附川		47	古墳4基	・古墳住居跡6、弥生後一括土器	タ
12 青鳥城	東松山市石橋字城山他		47	中世城郭	堀、溝、ピット群、地下式堀	第6集(1974)
13 屋 田	滑川村月輪字西新井		52・53	弥生・古墳	古墳9基、住居跡21	滑川1号
14 寺 ノ台	滑川村水房字寺の台		52・53	古墳・奈良	古墳1基、住居跡2、塚2基	滑川2号
15 中 鐘	嵐山町広野字中那		53	縄文中	住居跡7、土墳、溝	埼玉文報告 第13集(1982)
16 越煙城	嵐山町越煙字城山		52	中世城郭		第20集(1979)
17 台耕地	花園町黒田字竹後		52・53	古墳3、縄文中	・住25、平安・住80、製鉄炉3	花園1号
18 お金堀	寄居町蘿果字西浦		52	塚1基		
19 鶴 卷	寄居町赤浜字鶴巻		52	縄文後	土墳26	
20 新 堀	寄居町用土字新堀		52	塚2基		
21 中井丘	寄居町用土字中井丘		51	縄文中～後	・平安	包含層
22 中 山	寄居町用土字中山		51	中世～近世	炭焼窯2基	
23 長久保	寄居町用土字長久保		51	縄文前	包含層	
24 沼 下	寄居町用土字沼下		51	平安	住居跡24、井戸	
25 平 原	寄居町用土字平原		52	平安	住居跡3、掘立柱1	
26 甘粕山	美里村甘粕字東山		48・49	縄文草～前	・晚～弥・平安	住居跡14、炭焼窯4
27 北 坡	{岡部町本郷字北坂 清水谷		51・52	縄文草・平安	住居跡15、掘立柱9	埼玉文報告 第1集(1981)
安光寺	岡部町本郷字北坂		51	平安	・中世	住居跡23、溝
28 塚本山	美里村下兎玉字西山		49・50	弥生～平安	方形周溝墓9、古墳28、住居跡2	第10集(1977)
29 雷電下	兎玉町浅見字雷電下		49	古墳～平安	住居跡63、井戸	第22集(1979)
30 飯玉東	兎玉町浅見字飯玉東		49	縄文中・奈良・平安	住居跡2、方形周溝墓5	タ
31 後 張	兎玉町下浅見字下モ田		50・51	古墳・平安	住居跡170	埼玉文報告 第15集(1982)
	本庄市四方田堀場					
32 久城前	上里町嘉美字一本松西		50	古墳末	・溝、井戸	第15集(1978)
	本庄市今井字久城前					
33 本郷東	上里町七本木字本郷東		48	奈良	住居跡6	第7集(1976)
34 愛 宮	上里町七本木字愛宮耕地		48・49	古墳	住居跡8、溝、土墳	タ
35 中 堀	上里町堤字中堀北		49	平安	住居跡8	第15集(1978)
	耕安寺		50	平安	包含層	タ
36 若宮台	上里町帶刀字履の内		49・50	奈良・平安	住居跡75	上里4号

II 遺跡の立地と環境

中郷遺跡は、比企郡嵐山町大字広野字中郷 652 番地に所在する。

東武東上線武藏嵐山駅より、北方に約 2.3km の所に位置し、西南には、県道深谷嵐山線が通っている。

嵐山町は、埼玉県の中央部にあたり、西には外秩父山地をひかえ、東には、荒川低地からなる所の比企丘陵上に位置している。この比企丘陵は、都幾川によって形成された沖積地、東松山台地をはさみ、南北の丘陵に分たれており、北部を北比企丘陵（単に比企丘陵）、南部を南比企丘陵（岩殿丘陵又は物見山丘陵）と呼称している。当遺跡は、北比企丘陵（以後比企丘陵とする）上に位置している。市の川により、東松山台地と分かたれており、市の川の北側にあたる古川から越畠・太郎丸にかけての南北に長い地域は、比企丘陵の西部にあたっている。

中郷遺跡は、この丘陵の中央部を南北に走る粕川によって形成された谷底平野を見おろす、東岸に位置している。粕川の支流によって幾筋もの澗谷が形成され、当遺跡も、舌状に突出した独立の丘陵部を呈している。

標高は、70～75m を測り、谷底平野との比高は、15m を測る。

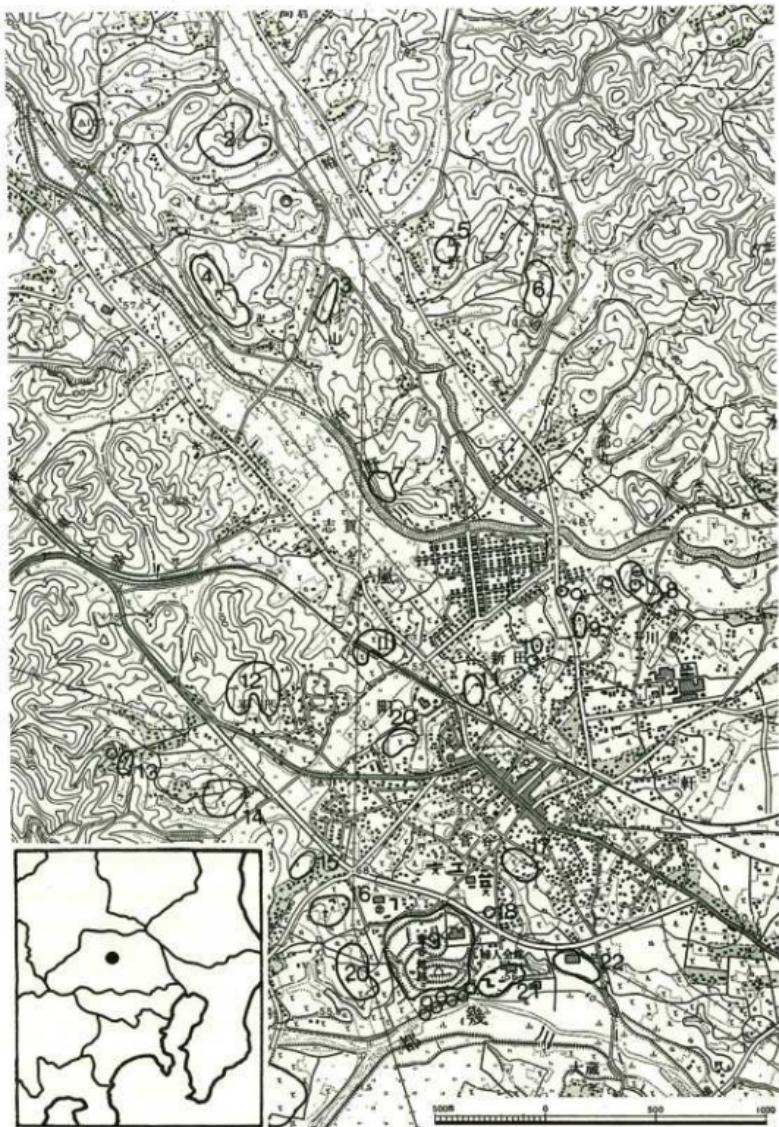
地質を見てみると、第三紀の砾岩・砂岩・泥炭・凝灰岩などにより作られており、桑などの作物が主に作られている。

そういった環境を背景として、歴史の表舞台に登場するのは、畠山重忠を代表とする、中世武士団である。まず畠山重忠の居館といわれている菅谷館跡（註1）を中心とし、北に越畠城（註2）・杉山城（註3）、南に大藏館跡（註4）、小倉城（註5）というような鎌倉街道を軸とした、平安時代末より、戦国時代にかけての館城跡・寺院・板石塔婆などの遺跡及び遺物が知られている。

一方、人々の軌跡が認められたのは、それをはるかさか溯ること、先土器時代である。

しかし先土器時代では、花見堂遺跡（註6）において、尖頭器が検出されているほか、現在あまり知られていない。

一方、縄文時代では、当遺跡の南約 3.3km に、国立婦人教育会館の建設に伴って調査を行なった寺山遺跡（註7）がある。当遺跡では、縄文時代早期の井草式土器ならびに、茅山式土器・加曾利E式土器が出土している。小川町平松台遺跡（註8）では、黒浜・関山・諸磯式期の住居跡が検出され、内陸部に立地した前期の遺跡として知られている。比企地方において確認された縄文時代の遺跡の大半は加曾利E式期に属するものであるが、中郷遺跡においての縄文時代中期の住居跡が7軒及び土壙の検出は、町内に於いて最初の中期の遺跡となるものである。周辺には、東松山市で岩の上・雉子山遺跡（註9）があげられる。岩の上遺跡よりは、住居跡が23軒、土壙が6基検出されている。その内勝坂式期より加曾利E Ⅱ式期の住居は14軒をしめている。他に東松山市には、前山遺跡（註10）、舞台遺跡（註11）がある。都幾川村江光山遺跡（註12）では、直径50～60m の環状墳群があり、加曾利E Ⅰ、Ⅱ式期を中心とした土壙群が400基近く検出されている。後・晚期の遺跡では岩の上遺跡において、掘之内Ⅲ式の敷石住居跡が2軒認められている。雉子山遺跡からは加曾



第1図 遺跡位置図

利B式期の住居跡が検出されている。花見堂遺跡よりは、晩期末葉の土器が出土している。

弥生時代の遺跡はあまり、調査されていない。東松山市中原遺跡（註13）、吉ヶ谷遺跡（註14）、雉子山遺跡、駒掘遺跡（註15）等があげられる。

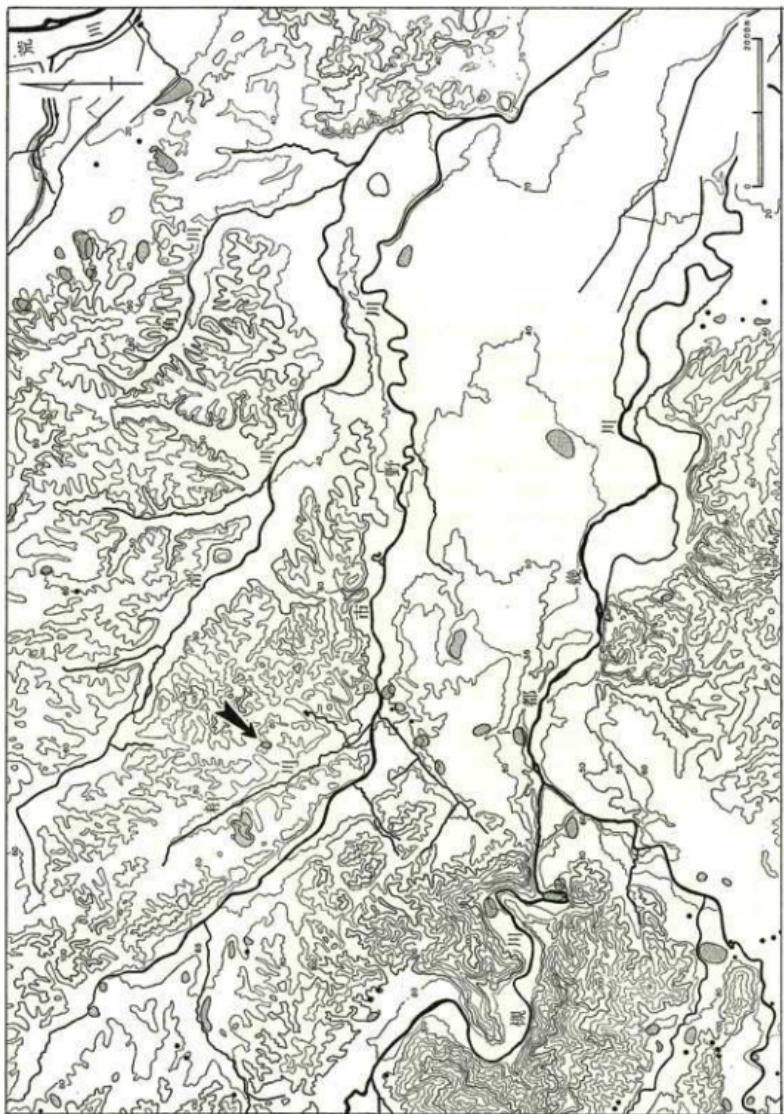
古墳時代に至ると、遺跡数は非常に増加し、寺山遺跡では5基の周溝及び、3基の石室を有する古墳が調査されている。集落跡としては、駒掘遺跡が認められる。

（稻生美代子）

- 註1 柳田敏司他 1977「菅谷船跡」 埼玉県埋蔵文化財調査報告 第6集
 註2 梅沢太久夫他 1979「越畠城跡」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第20集
 註3 小野文雄他 1968「埼玉の館跡」 埼玉県教育委員会
 註4 同上
 註5 同上
 註6 金井塚良一他 1976「花見堂」 嶺山町教育委員会
 註7 今泉泰之 1976「寺山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第9集
 註8 金井塚良一他 1969「平松台遺跡」 考古学資料刊行会
 註9 栗原文藏他 1973「岩の上・雉子山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第1集
 註10 金井塚良一 1963「前山遺跡」 東松山市文化財調査報告 第2集
 註11 谷井寛 1974「田木山・弁天山・舞台・宿ヶ谷戸・附川」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第5集
 註12 梅沢太久夫 1973「江光山遺跡の調査」 第6回遺跡調査報告書 第6集
 註13 金井塚良一 1972「中原遺跡」 東松山市教育委員会
 註14 金井塚良一 1965「東松山市吉ヶ谷遺跡の調査」 台地研究No.16
 註15 栗原文藏他 1974「駒掘」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第4集

遺跡番号表

番号	遺跡名	所在地	時期	備考
1	越畠城跡	越畠字城山910他	室町	山城
2		大字杉山字打越	繩文・古墳・平安	集落跡
3	薬の峰古墳	大字杉山字薬の峰	古墳	円墳
4	杉山城跡	杉山字雁城	室町	城跡
5	中郷遺跡	大字広野字中郷652	繩文・平安	集落跡
6	下郷古墳群	大字広野字金皿254・258	古墳	
7	堂ヶ谷古墳群	大字杉山堂ヶ谷戸	古墳	
8		大字川島字岩花1988他	繩文（中・後）	散布地
9		大字川島字花見堂1513他	繩文	散布地（集落）
10		大字志賀字向原101	繩文	散布地
11		大字志賀字吹上162-1	繩文	散布地
12	物見塚古墳	大字平沢字小石沢176-1	古墳	円墳
13		大字平沢字中谷121, 131	繩文	散布地
14	表古墳群	大字平沢字表	古墳	
15	原古墳群	大字千手堂字原	古墳	
16	向原古墳群	大字菅谷字向原	古墳	
17		大字菅谷字久保	繩文・古墳	散布地
18	鶴荷塚古墳群	大字菅谷字本宿682	古墳	
19	菅谷船跡	菅谷字城	鎌倉～戦国	船跡
20	山王古墳群	大字千手堂字山王	古墳	
21	寺山古墳群	大字菅谷字寺山	繩文（中）・古墳	
22	東原古墳群	大字菅谷字東原	古墳	



第2図 繩文時代中期遺跡分布図

III 遺跡の概観と調査の経過

1 遺跡の概観

比企丘陵は都幾川によって南北各丘陵に分けられ、中郷遺跡の所在する比企北丘陵は、市ノ川支流の侵食谷に刻まれて、多くの分離した複雑な形成過程をもつ丘陵になっている。この丘陵は、西の外秩父山地から半島状にはり出しているが、山地との境界は地形的にはあまり明瞭でなく、北西一南東あるいは南北性の谷が特異な発達をしている。

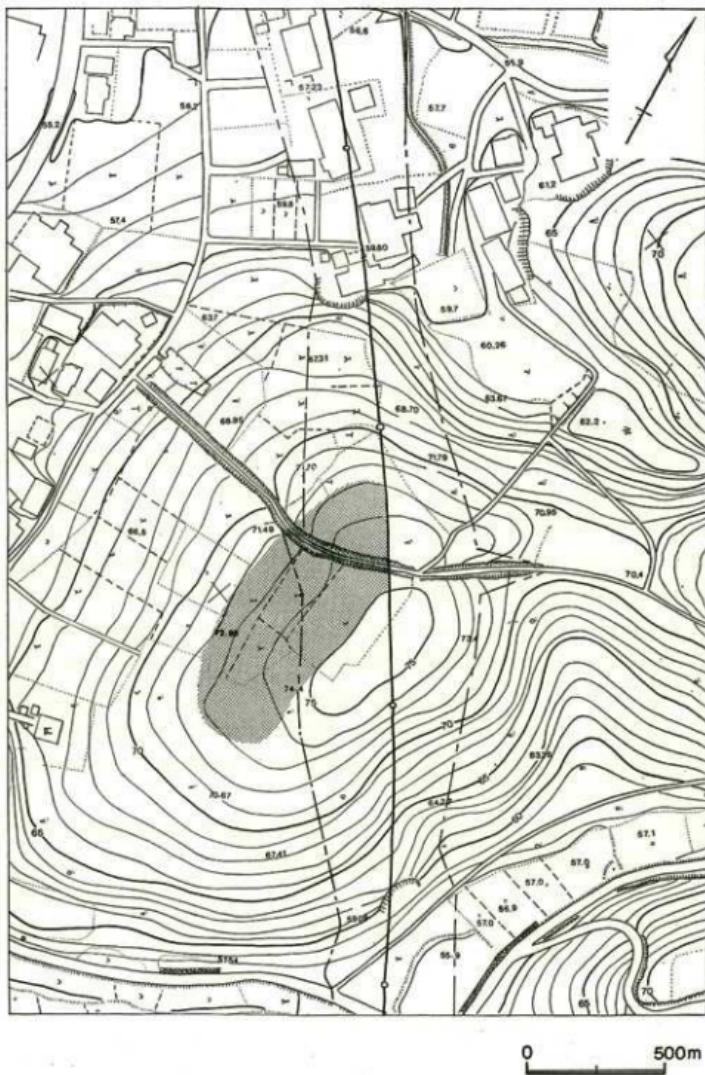
遺跡は、標高71mから74mまでの北側への傾斜地に立地しており、このうち調査を実施したのは関越自動車道にかかる北東部分である。遺構確認面である粘性のある暗褐色土は、確認・調査が非常に困難で、表面踏査でも遺物の散布はあまり見られなかつた。そこで、トレンチによる試掘を実施して、遺構の分布状態を確認してから調査に入った。住居跡の覆土と地山との判別も明確ではなく、遺物の出土と、粒子の粗密等を基準として調査を進めた。このような土質は比企丘陵では多く、常に調査員を悩ましている。特に中郷遺跡では斜面による覆土の流失や、部分的に露呈している岩盤等より困難な調査となつた。

発見された遺構は、縄文中期の住居跡7軒と同期の土壙6基、ピット群1、溝状遺構2本であった。住居跡及び土壙から出土した土器は、勝沼末から加曾利EⅣ式であるが、EⅠ式が多かった。また、石器、特に打製石斧の出土が多く、住居跡はもちろん、溝・表土からも多量に出土しており本遺跡の特徴の一つと言える。住居跡の重複は、1ヶ所のみであり、その分布は密ではなく、地形的にも制約を受けた小規模な集落である。

2本の溝状遺構は、ほぼ南北に走っているが、西側の大溝については、形態や、歴史的環境から中世期のものと考えられるが、出土遺物の大部分は縄文中期の土器、石器であり、溝に伴うと思われるものは措鉢等数点しかない。しかし、周辺には国指定史跡菅谷館跡、県指定史跡杉山城跡をはじめとする館跡が多く分布しており、すぐ北の同じ関越自動車道の路線内には越畠城跡が所在し、すでに調査が実施されている。このような歴史的条件の中で、本遺跡の溝もこれらの館跡と有機的な関連のある施設の一部である可能性が強い。

本遺跡は嵐山町では初めての、縄文中期を主体とする遺跡の調査であり、住居跡は7軒と少ないが、集落の様相と出土遺物等、豊富な資料を提供したと言える。

(井上尚明)



第3図 遺跡地形図

2 調査の経過

発掘区域の確認・試掘から調査終了・器材撤収まで、昭和53年4月4日から7月27日の約4ヶ月間を要した。その間の経過は、以下のとおりである。

4月4日～4月7日 発掘区域の確認とその線引き。遺構の分布状態を確認するために、一部試掘をする。

4月10日～4月14日 試掘を続行する。地形測量の開始と発掘器材の搬入。

4月17日～4月21日 トレンチを設定し、掘り下げを始める。縄文中期の土器片が出土し、落ち込みも確認される。

4月24日～4月28日 トレンチの掘り下げと精査を続行。溝状遺構のプランが確認される。

5月2日～5月12日 事務所の建設と内部の整理を行なう。表土除去を終了し、10m×10mのグリッドを設定し、土層観察のために3ヶ所のテストピットを設ける。再堆積土もあり、遺構確認が困難である。

5月15日～5月19日 各グリッドの精査、遺構確認を行なう。南側のグリッドでは粘土層が露呈している部分がある。西側斜面のグリッドで住居跡が確認され、1号住居跡とする。この周辺にのみローム層が見られる。

5月22日～5月26日 遺構確認を続行。遺物の集中地点が数ヶ所あり、実測・写真撮影後取り上げ、下部の精査を行なう。出土土器は加曾利EⅠ～Ⅱ式が多く、下部からは住居跡が確認された。

5月29日～6月2日 遺構確認作業と並行して溝状遺構の調査を開始する。溝は調査区を区切るようにして、ほぼ南北に走っている。

6月5日～6月9日 遺構確認と溝の調査を続行する。溝の覆土は自然堆積を示すが、縄文中期の土器の出土が多い。

6月12日～6月16日 溝の調査を続ける。2号住・3号住居跡の精査後調査を開始する。地山と覆土の差が明瞭でなく、両者とも堅敏なため調査がしにくい。

6月19日～6月23日 溝の平面図・断面図を作成し、写真撮影を行ない調査を終了する。2号・3号住居跡の調査を続行。

6月26日～6月29日 住居跡出土遺物の実測と写真撮影をする。雨天の日にこれらの図面の整理をする。

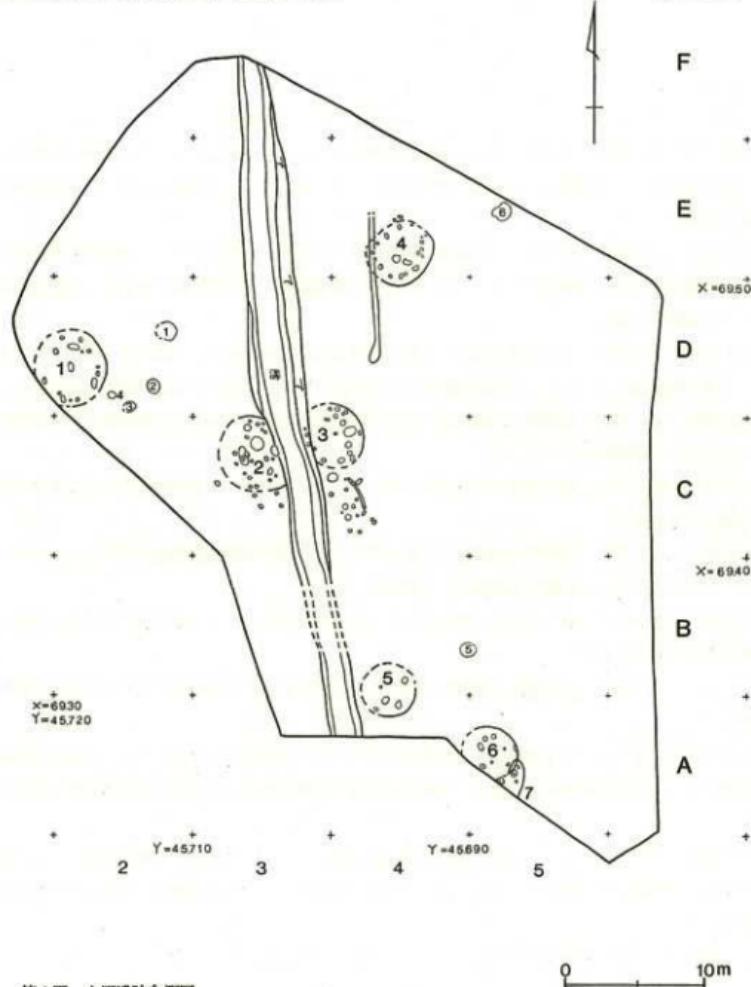
7月3日～7月7日 2号住居跡の調査を終了する。1号住居跡周辺の拡張と4号住居跡の調査を実施する。4号住居跡の覆土は地山と色調では区別できず、粒子の違いや含有物の変化を基にした。

7月10日～7月14日 5号住居跡の確認と調査を実施。1号住居跡周辺の土壤の調査をする。遺物集中地区的実測・写真撮影後、遺物を取り上げる。雨天の日には、出土遺物の水洗及び図面の整理を行なう。

7月17日～7月21日 調査区の南端で6号・7号住居跡を確認する。6号と7号は重複しており、6号が7号を切って構築されている。土壤の調査を終了する。グリッドの東西ラインに沿って

5 m おきに 7ヶ所のテストピットを設定して、土層の観察をして、下部には遺構・遺物のないことを認めた。

7月22日～7月27日 6号・7号住居跡の実測と写真撮影を行って、すべての遺構の調査を終了する。遺跡全体の清掃と再精査をして、7月25日に航空写真を撮影する。事務所及び出土遺物の整理と並行して、補足的な実測を実施する。7月27日には、発掘器材・出土遺物の撤収を行ない、ここに中郷遺跡の現地調査の全てを終了した。
(井上尚明)



第4図 中郷遺跡全測図

IV 遺構と遺物

1号住居跡(第6図・7図)

調査区の西端に位置し、一部は調査区外に及んでいる。本遺跡でローム面で確認された唯一の住居跡であるが、北側への緩斜面のため壁が一部流失している。また、攪乱のため炉の一部と床面が削平されている。

プランは、現存部とピットの位置等から $5.5m \times 5m$ 程の南北に長い梢円形を呈すものと考えられ、炉とP11の中心を通る線を主軸とすると、N-2°-Eを示す。壁は東側半分で確認でき、壁高は最高部で26cmを計る。壁溝は確認できた壁下すべてに見られ、断面U字形を呈し、床面からの深さは10cm程である。床面は耕作による攪乱や斜面による流失のため状態は良くないが、部分的に堅緻な床が残っていて、炉の周辺が堅くしまっており、壁際は軟弱である。

ピットは全部で14穴検出されたが、その位置と規模から主柱穴は、P₁、P₄、P₆、P₈、P₁₁の5穴と考えられる。この五角形を基本として、他にP₅とP₇が深く、支柱的な役割を果たしていたものと思われる。また、P₄、P₆、P₇、P₈に囲まれた中に土壙があり、東西100cm×南北45cmで深さ20cmあり、石鐵が出土している。炉は中央部のやや北側に位置するが、攪乱により西側が削り取られており遺存状態は悪い。規模は現存部から推すと60cm×50cmの南北にやや長い梢円形を呈すと思われ、深さは25cmである。燒土を若干含む暗褐色土が下層に見られた程度で、壁や火床の燒土化は進んでいない。住居跡の中央に攪乱があるが、ここでの耕作時に浅鉢形土器が出土しており、おそらく炉に伴うものと考えられるので、本来は土器埋設炉であったものであろう。

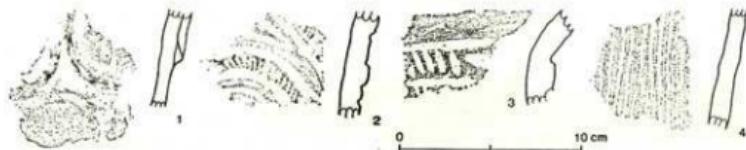
土器(第5図1~4)

本跡は掘り込みが浅く土器は少なかった。1は阿玉台式土器深鉢脚部片。隆帯による梢円区画以下無文となっている。胎土に雲母を含むが顯著でない。2、3は刻み目、連続刺突の加えられた隆帯および沈線により文様構成されている。4は地文燃系L。

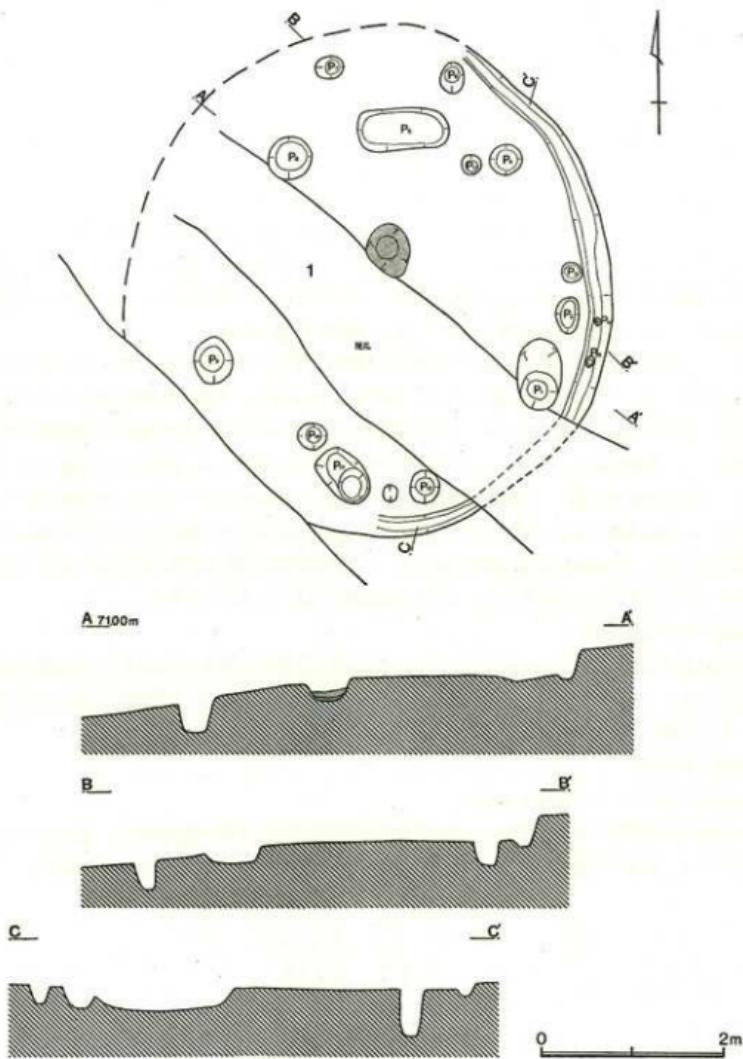
石器(第53図)

石鐵が1点出土しているのみである。

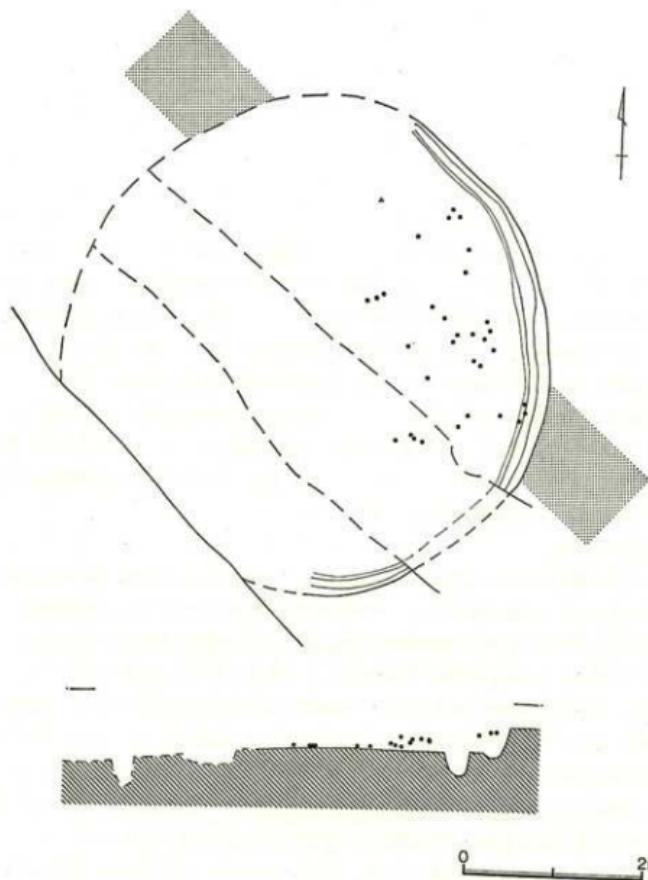
先端部及び左側の一部を欠損している。脚はやや丸味を帯び、基部の抉りは浅い。側縁はやや内彎している。頭部の欠損は、基部より受けた剥離がまわり込んだために、出来たものである。



第5図 1号住居跡出土土器拓影図



第6図 1号住居跡



第7図 1号住居跡遺物分布図

2号住居跡(第8図・9図)

北壁と南壁の一部が確認されただけであり、さらに東側を溝状遺構に切られているため、正確なプラン・規模は不明である。遺構確認面は、この2号住居跡から東は堅い暗褐色土である。南西方に向への緩傾斜地に立地している。

壁は北壁の最高部でも10cmしかなく、南壁では立ち上がりが確認できた程度である。壁溝は見られない。ピットは住居跡とその周辺のものを含めて大小30穴あるが、深度表のとおり深いものは南側と壁外に多く、北壁側でしっかりした主柱穴と思われるものはP₅だけである。また、P₉・P₁₀は浅い窪みであり、その他にも柱穴とは思われないものもいくつかある。床面は地山である暗褐色土を使用しており、この土そのものが堅くしまっているため、床面としての堅敏な部分は確認できなかった。炉と溝状遺構の間はほぼ水平であるが、北壁際がやや高くなっている、炉の西及び南側は自然傾斜に沿って床面も傾斜している。炉は北壁と南壁のほぼ中間に位置し、160cm×65cmの南北に長い楕円形を呈している。周囲に浅い落ち込みがいくつかあり、P₁₁・P₁₄は炉内に穿たれ、P₁₅からは凹石が検出された。焼土は厚い部分で10cm程堆積しており、表面は堅くしまっていた。炉内のP₁₆は焼土層を切って穿たれており、ピット内からは焼土は検出されていない。

本住居跡はこれまで述べてきたように、ピットの数が多く、壁外にも深いピットがあること、そして、炉を切ってP₁₄が存在し、炉の表面が床面のように堅敏になっていたこと等から、重複していた可能性がある。しかし、壁がしっかりしておらず、斜面でもあり住居跡の遺存状態が悪いため、明確な切り合いまでは確認できなかった。

土器(第10~13図)

第10図1は炉跡上につぶれた状態で出土した。外反する無文口縁下が算盤玉状にふくらみ、7箇位の突起を中心として文様構成される。この区画突起は1ヶ所で欠いている。突起間をつなぐ隆帯および文様帶上部には交互刺突、連続刺突が加えられている。胴部には燃糸しが斜走する。一部では施文が交差する。2は現存高32cm、胴径が大きく、口縁部がわずかに内彎する深鉢。覆土中2ヶ所で隣接して出土した大形破片が接合した。口縁胴部とも隆帯による渦巻を中心とし文様構成されるが、頸部、胴部に約1.5cmの無文部を縦、横に残している。隆帯上には部分的に爪形文が加えられている。渦巻内側および胴部の空間には隆帯縁の沈線に先行して平行沈線が充填されている。胴下半では器内面の荒れが著しい。3は口径12cm、現存高17.6cm、円錐形深鉢。口縁の一部、胴下部を欠く。地文に羅文RLを施し、平行沈線により画された文様帶内をV字状のモチーフで分割し、その内部に渦巻、V字状沈線を充填している。4は推定口径17cm、現存高15cm。器形は3に類似するが口肩部が平坦となっている。口縁部以下、沈線、連続刺突、結節沈線により文様構成される。文様帶上部を画する沈線には単位文充填後、ナデられている部分がある。沈線は幅広、丁寧な施文である。5は推定口径30cm、器高13.5cm。口縁部がほぼ直立し、肩部が「く」字状に折れる無文浅鉢。肩部より上は横、以下は斜にヘラみがき整形され平滑となっている。とりわけ内面は入念にみがかれている。底面周囲の磨滅が著しい。6は推定口径16cm、口縁部が「く」字状に内屈する小形深鉢。肩曲部に連続刺突を施し、以下平行沈線、交互刺突、三角沈刻により文様構成される。

第11図1～5は阿玉台式土器。1は口縁波頂部からひねり隆帯が垂下し、区画内には半截竹管により平行沈線がひかれ、これに沿って「C」字形爪形文が加えられている。2は垂下する隆帯を口縁上につまみ上げている。無文であるが本類の中では古相を呈している。3は口縁突起部に三角形の隆帯を貼付している。4はいわゆる扇状把手が変化したもので、隆帯内に渦巻状沈線、結節沈線状の刺突が充填されている。5は梢円突起に2条の結節沈線が加えられている。胎土の雲母含有は2を除きあまり顯著でない。

6～35は勝坂式末葉の土器群。6は内側する口縁部に隆帯により三角形区画が構成される。この区画は勝坂式前半からの伝統をくむ構成で、隆帯両端には幅広の爪形文が施されている。8、9は環状把手が付けられ、以下隆帯により梢円区画され、沈線が充填される。10は口縁部に纏文RLを施し、頸部隆帯下に三角形区画文を施している。14は第10図3、4と同様な円筒形深鉢片。15～25、28、29、31は刻みの加えられた隆帯、これに沿う沈線、三叉文、鋸齒状文、爪形文等により文様構成される深鉢胴部片。30、36、37は浅鉢片。屈曲部上側に刻みが加えられた隆帯により文様構成される。32～34は纏文のみの深鉢口縁部。原体は32、34がRL、33はLR。35は円筒形深鉢の胴下半。文様帶下部を画する隆帯がみられる。地文は纏文RL。

石器（第14～16・21図）

總数33点が出土している。

1・2・4～20は、打製石斧である。1は、側縁の一部が節理面より剥離している。刃部は、先端部からの両面の大きな剥離を行い、薄くなっている。体部上半に自然面を残す。2も同様先端からの剥離が行なわれ、刃部はやや抉れている。風化が著しい。7は、自然石の両側縁に剥離を行い、先端部よりの大きな剥離で刃部を作り出している。8は、左面に自然面を多く残した、分厚い剥片を素材とし、側縁に細かな調整剥離を加えている。刃部は、先端部からの粗い剥離により作り出している。9は、薄い剥片を素材にし、刃部には粗い剥離を行っている。18は、板状の剥片を素材とし、体部下半が扇状に開く形状をしている。以上は、それぞれ完形品である。

6・11・13は、薄い剥片を素材とした頭部片である。11の正面右側縁、13の正面左側縁の抉り部は、やや磨耗している。

14・19は、抉りを有する胴部片である。

以下は、刃部片である。4は、刃部に自然面を残す。10は、周縁に細かな調整剥離を施し、側縁は磨耗している。12は、節理面より折れている。12・15・16の抉り部は、磨耗している。17は、両面より粗い剥離が行なわれ、やや尖った丸刃を作り出している。20は、小形のものである。

3は、薄い剥片を素材とした、局部磨製石斧である。表面は3.5cm、裏面は1.5cm程擦っている。

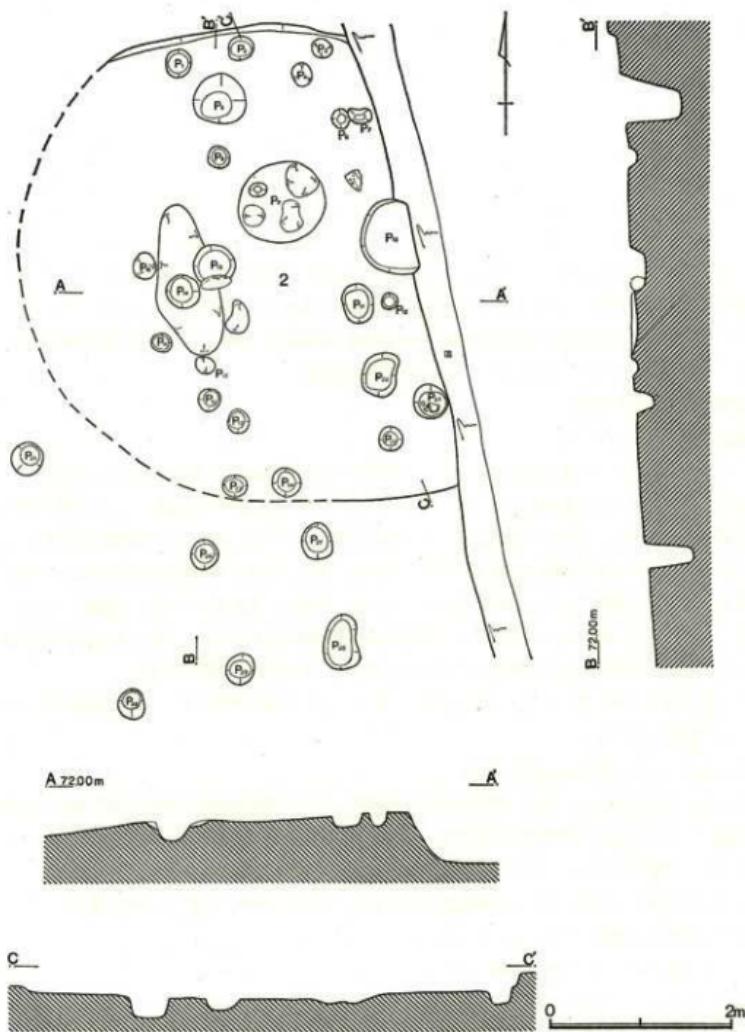
21は、石斧片の周縁を加工したものである。

22・23は薄手の、24は縦長の刃器である。

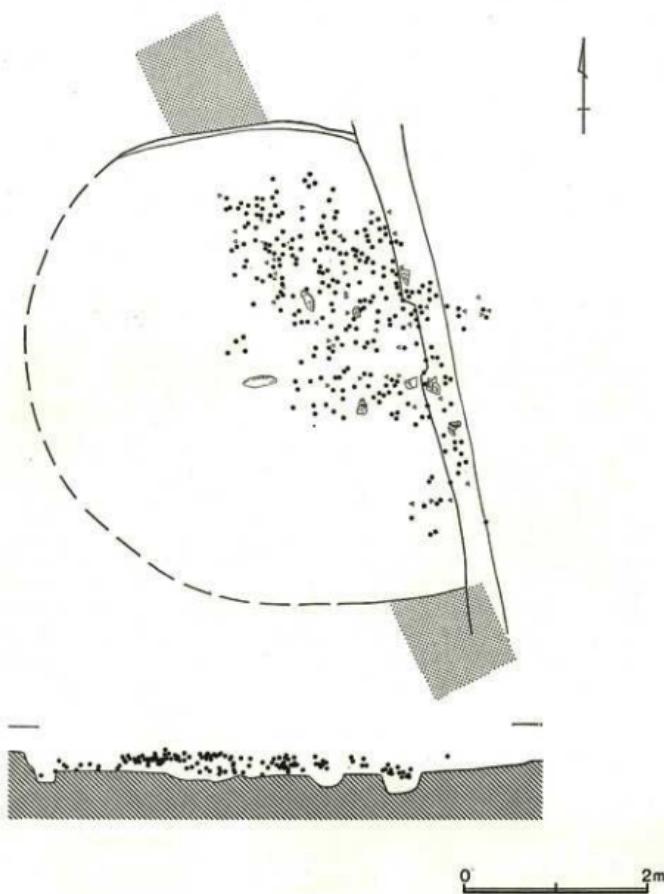
25は、自然石の右側縁上部に、30は、下端に敲打痕を有する敲石である。

26は、裏面に凹穴を有する大形の石皿片である。第21図2も、両面使用の板状の石皿片である。

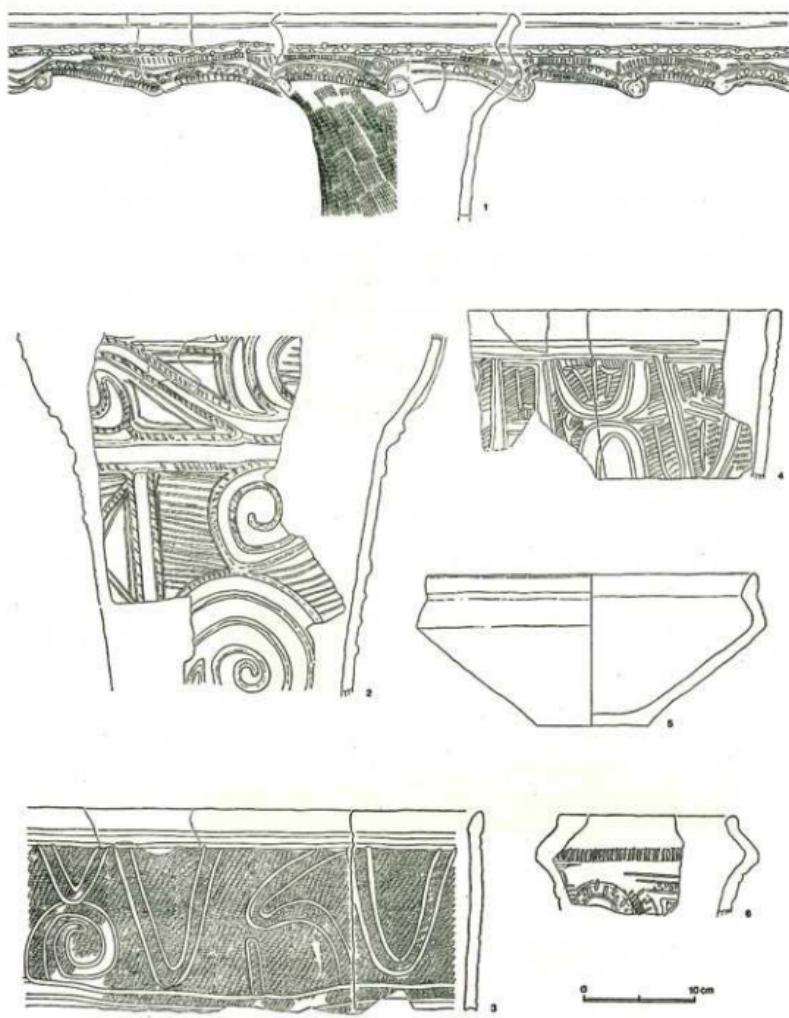
27～29・31・32は磨石である。27・28は、端部に敲打痕を有し、27の裏面には熱を受けたと思われ、黒色を帯びている。29は、裏面に敲打による浅い凹みを有する。



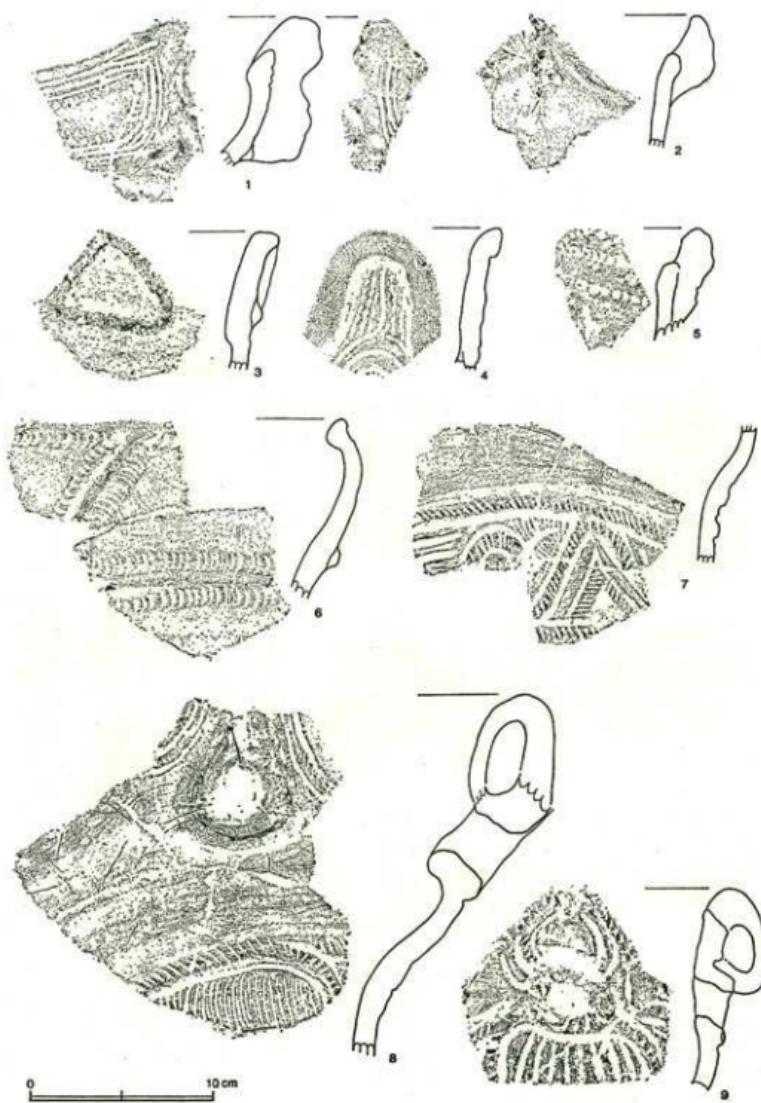
第8図 2号住居跡



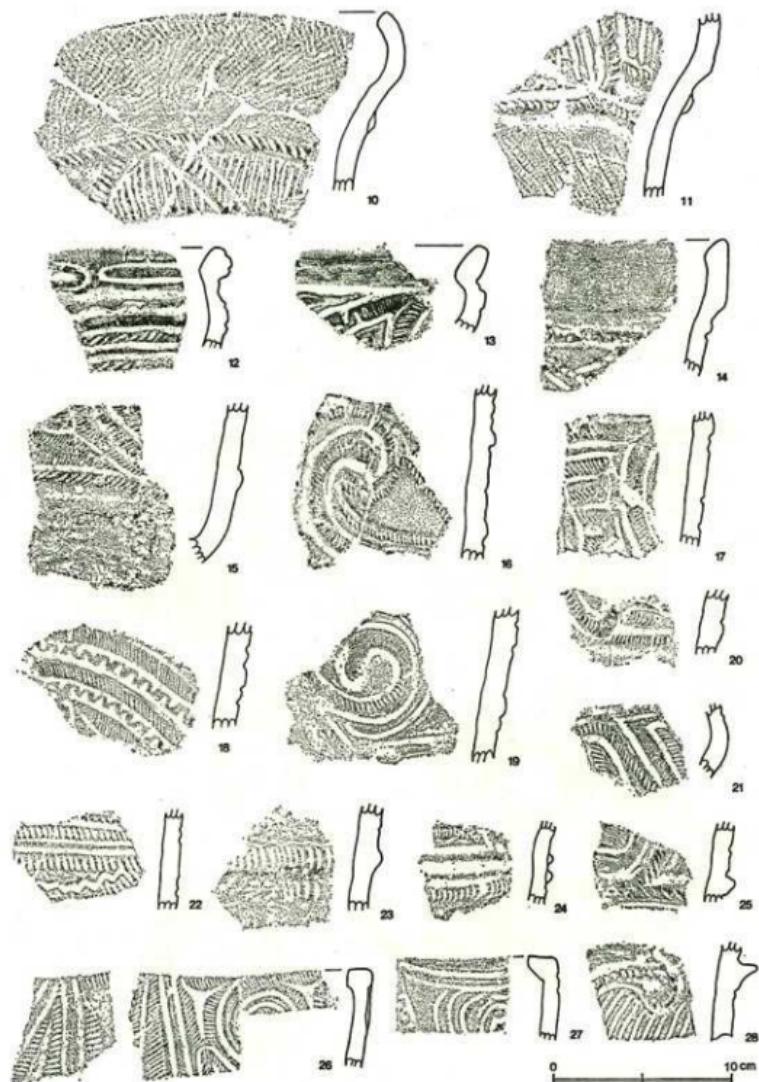
第9図 2号住居跡、遺物分布図



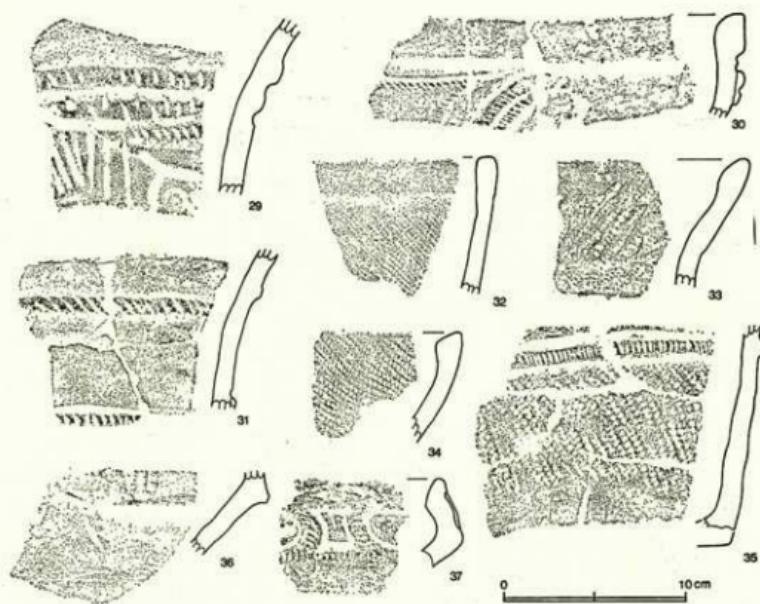
第10図 2号住居跡出土土器実測図



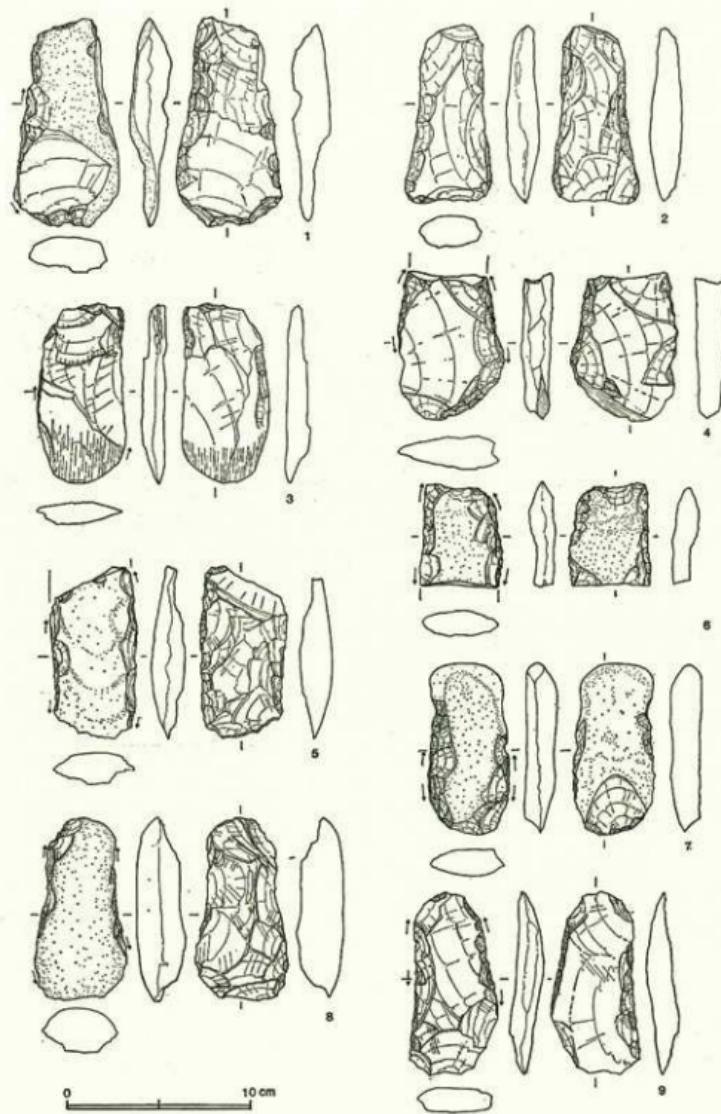
第11圖 2號住居跡出土土器拓影圖(1)



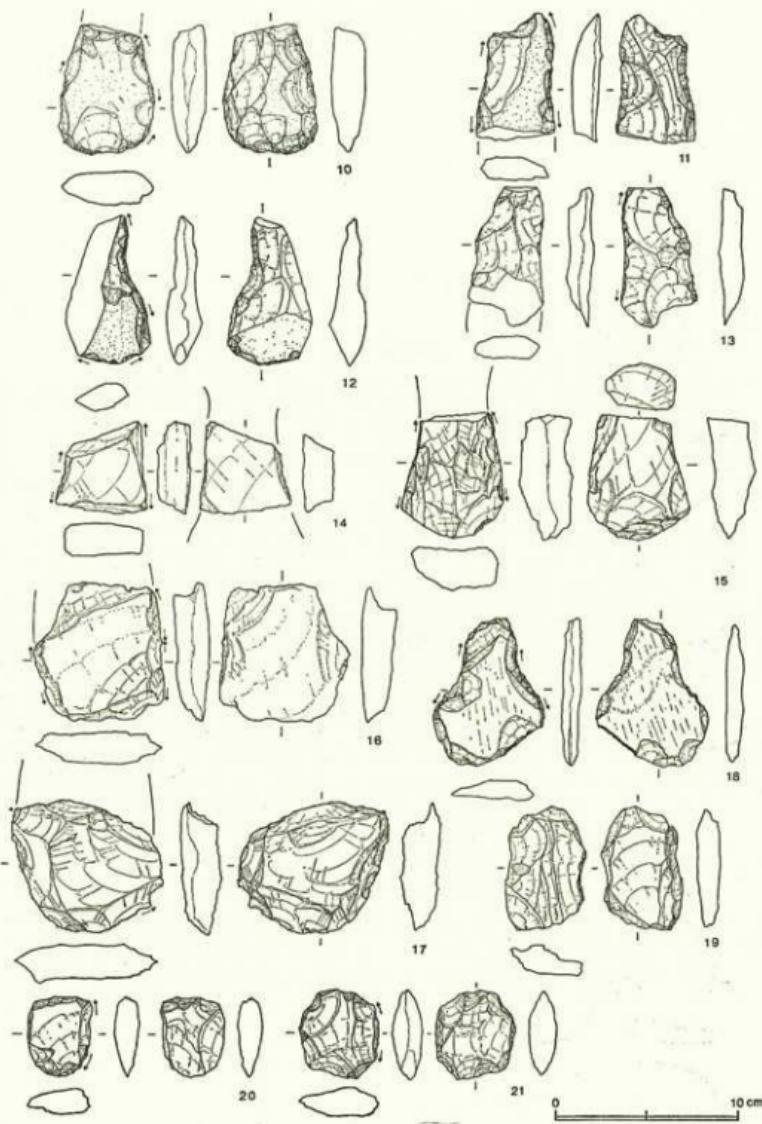
第12図 2号住居跡出土土器拓影図(2)



第13図 2号住居跡出土土器拓影図(3)



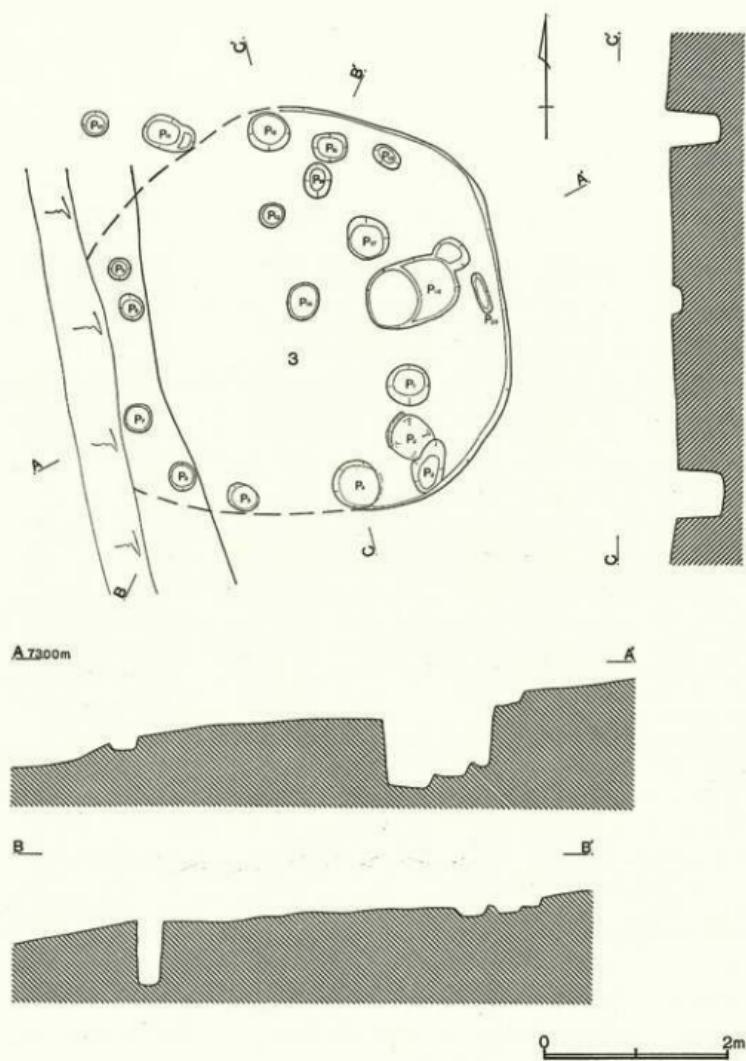
第14図 2号住居跡出土石器実測図(1)



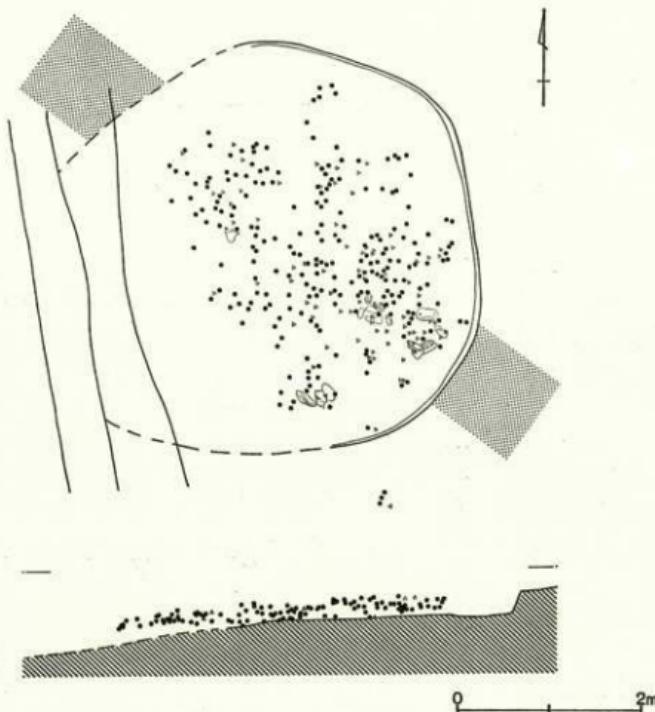
第15図 2号住居跡出土石器実測図(2)



第16図 2号住跡出土石器実測図(3)



第17図 3号住居跡



第18図 3号住居跡遺物分布図

のは北壁と南壁沿いに見られる。柱穴位置については、東壁側の柱穴群がやや内側に入るが、ほぼ壁に沿って巡っている。 P_{18} の西に東西105cm、南北70cm、深さ80cmの土壙があり、形態から2軒とも考えられるが、住居跡との関係については不明である。 P_2 は浅い皿状の落ち込みであり、西壁に沿って土器片が出土している。

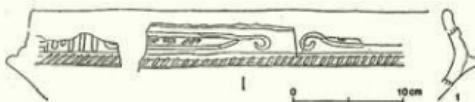
明確に炉と判断できるものは検出されていないが、可能性としてはその位置から P_{18} が考えられる。

土器（第19、20図）

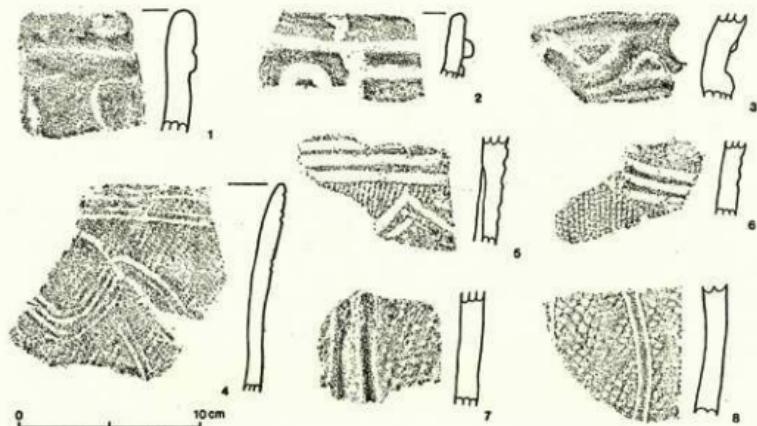
第19図は浅鉢肩部片からの復元実測。口縁部を欠くが、口径は38cm前後と思われる。屈曲部は外側に著しく突出し、幅広の爪形文が施されている。上部には浅い沈線により1対の藤手状モチーフが表されている。同一個体では縱方向の沈線が認められる。地文の縦文RL(?)がかすかに残る。

第20図1～3はキャリバー形深鉢口縁部片。1、2は渦巻、3は波状に隆帯が貼付されている。1の隆帯は扁平幅広となっている。4～6は連弧文土器。4は半截竹管により施文されているが、

やや乱れた連弧となっている。5、6は同一個体、沈線は幅広で深い施文。地文は4が繩文RL、5、6は燃糸L。7は隆帯、8は沈線の懸垂文がみられる。8は半截竹管による施文でやや蛇行する。地文は7が繩文複節RLR、8はRL。



第19図 3号住居跡出土土器実測図



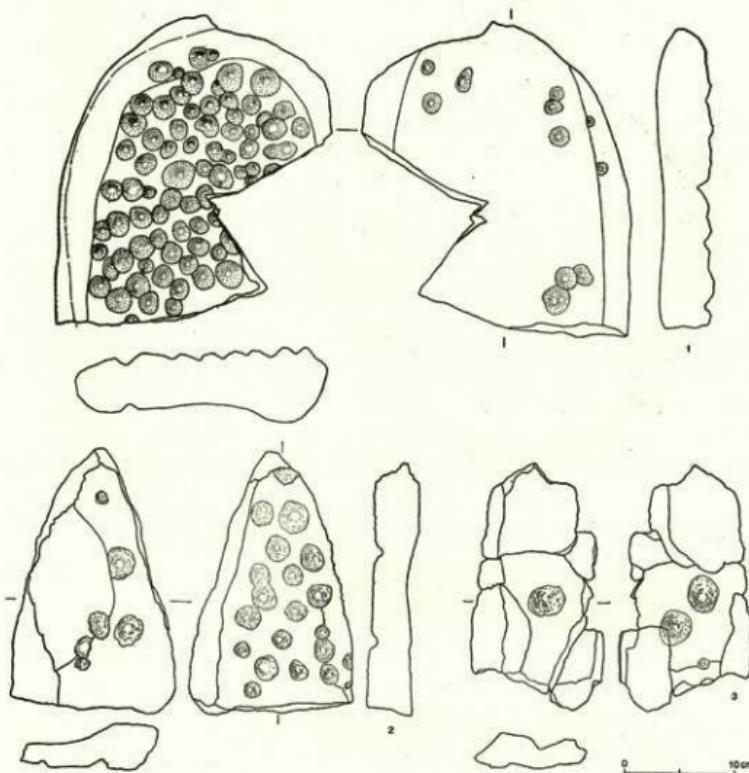
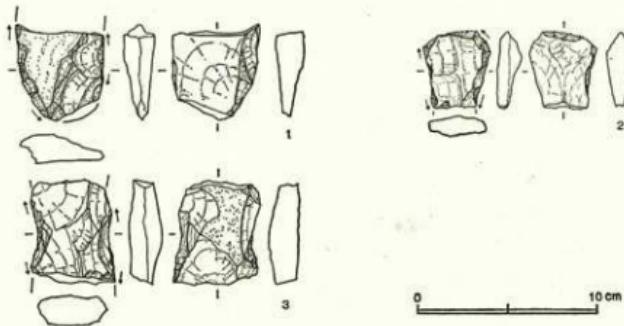
第20図 3号住居跡出土土器拓影図

石器（第21図）

1～3は、打製石斧である。いずれも一部欠損している。1は、先端部を一部欠くが、刃部先端方向からの剥離がなされ、結果刃部が薄く作出されている。3の側縁抉り部には磨耗痕が観察される。4は大形の縁取りを有する石皿の破片である。表面は良く磨かれており周囲には小さな凹みがあり、裏面は、多数のロート状の凹みを有するものである。5は板状の凹石の一部であり、ロート状の凹を有する。

3号住出土石器観察表

番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
1	A-3.4	(4.8)	4.7	1.6	49.0	千枚岩	P 3 頭部・刃部欠
2	A-3	(4.2)	3.7	1.2	25.0	疊泥片岩	刃部欠
3	A-3	(5.6)	4.6	1.7	70.0	疊泥片岩	フタ土 頭部・刃部欠
21-1	F-8	(26.5)	(21.0)	6.0	4,200.0	角閃石輝石安山岩	弱欠
21-3	F-6	(20.0)	(12.0)	2.9	835.0	疊泥片岩	



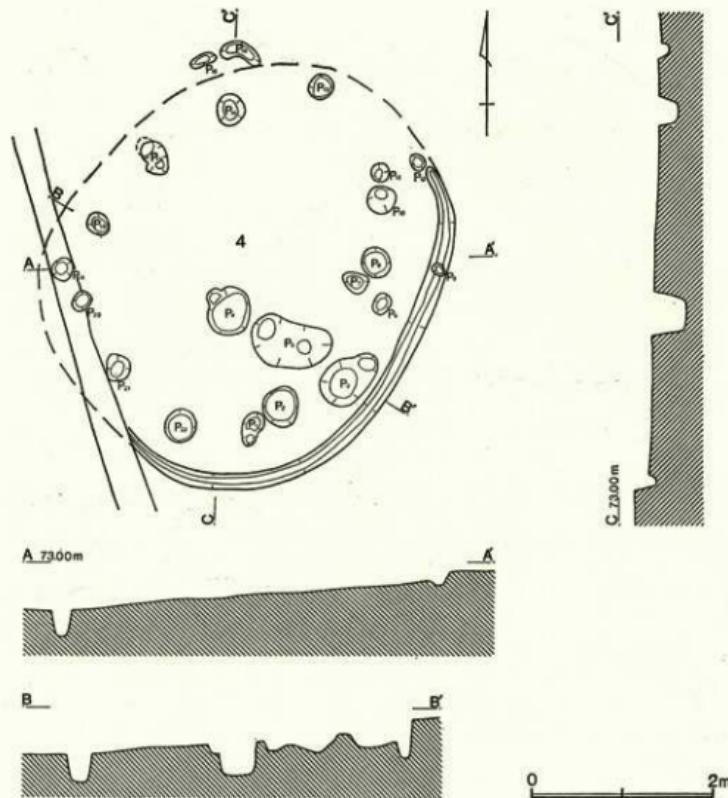
第21图 2·3号住居跡出土石器実測図

4 号 住 居 跡 (第22図・23図)

他の住居群の流れからやや北にそれた北西方向への傾斜面に位置し、西側の一部を小溝に切られている。粘性の強い褐色土を掘り込んで構築されており、覆土中には炭化物の粒子が含まれていた。

北壁および西壁は検出されなかったが、柱穴の位置から、プラン・規模を推定すると、南北 4.8 m、東西 4.5 m 程の橢円形を呈すると思われる。

残存している東南壁も立ち上がりはわずかであり、壁溝が確認できた程度である。壁溝は幅 20 cm、深さ 10 cm を計り、断面は U 字形を呈する。床面は自然地形に沿って北西側へ傾斜しており、特



第22図 4 号 住 居 跡

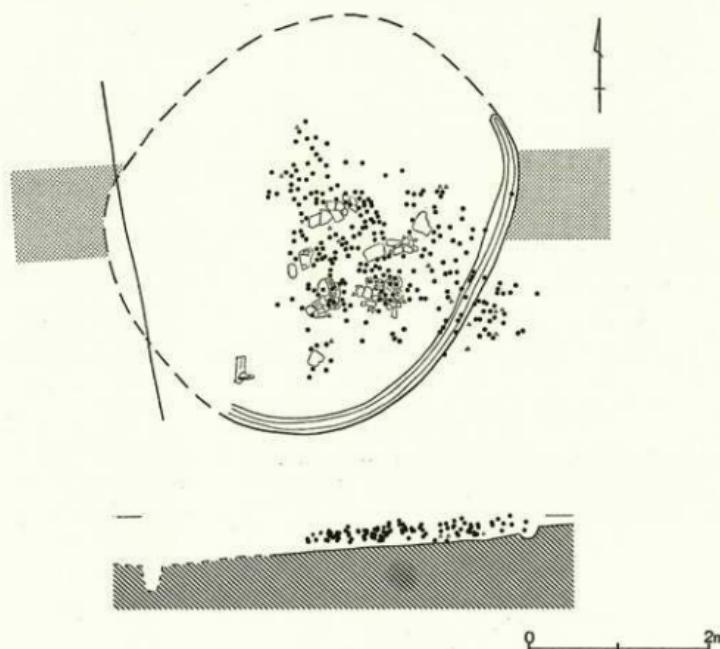
に堅敏な部分は確認されなかった。ピットは全部で22穴あるが、このうち柱穴は壁に沿って巡る10穴程であろう。P₁₄、P₁₅は壁柱穴あるいは壁溝の一部と思われるが、これを住居跡のプラン、規模推定の目安とした。

覆土中からは、炭化物粒子と焼土粒子が確認されたが、炉の形態をなすものではなく、その位置からP₁₄が可能性として考えられる程度である。

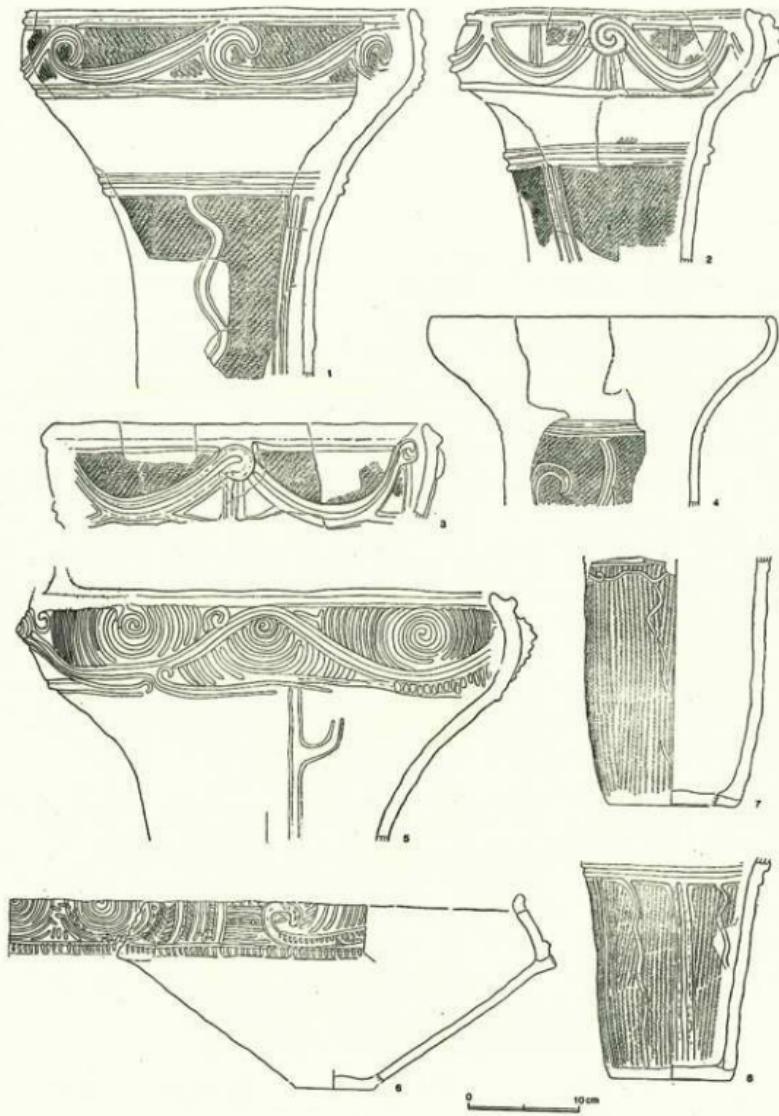
土器 (第24～28図)

本跡ではその東側に遺物が集中しており、加曾利E I式がまとまっている。

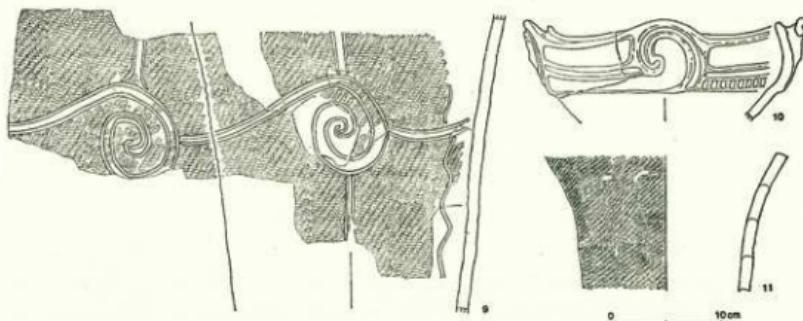
第24図1は推定口径35cm、現存高32.5cmを測る。口縁部の連結渦巻文は残存部からすると7単位構成と思われる。頸部無文部は口縁部文様帶に比べ広い。胴部は蛇行、直行する隆帯が貼付されている。懸垂文は各3条と思われる。地文は繩文RL。2. 推定口径25cm、現存高22.5cm。口縁部文様帶は隆帯により椭円区画され、縦に2条の沈線が加えられる。区画は5単位構成と思われ、1ヶ所では隆帯連結部が渦巻状に突起している。胴部には3ヶ所に隆帯懸垂文が貼付されている。地文は繩文RL、頸部無文部に一部残存している。3. 推定口径33.5cm、口縁部文様帶は2と同様な



第23図 4号住居跡遺物分布図



第24図 4号住居跡出土土器実測図(1)



第25図 4号住居跡出土土器実測図(2)

構成をとる。地文繩文RL。4. 推定口径31cm、現存高17cm、無文口縁部が大きく外反し、口唇部が内彎する深鉢。頭部沈線以下、渦巻状沈線が描かれる。地文繩文RL。5. 口径41.5cm、現存高22.5cm。覆土中に横転、つぶれた状態で出土している。口縁部文様帶内に2対の渦巻状小突起をもち、うち1ヶ所では口唇上に突出する。突起間は波状沈線でつながれ、渦巻に沿って沈線が充填される。突起間3区画では両端および文様帶下部に小渦巻が施文されるが、のこり1区画(実測図右側)ではこれを欠き、三叉文、短沈線となっている。胴部2ヶ所に懸垂文が施されている。胎土に大量の小石、砂を含み器表に目立つ。6. 肩部径39.6cm、現存高15.7cm、肩部が「く」字状を呈する浅鉢口唇部を欠くが、割れ口は磨かれ再成されている。文様は渦巻状隆帯、平行沈線、刺突によって構成される。沈線は深く、各刺突に先行して施文されているが、肩部端の連続刺突は上の沈線と相前後する部分がある。肩部以下は底部ちかくまで丁寧にナデられ平滑となっている。器厚7~8mmとうすいつくり。7. 底径11.5cm、現存高22cm。頭部以下直線的に底部に至る。沈線は浅く、蛇行する懸垂文は一部で途切れる。地文撲糸L。8. 底径10.8cm、現存高19.5cm。直行、蛇行する各5本の懸垂文が貼付されている。隆帯の太さにバラつきが目立つ。地文撲糸L。9. 現存部最大径27cm。大形深鉢胴部。垂下、蛇行する沈線間に横に連結する渦巻文を施文している。地文繩文RL。10. 推定口径21cm、現存高9cm。2対の横状渦巻突起をもつ。突起間は隆帯で連結され、示した1区画のみに文様帶下部に短隆帯が貼付されている。器厚約8mmとうすいつくり。器面の剥落が著しい。11. 現存高12cm、繩文RLのみの深鉢胴上部、輪積み痕が明瞭で残存部に4段の接合部が観察できる。

第26図1~14はキャリパー形深鉢口縁部片。第24図1~3と同様の文様構成。1~8は渦巻文を基点としその間を2本の隆帯でつなぐもの。3は渦巻部が突起する。9~13は区画隆帯部分片。14は隆帯が連結せず、いわゆるクランク文にちかく隆帯間の沈線先端は蔽手状となっている。地文は3、5、7、11、13、14が撲糸L、1、9が繩文RL、12は繩文LR。地文の施文はすべて隆帯貼付に先行している。15~24は深鉢頭部および胴上部片。15は無文部が幅広である。15~22は隆帯、23、24は沈線の懸垂文が施されている。地文は16、17、21、23が繩文RL、19、22、24が撲糸L、

20は条線文。25～39は深鉢胴部、底部片。26～39は直行、蛇行する懸垂文が貼付されている。25は沈線懸垂文間が微隆起線状になっている。34、36は同一個体。38は底部接地面にまで隆帯懸垂文がのびる。地文は25、28、30～33、35が繩文RL、27が繩文LR、34、36～39が撚糸L、26、29は撚糸L(?)。

石器 (第29～31図)

1～9は、打製石斧である。

1～5は、頭部と刃部の幅がほぼ同じで、いわゆる短冊形を呈するものである。1は、厚みがあり断面はやや彎曲をなす。4・5は表面に自然面を残す。いずれも、厚みのある偏平な剥片を素材とし、側縁には刃つぶしが認められる。一方断面は長方形を呈する。6は、側辺は直線的であるが、下半部に致りやや広がりを見せてている。7は、先端が尖った頭部片である。8は分鋸形を呈する。裏面及び刃部側縁に自然面を残す。刃部は、先端部から両面に剥離を行い作出されている。9は、大形の分鋸形石斧片である。刃部には粗い剥離が施されており、銳利になっている。

10は自然面のカーブを利用した疎の下部に剥離を行い刃部を作り出しておらず、疎器として用いられたものであろう。

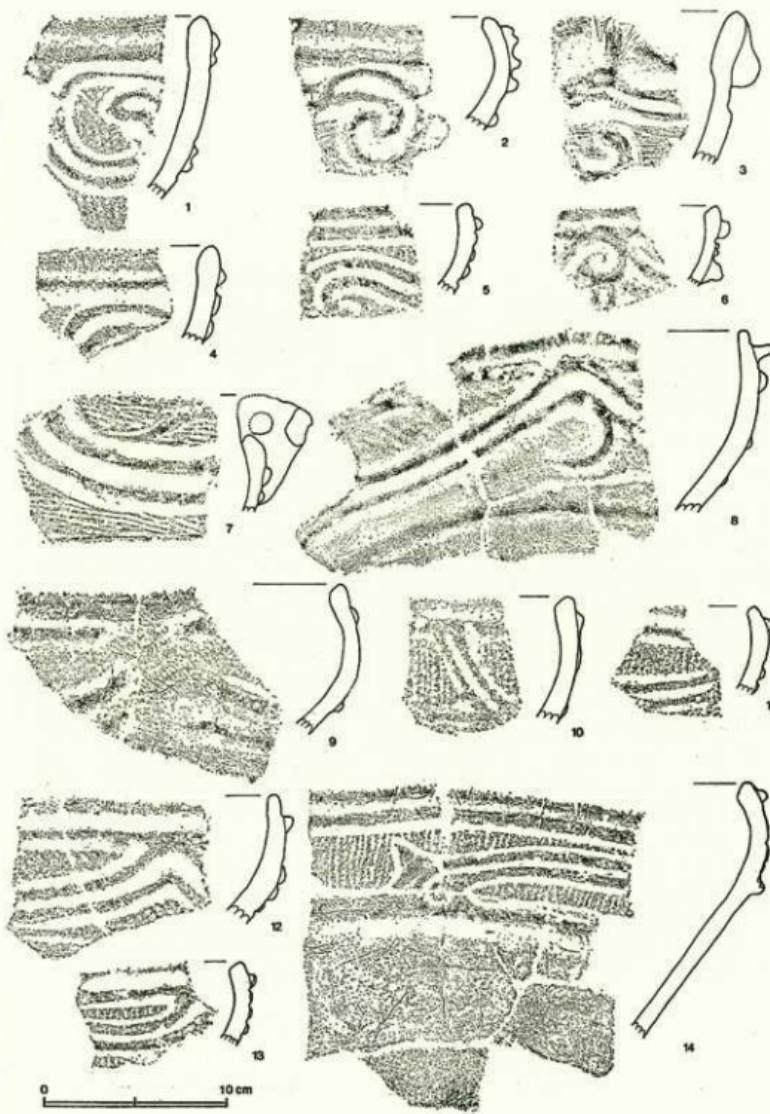
11・12は、薄い剥片の側縁に刃部を作り出したものである。13は、偏平な橢円形の剥片である。

14は、石皿の破片である。板状を呈するもので、側縁もよく研磨されている。磨面である内側にはロート状の凹みが付されている。一方、裏面は筋理面で剥離したものと思われる。

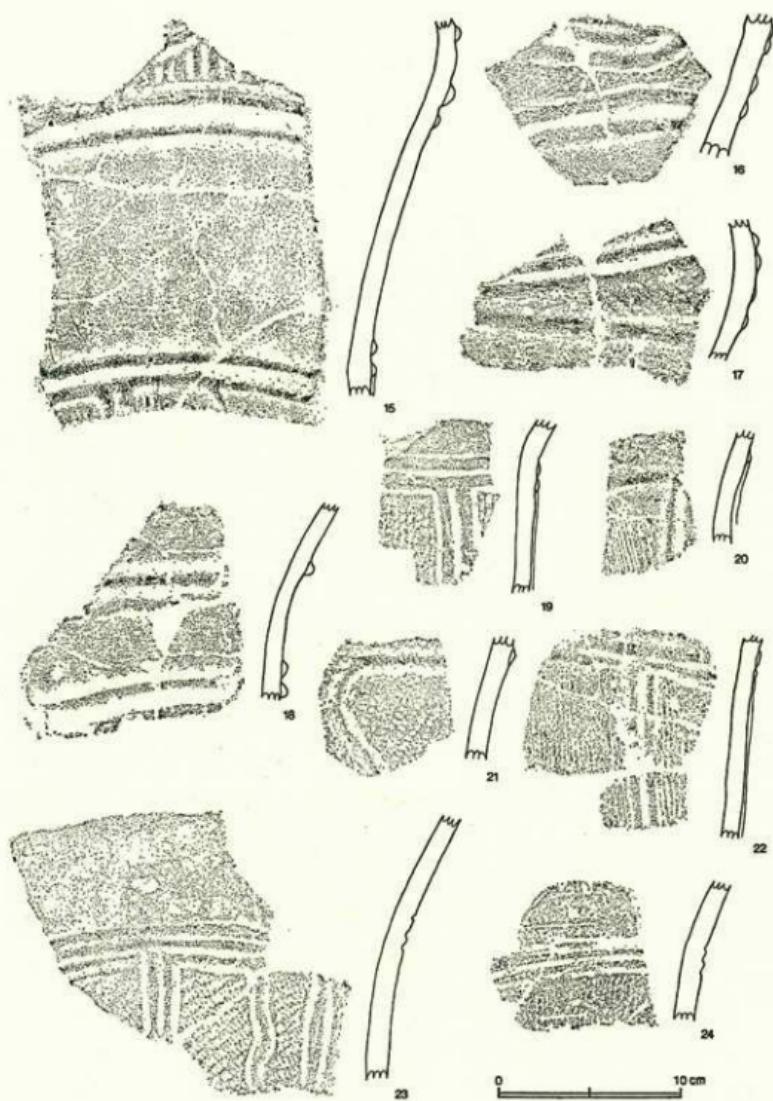
15は、棒状の疎の下端に敲打痕を有する敲石である。16・17も敲石である。

18は、方形を呈しており、全面に渡り丁寧な磨面が残されており、側縁には、1条の溝状の磨痕があり、砥石として用いられたものであろう。

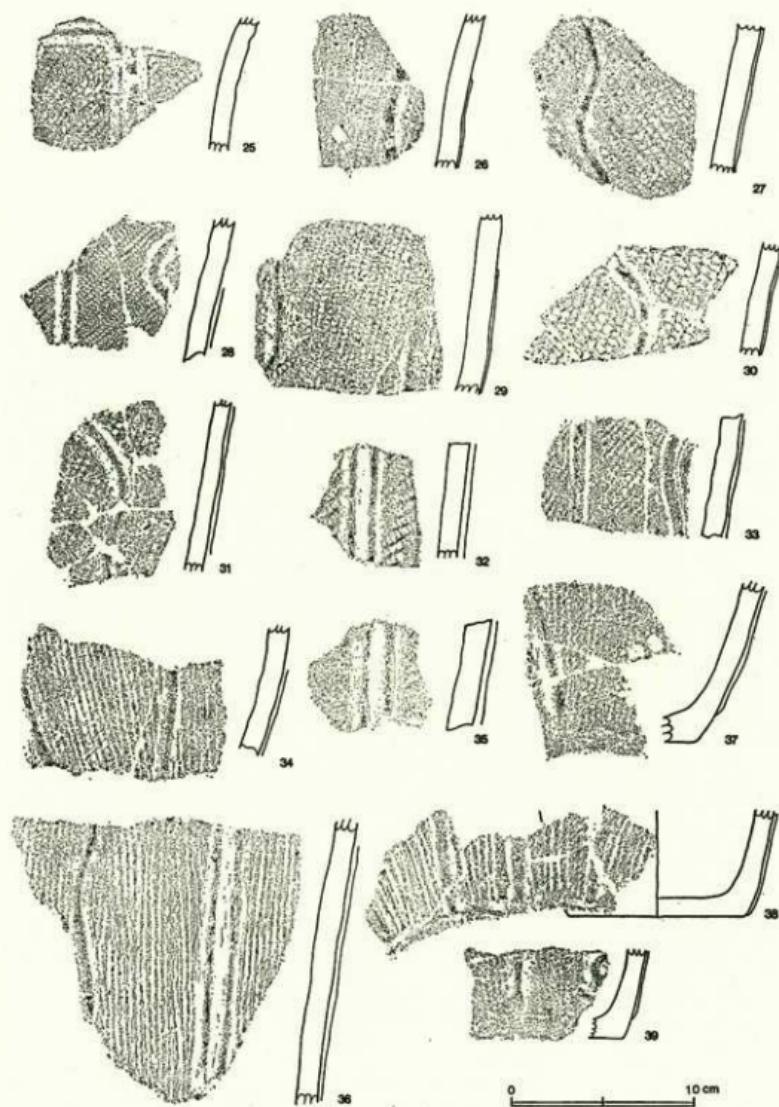
19～21は磨石である。平面形態は、橢円形・円形・隅丸長方形を呈する。21などは、側面が面取りをしたように明瞭な磨面を有する。すべて敲打による凹穴を持ち、凹石としても使用されている。



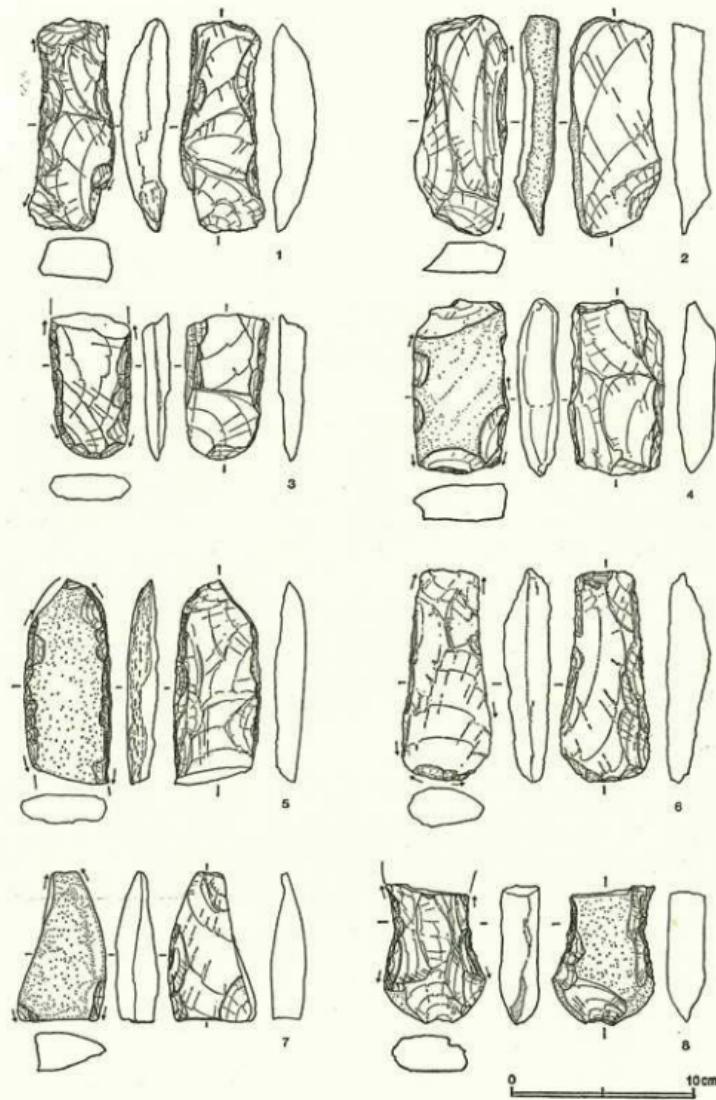
第26圖 4號住居跡出土土器拓影圖(1)



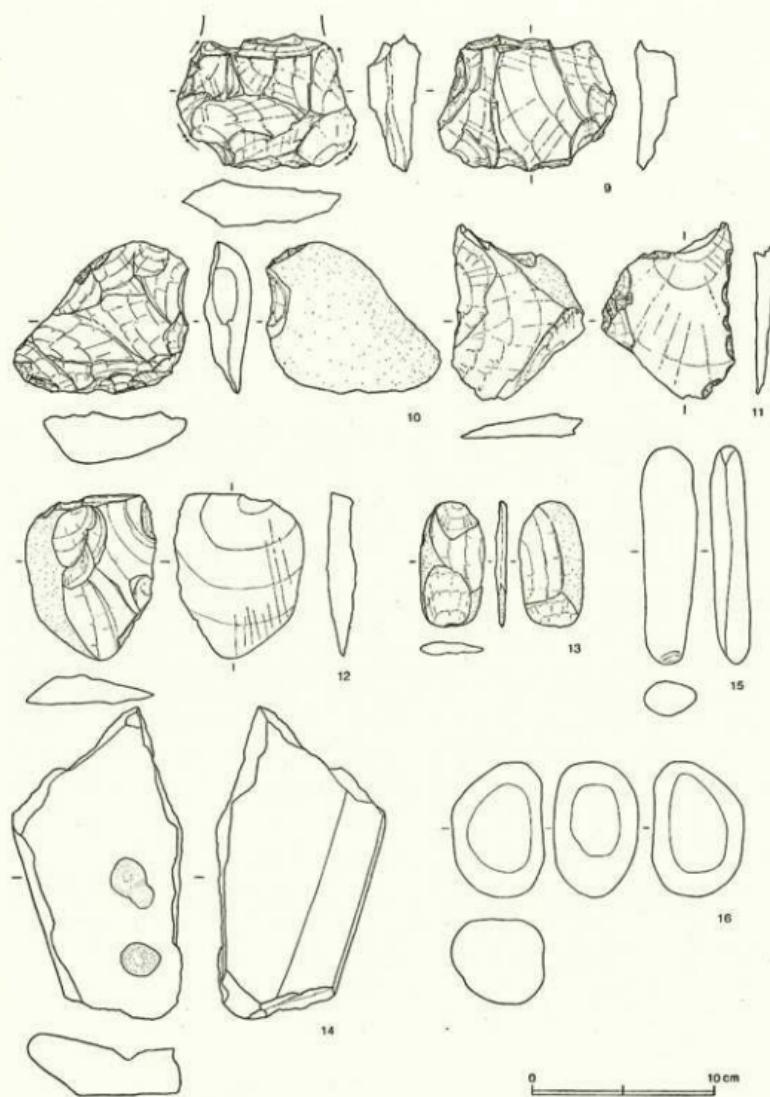
第27図 4号住居跡出土土器拓影図(2)



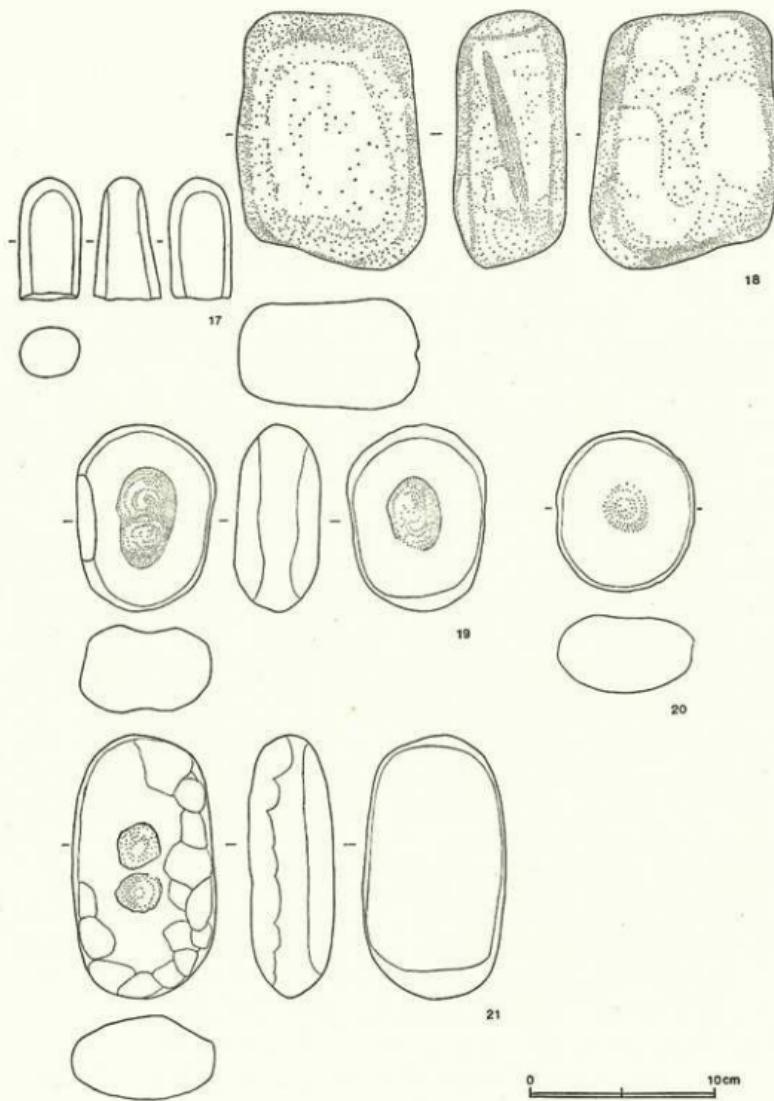
第28図 4号住跡出土土器拓影図(3)



第29図 4号住居跡出土石器実測図(1)



第30図 4号住居跡出土石器実測図(2)



第31図 4号住居跡出土石器実測図(3)

4号住出土石器観察表

番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
1	A-4 b	11.4	4.1	2.4	154.0	フォルンフェルス	78 完
2	A-4 b	11.9	4.7	1.7	187.0	緑泥片岩	197 完
3	A-4 b	(7.8)	4.4	1.4	77.5	石墨片岩	214 頭部欠
4	A-4 b	(9.5)	5.2	1.9	174.0	石墨片岩	173 //
5	A-4 b	(10.8)	4.7	1.6	139.0	中粒砂岩	76 刃部欠
6	A-3 b	11.3	4.9	2.3	167.0	石墨片岩	110 完
7	A-2 + 3	(8.0)	(4.6)	1.9	105.5	フォルンフェルス	刃部欠
8	A-3 + 5 a	(7.2)	5.5	2.1	122.0	フォルンフェルス	190 頭部欠
9	A-5	(7.2)	9.5	2.5	185.0	フォルンフェルス	19 頭欠
10	C	(8.0)	(8.9)	2.8	241.0	細粒砂岩	75
11	D	(8.6)	(7.0)	0.9	80.0	頁岩	70
12	D	(8.8)	(6.8)	1.6	118.0	フォルンフェルス	213
13	D	(5.8)	3.5	0.7	2.1	千枚岩	184
14	F-1	(16.8)	(9.1)	2.9	691.0	緑泥片岩	260 頭欠
15	E-1	11.7	3.0	1.8	104.0	フォルンフェルス	271
16	E	7.3	4.9	4.5	267.0	チャート	232
17	E-1	(6.5)	3.4	2.7	11.5	中粒砂岩	14欠
18	H	13.5	9.8	5.8	1,100.0	中粒砂岩	34
19	F-7	9.9	7.5	4.7	472.0	細粒砂岩	146
20	F-7	8.5	7.4	4.0	425.0	閃綠岩	236
21	F-7	14.1	7.7	4.4	736.0	石英閃綠岩	157

5号住居跡(第32図)

耕作により北側の大部分が削平されていて、南壁と壁溝の一部およびP:周辺の床面だけが残っているという状態であるため、プラン・規模は不明である。

壁高は最高部では20cmを計るが、ほんの一部であり他は遺構確認面・床面とも安定していない。壁溝は最大幅25cm、最小幅15cmであるが、浅くてしっかりしていない。床面も安定した部分はP:と壁溝の間だけである。ピットは5穴発見された。現存する床面から推定した深さは、すべて50cm前後ある。炉は確認されなかった。

土器(第33図)

1は口縁部がほぼ直線的にひらき、口唇部がわずかに外反する深鉢。口縁部に沈線V字状のモチーフが描かれる。口唇部内面は浅く窪む。2はキャリバー形深鉢口縁部片。隆帯により梢円区画され、内側縁を半截竹管によりなぞっている。頭部は条線文となっている。3は区画内に幅広沈線を充填している。施文により沈線間が盛り上がり隆帯化している。4は口唇外部に竹管による交互刺突を加えている。刺突は深い。5~10は深鉢胴部底部片。5は地文捺糸し。繩はかたく捻られ節間がせまい。6は無文部以下、直行、蛇行する沈線懸垂文が施文されている。7の地文は7本単位の条線文。連弧文の一部がみられる。8は懸垂文に接して渦巻状のモチーフを施文している。9は7本単位の条線文土器。10は蛇行する隆帯懸垂文間に横にのびる隆帯を貼付している。地文は条線

文。

石器（第34図）

1は、薄手の剥片を利用しており、両側縁には粗い調整剥離が加えられている。形状は、側縁がゆるやかな曲線を描き、刃部はやや尖る。スクレイバーとして使用されたものとも思われる。

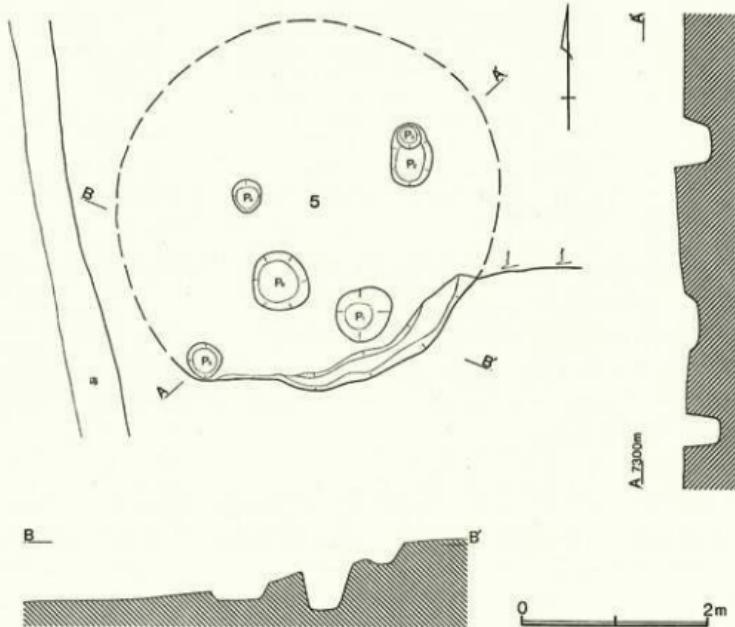
2は、短冊状を呈する打製石斧である。頭部のみ厚く、他は薄く作られている。刃部は、両面より大きく剥離され、鋭利になっている。

3・4は、薄い剥片を利用し、側縁に細かな剥離を有したもので、打製石斧と思われる。

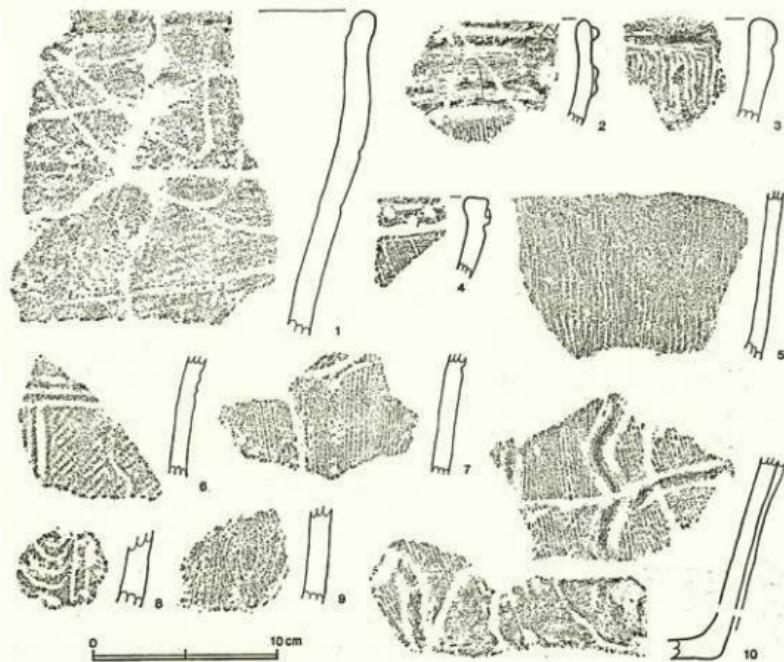
5は、自然面を持つ剥片を素材とし、裏面下部に粗い調整剥離を行ない、刃部を作り出したものである。6も同様、剥片の上部に刃部を作り出した刃器である。7は、棒状の自然石に主要剥離を、7は、棒状の自然石を素材とし、右側縁及び頭部に細かな剥離を加えた、使用痕のある剥片。

8は、磨面を有する磨石である。表面の一部が熱を受けたと思われ、黒色を帶びている。

9は、全体によく磨かれた磨石である。



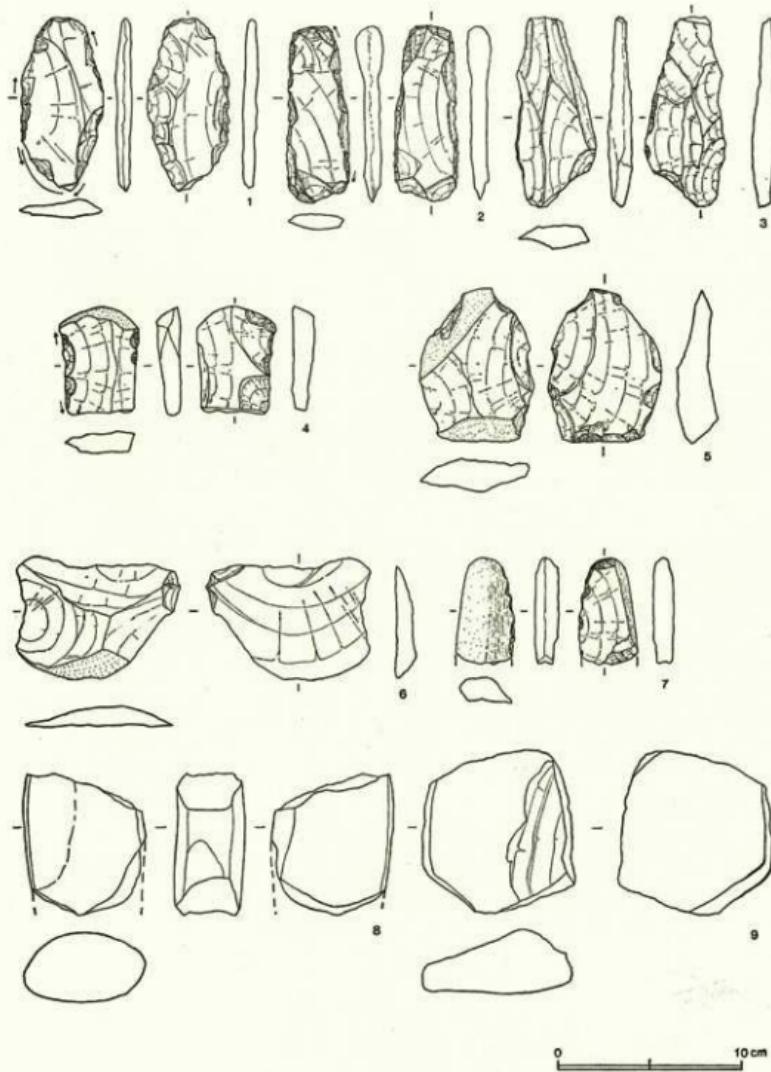
第32図 5号住居跡



第33図 5号住居跡出土土器拓影図

5号住出土石器観察表

番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
1	A-6	9.3	4.5	0.9	50.5	フォルンフェルス	一部欠
2	A-2	(9.5)	3.4	0.8	52.5	フォルンフェルス	
3	A-2	(10.2)	(4.3)	1.3	64.0	綠泥片岩	
4	A-3	(5.7)	4.3	1.1	47.0	フォルンフェルス	
5	D	(8.3)	(6.1)	2.1	125.0	フォルンフェルス	
6	D	(6.0)	(8.6)	1.1	81.0	フォルンフェルス	
7	D	(5.6)	3.1	1.1	31.0	輝綠凝灰岩	約欠
8	F-3	(7.2)	6.5	3.7	292.0	石英輝綠岩	タ
9	F-3	8.5	(8.1)	3.4	246.0	粗粒砂岩	〃

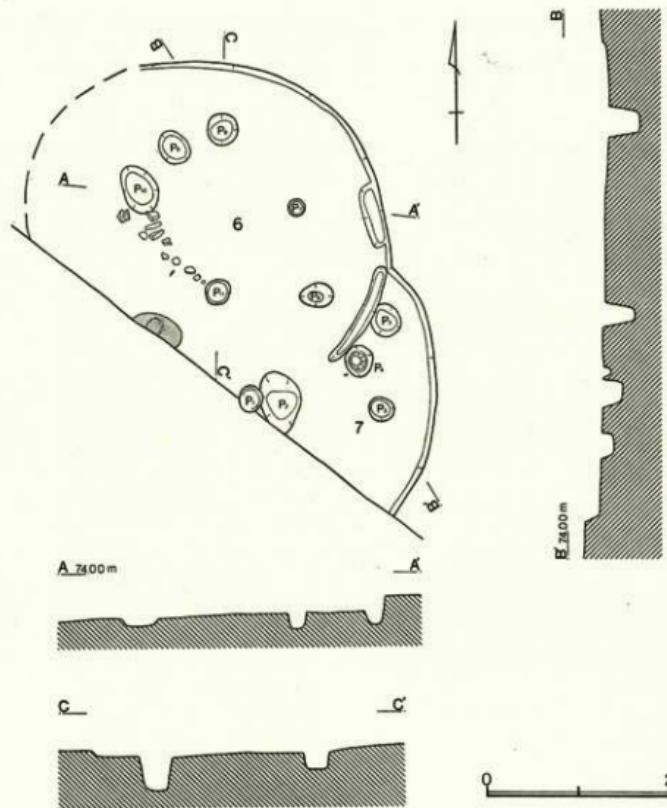


第34图 5号住居跡出土石器実測図

6号住居跡(第35図)

調査区の南端の最も高い部分に位置し、7号住居跡を切って構築されているが、西側の一部は調査区外に及んでいる。7号住との床面の高低差は大きくはないが、6号住がやや低い。

プランは円形もしくは橢円形を呈すと思われ、規模は径4m程である。主軸方向はN-35°-Wである。壁は東半分が残存しており、壁高は最高部でも10cm程しかない。壁溝は東南壁に見られ、幅15cm、床面からの深さ10cm、断面U字形を呈すが、途中で1ヶ所切れている。床面は平坦であるが、若干北側が低くなっている。特に堅緻な部分は見られない。6号住に伴うピットはP₆～P₁₀と



第35図 6・7号住居跡

思われる。7号住との覆土の差も明確ではなく、貼床もはっきりしないが、ここでは、その位置からP₁₁は7号住に伴うと考えたい。主柱穴は、P₄、P₅、P₆であろう。P₇は浅く小規模なものである。

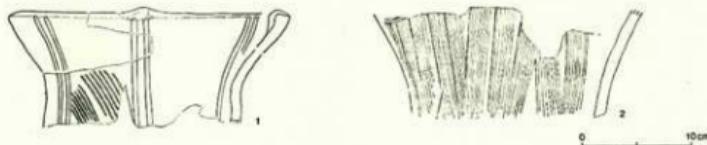
炉はP₁₀である。長径55cm、短径38cmの橢円形を呈し、深さは10cmを計る地床炉である。この炉の南端から南へ向って礎が列になって検出されている。

炉の長轍線上の南壁際にP₁があるが、埋甕である。P₂を切っているが、P₃は7号住に伴うものであろう。直径25cmの円形プランを呈し、深さは11cmを計る。

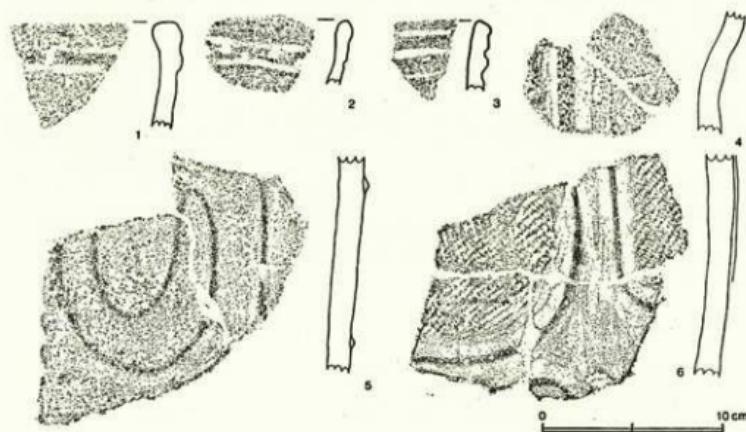
土器（第36図1、第37図5・6）

第36図1は推定口径25.7cm、口縁部が直線的に外反し、頭部がしまる深鉢。地文燃糸Rを施し口唇外部から2本の沈線懸垂文を8ヶ所に配している。沈線は幅広で深く、丁寧な施文である。

第37図5・6は微隆起線により渦巻等のモチーフが描かれたもの。5は渦巻の中心部でJ字状の構図となっている。6は地文繩文RLを施し、隆線間および陸線据部を磨消し、丁寧にナデている。



第36図 6・7号住居跡出土土器実測図



第37図 6・7号住居跡出土土器拓影図

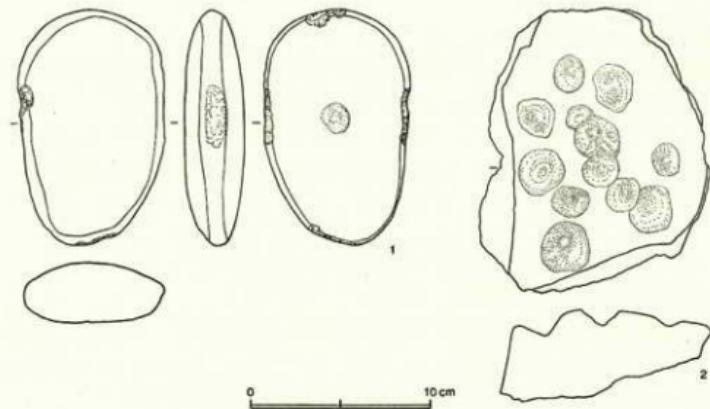
6・7号住居跡出土石器（第38図）

1は、偏平な隅丸長方形を呈した自然石を用いた磨石である。側面には周辺全体にあまり明瞭でない磨面を持ち、両側縁及び上下端には、細かな敲打痕を有する。又裏面中央部には、敲打による非常に浅い凹みを有する。

2は、砾の片面を利用した凹石である。12個の一部切り合ったロート状の凹みを有する。

6・7号住出土石器観察表

番号	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
1	F-10	12.9	8.1	3.3	545.0	粗粒砂岩	完
2	F-9	(15.3)	(12.2)	4.8	1,000.0	粗粒砂岩	完



第38図 6・7号住居跡出土石器実測図

7号住居跡（第35図）

6号住居跡に北側の大半を切られており、さらに西側は調査区外に及んでいるため、正確なプラン、規模は不明である。

壁高は最高部でも10cm程であり、壁溝は見られない。残存している床面は北側に向って若干傾斜している。7号住に伴うものとしては、P₁～P₅、P₁₁であり、このうち柱穴はP₃、P₅、P₁₁である。

6号住西端にある埋甕炉は調査時点ではその帰属ははっきりしなかったが、6号住に伴うと考えると長軸方向にズレがあり、位置的なことも含めると、7号住に伴うと考えた方が妥当であろう。一部調査区外に及んでいるが、長径58cm、短径35cmの楕円形を呈し、深さは11cmを測る。土器はこの中央やや北よりに埋設されている。

P₃とP₅の間のやや内側にP₄・埋甕がある。直径35cm、深さ20cmを計る穴の中央に土器が埋設されている。

土器（第36図2、第37図1～4）

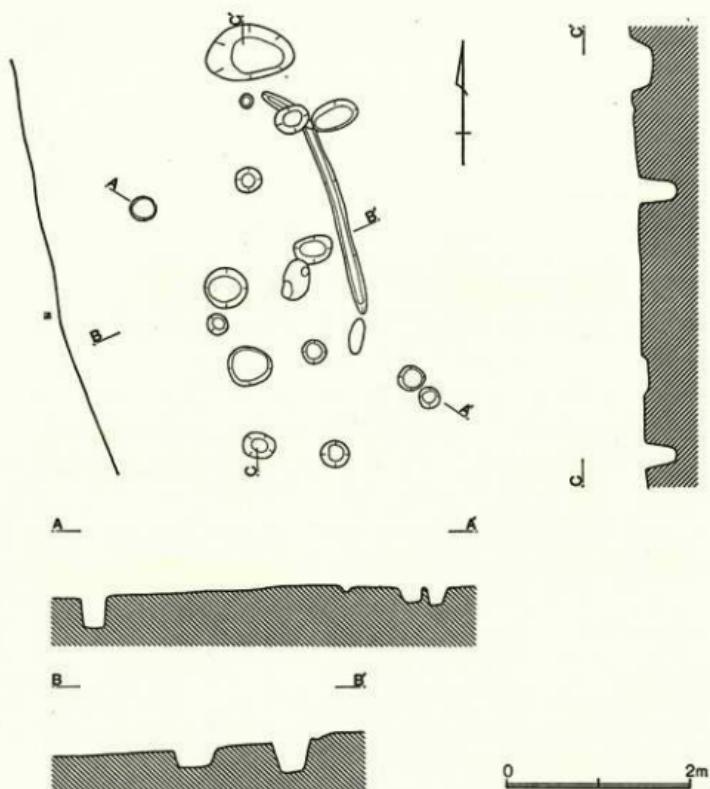
第36図2はP₄に埋設されていた。現存部最大径24.6cm。全面櫛状原体による条線文が施されている。単位は最多で11条が観察できる。上部に弧状の沈線がわずかにみられる。

第37図1～3は深鉢口縁部片。1は口縁に沿って文様帶区画隆帯が貼付されている。2は交互刺突の加えられた平行沈線が施文されている。4は深鉢胴上部片。幅広の隆帯懸垂文が貼付されている。地文の繩文原体不明。

ビット群（第39図）

3号住居跡の南側に接するように位置している。大小17穴のビットと1本の小溝によって構成されており、当初は住居跡かとも考えられた。しかし、ビットの配置の不規則さとその範囲の狭さから、ビット群という呼称を使ったが、住居跡ではないと断言する根拠もない。

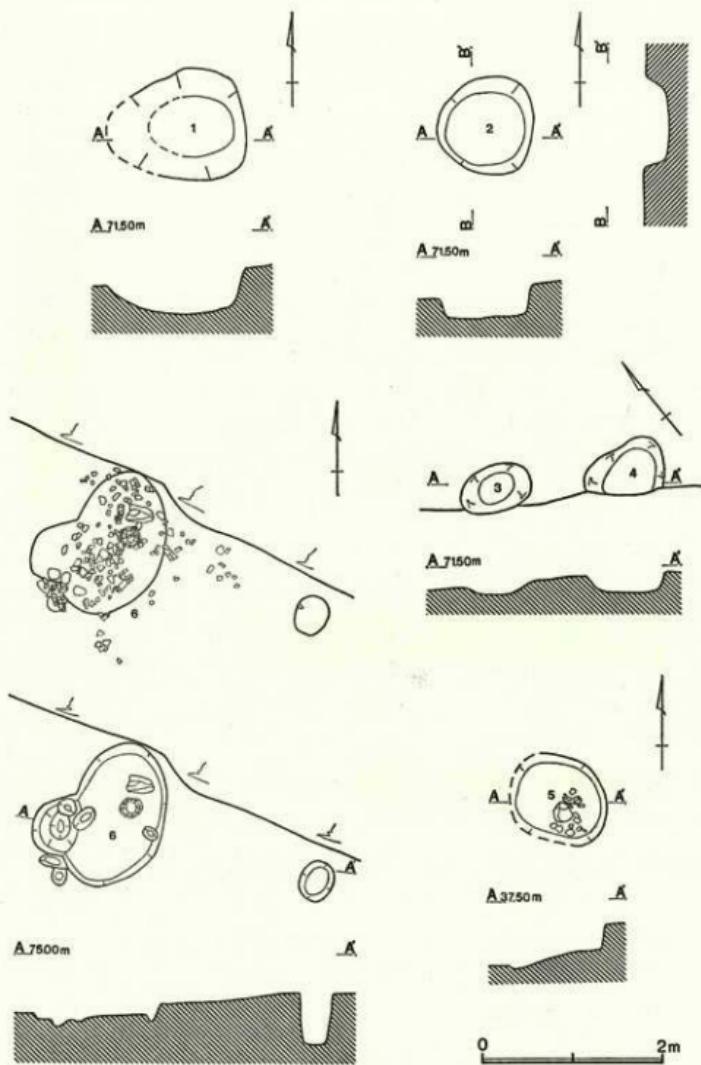
南北5m、東西3.5mの範囲にまとまっており、17穴のうちには浅い窪み程度のものがある。幅13cm、深さ6～12cm、長さ320cmの南北に走る溝があり、2つのビットと重複しているが、ビットはこの溝の西側に多い。



第39図 ピット群

1号土壙(第40図)

1号住居跡の東側約4mに位置する。西側は擾乱により削られているが、東西に長い梢円形を呈すと思われ、規模は東西150cm、南北70cm、深さは50cmを計る。壁もゆるやかに立ち上がり、壙底も平坦ではない。



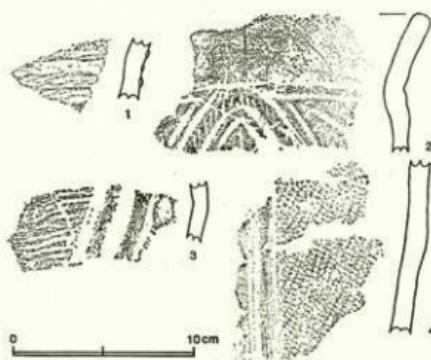
第40図 土 塗

2号土壙(第40図)

1号土壙の南約3mに位置し、3号土壙に近接している。プランはほぼ円形を呈し、規模は直径105cm、深さ25cmを計る。南壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁ではゆるやかに立ち上がっており。壙底はほぼ平坦である。

土器(第41図1~4)

1は諸謨b式、浮線文土器。キャリバー形深鉢の胴上部片。浮線上に幅広のヘラで刻みを加えている。2は無文口縁部が外反し、胴部がややくらむ小形深鉢と思われる。3はキャリバーフ形深鉢の口縁部文様帶部分片。太い隆帯により文様構成される。地文撚糸し。4は隆帯懸垂文が貼付された深鉢胴部片。地文撚糸R.L.



第41図 2号土壙出土土器拓影図

3号土壙(第40図)

4号土壙の東に位置し、南側は攪乱により削り取られている。

径90cm程の不整円形を呈し、深さは20cmを計る皿状の浅い土壙である。

4号土壙(第40図)

1号住居跡と3号土壙の中間に位置し、3号土壙と同様にローム層を掘りこんでいる。

東西80cm、南北52cmの東西に長い梢円形のプランを呈し、深さは最深部で13cmを計る。

5号土壙(第40図)

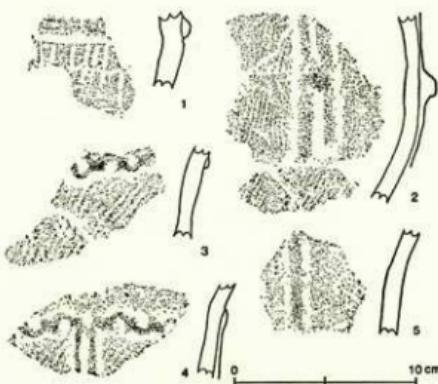
5号住居跡の北東約4mに位置する。西への傾斜地に立地しているため西壁は流失しているが、壙底は残存している。東西に長い梢円形を呈し、東西105cm、南北95cmで東壁の高さは30cmを計る。東壁はほぼ垂直に立ち上がり、壙底は西へ傾斜している。壙底の中央やや東よりに20cm大の躰を中心とし土器片、躰が検出されている。

土器(第43図1、第42図1~5)

第43図1は覆土上部出土破片が口縁全周する程に復元された。口径28cm、隆帯により6単位の梢

円区画が構成される。区画間は渦巻状隆帯が耳状に突起する。地文繩文 R L。

第42図 1は深鉢口縁部片。梢円区画部分片と思われる。内部には沈線が充填される。2~5は深鉢胴部片。2は隆帯懸垂文が貼付されている。地文繩文 R L。3、4は同一個体。交互刺突を加えた鋸歯状隆帯から2本の隆帯が垂下する。地文繩文 R L。5は沈線懸垂文が施されている。地文の繩文原体 RL(?)。



第42図 5号土壙出土土器拓影図

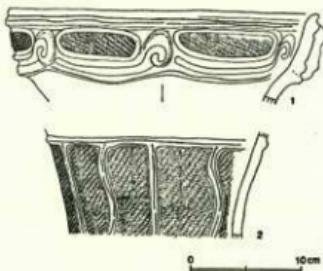
6号土壙（第40図）

4号住居跡の北東約5mに位置する。上面に土器が散布していたため、その下部の精査をしたところ発見された土壙である。プランは東西162cm、南北100cmの梢円形の土壙の西に50cm程の円形の張出しがついたような形を呈している。深さは10cm前後と浅く、壙底に小ピットが穿たれており、北側には25cm×15cm程の角跡が置かれていた。

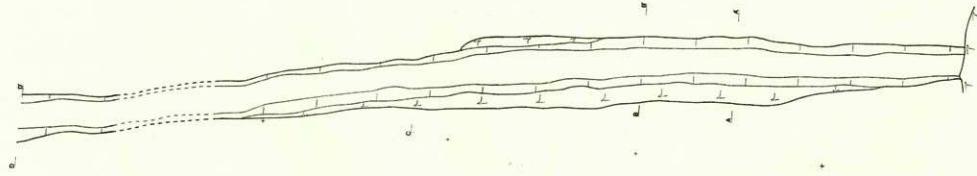
また、土壙の東1.5mには直径38cm、深さ56cmのピットがあり、6号土壙と同様に上面からは土器が出土している。

土器（第43図2）

覆土下部から倒立の状態で出土した。現存高11.3cm。深鉢胴上部。直行、蛇行する隆帯が各4本貼付されている。各隆帯間の間隔はバラつきが著しい。地文繩文 R L。



第43図 5・6号土壙出土土器実測図



第44図 大溝

大溝（第44図・45図）

調査区の中央や西側を、わずかに東傾しながら南北に走り、2号・3号住居跡を切っている。西側への傾斜面に等高線と平行するように構築されているため、東壁と西壁の壁高の差が大きく、1m近くある。南側の一部は攪乱により確認がきなかった他は、深くしっかりしており遺存状態も良好であった。

両端は確認できなかったが、検出できた長さは約50mにおよび、幅は1.8m～2.2m、深さは平均1.2mを計る。壁は急角度で立ち上がり、東壁側では途中で段をもって、上端でゆるやかに立ち上がっている。南側では徐々に幅が狭くなっている。溝底には凹凸もピットもなく、ほぼ平坦であるが、標高を見ると北側がわずかに低くなっている。

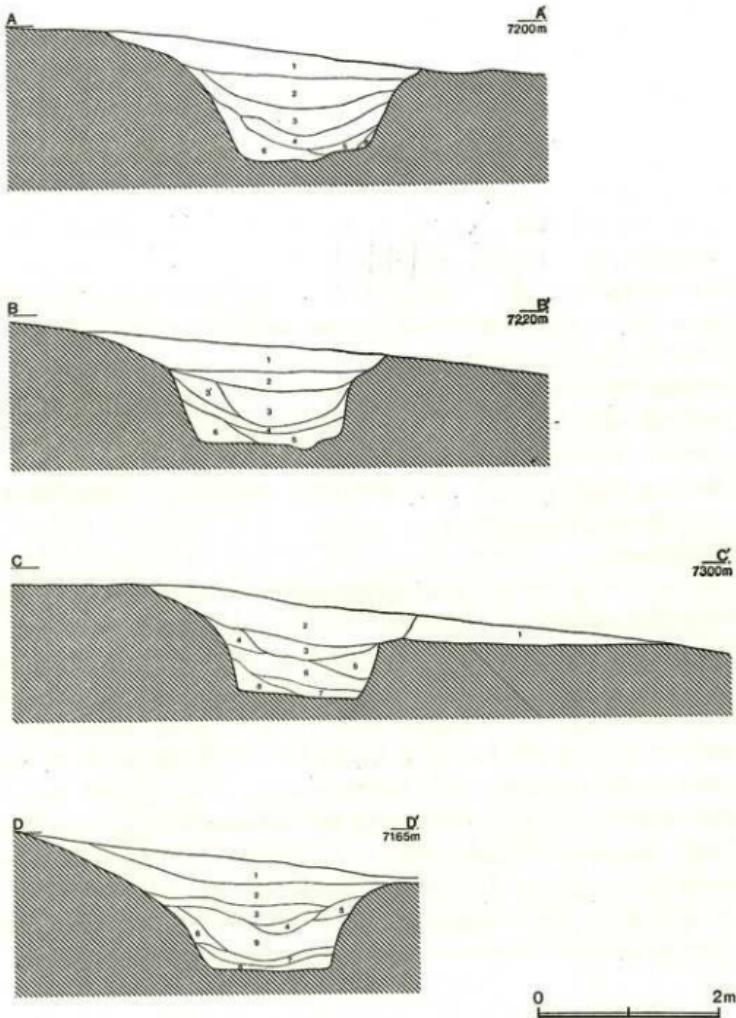
覆土の状態を観察すると、東側からの流れ込みを主体とした自然堆積であり、縄文中期の住居跡を破壊して構築されているため、覆土中からは多量の土器、石器が出土している。出土遺物はこの他に陶器片の他、擂鉢が出土している。

本溝の時期、性格等については出土遺物も少なく明確ではないが、本遺跡の周辺には、杉山城跡、越畠城跡等の城跡が分布しており、溝の形態やその位置から、空掘的な性格を感じさせる。また、東側にある小溝が平行して走っており、本溝と関連がある可能性が強いが、他に関連性を伺わせる造構・遺物は検出されていない。しかし、地形的な制約や溝の弯曲方向から、本溝を付随しうる主体は東側に存在したであろう。

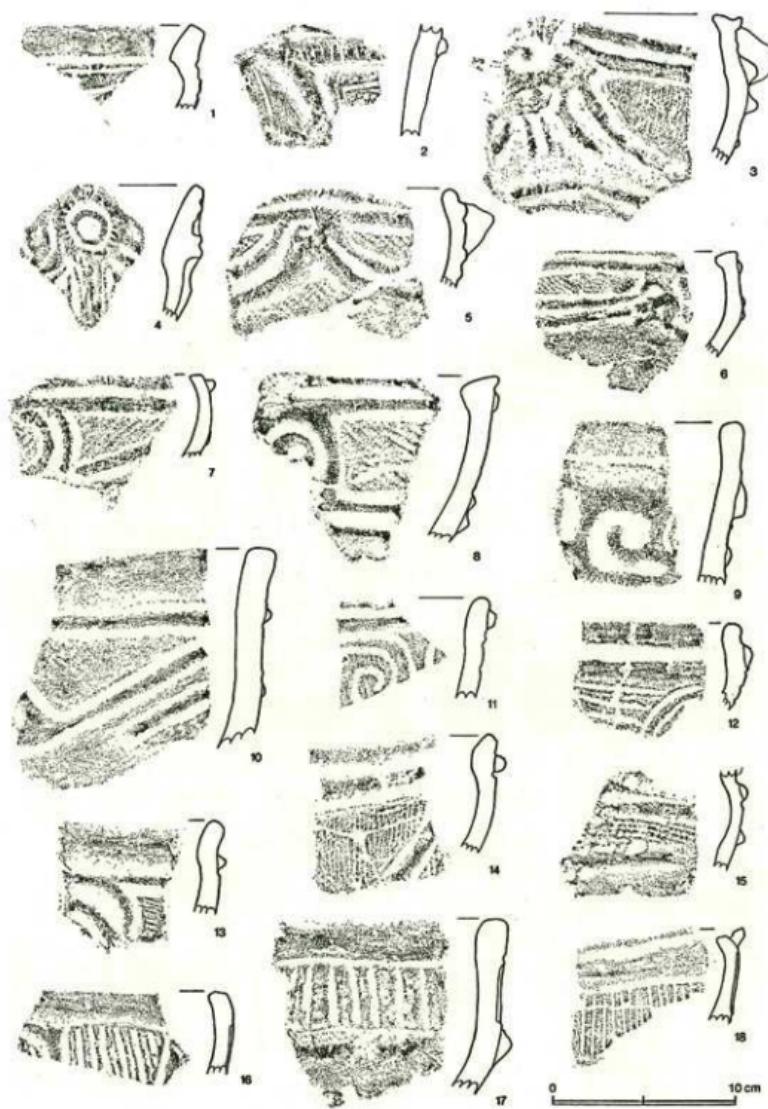
土器（第46・47図）

A-4グリッドからE-3グリッドにかけて検出された溝跡は2、3号住居跡を廻しており、覆土中から多量の縄文土器が出土している。

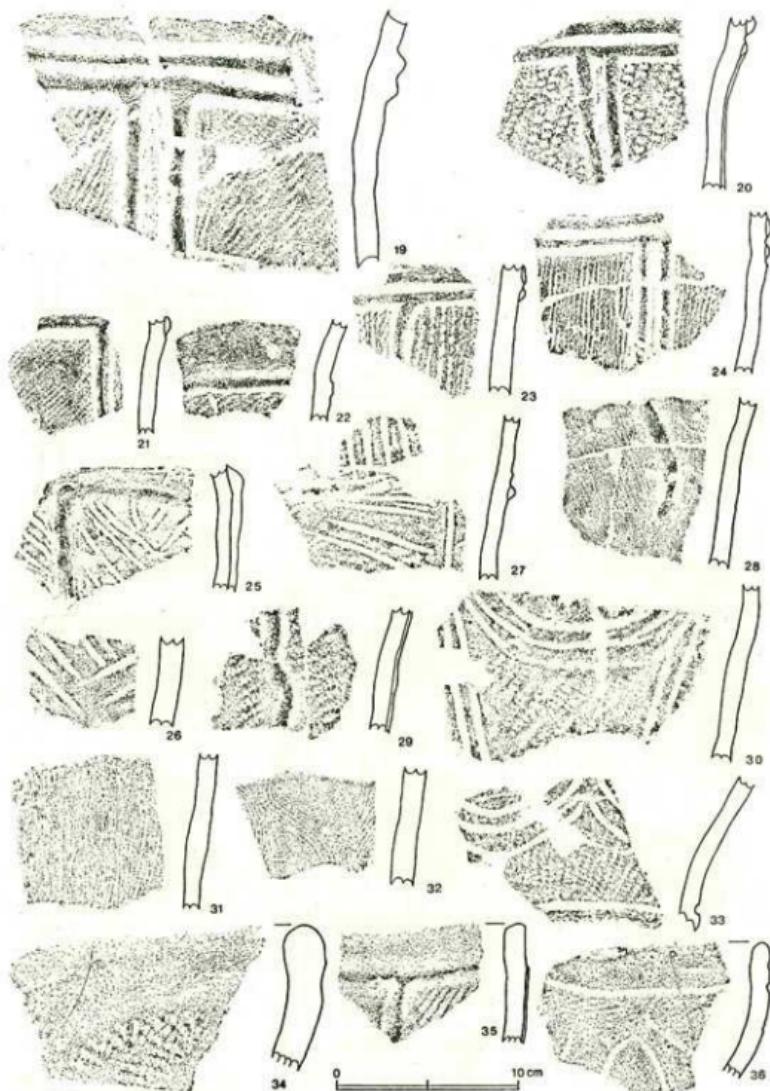
第46図1、2は勝坂式末期のもので、3～28は加曾利E I式、30、33、34はE II式、31、32、35はE III式、36はE IV式である。1は細かな連続刺突、2は隆帶上に爪形文を施している。3～15はキャリバー形深鉢口縁部片。すべて隆帶により渦巻およびこれをつないだ区画が施されたもの。地文は隆帶貼付に先行して施文されており3、13、14が燃糸L、5～8は縄文RLである。19～33は深鉢胴部片。19～25、28、29は直行、蛇行する隆帶懸垂文が貼付されている。地文は19、21、22が縄文RL、20は複節RLR、23、24は燃糸L。30は沈線懸垂文間を弧線でつないでいる。31は直行する条線文、32は11条単位の蛇行条線文が施されている。33は連弧文土器、34は幅広の凹線で梢円区画を構成している。地文は縄文RL。35は口縁部に無文部をおき、横走、垂下する隆帶を貼付している。隆帶の両端は丁寧にナデられ隆帶は断面三角形、微隆起線状となっている。地文は縄文RL。36は口縁小波状を呈し、曲線的モチーフの沈線間を磨消している地文は縄文RL(?)。



第45図 大溝土層断面図



第46圖 大溝出土土器拓影圖(1)



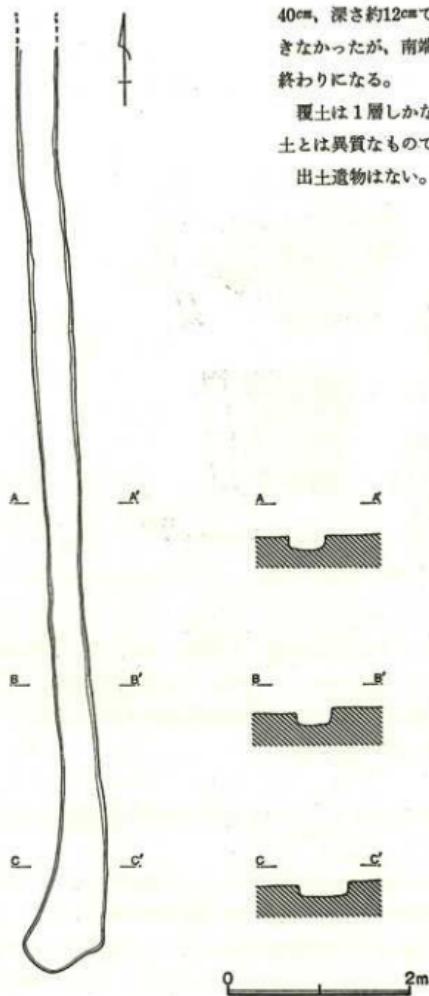
第47図 大溝出土土器拓影図(2)

小溝 (第48図)

4号住居跡の西側の一部を切って、ほぼ南北に走る。幅40cm、深さ約12cmで直線的に走っているが、北端は確認できなかったが、南端近くでは西側へ曲がり、端は丸まって終わりになる。

覆土は1層しかなく、粒子の荒い土であり、住居跡の覆土とは異質なものである。

出土遺物はない。

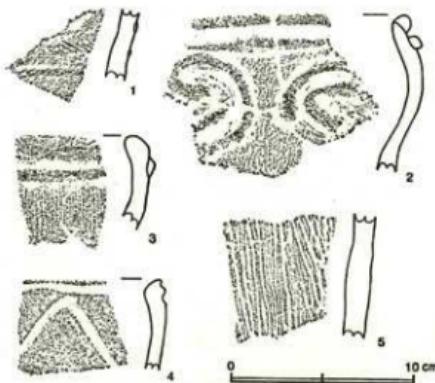


第48図 小溝

グリッド出土土器

A—4 グリッド（第49図1～5）

1は諸磧b式、浮線文土器。浮線は低く、扁平で幅広のヘラにより矢羽状の刻みが加えられている。2～5は加曾利EⅠ、EⅡ式。2～4はキャリバー形深鉢口縁部片。2は地文に撲糸Lを施し一対の渦巻状隆帯を貼付している。3は7本単位の条線文、4は幅広沈線により連弧文が施されている。5は撲糸L。条間が均一でない。



第49図 A—4 グリッド出土土器拓影図

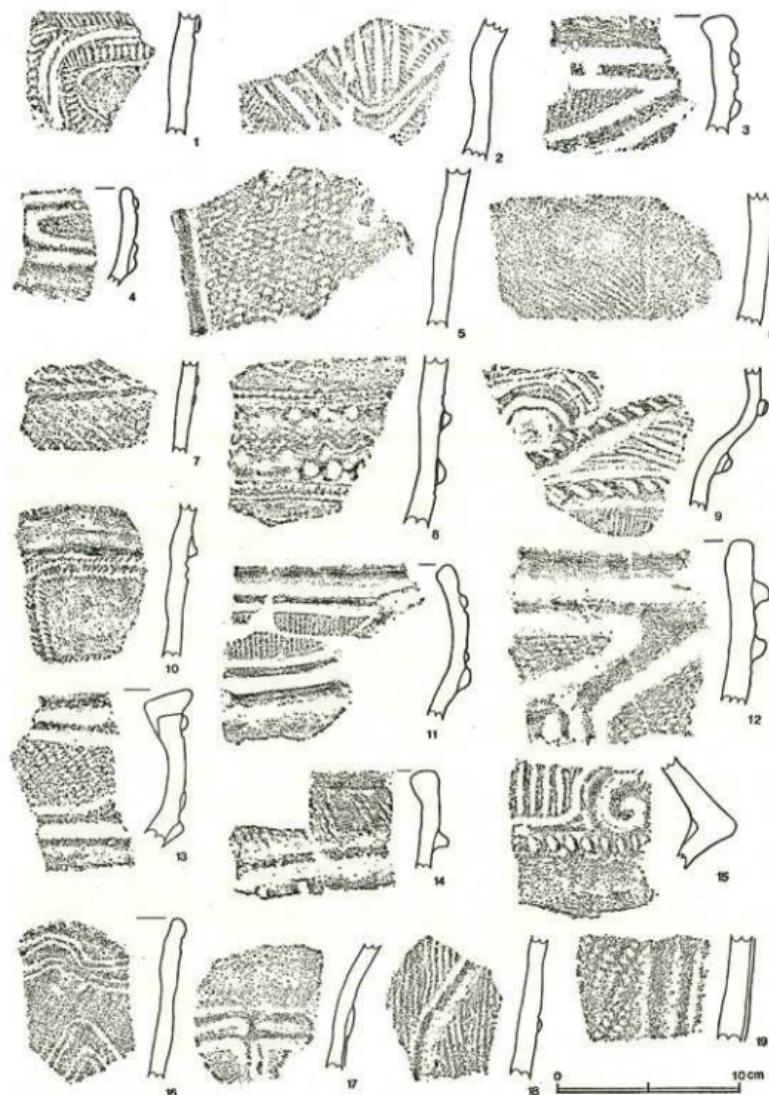
C—3 グリッド（第50図1～6）

1、2は勝坂式、3～5は加曾利EⅠ式、6はEⅡ式土器。1は梢円、2は連続三角形区画内に爪形文、沈線、三叉文を充填している。3、4はキャリバー形深鉢、口縁部文様帶部分片。5は深鉢胴部片、直行、蛇行する隆帶懸垂文が貼付されている。6は沈線懸垂文間が幅広く磨消されている。地文は3が撲糸L、5が複節R L R、6は繩文L R。

C—4 グリッド（第50図7～19）

C—4 グリッドでは3号住居跡が検出されており、ここに図示した土器片には住居跡に還元されるものも含んでいる。

7は諸磧b式、浮線文土器。浮線上に矢羽状刻みが加えられている。地文は付加条。8～10は勝坂式。8は指頭押圧を加えた隆帶間に半截竹管による横走、波状の結節沈線を施文している。胎土に雲母の含入が顕著である。9は太い隆帶による連結渦巻文が施されている。胴部地文は撲糸L。10は長方形区画内部にベン先状原体による2条の整った結節沈線が施文されている。11～19は加曾利EⅠ式、11～14はキャリバー形深鉢、口縁部片、地文は11が撲糸L、12、14が繩文L R、13が繩文R L。15は浅鉢口縁部片。肩部の屈曲は直角にちかい。突出部に爪形文が施され、上部に渦巻



第50図 C-3・C-4 グリッド出土土器拓影図

平行沈線が描かれている。16は口縁が直線的に開く波状口縁深鉢。不規則な波状沈線が4条認められる。地文の繩文原体不明。17～19は直行、蛇行する隆帯懸垂文が貼付されている。18は地文燃糸文であるが、原体の筋間がつぶれ条線状となっている。19は繩文R L。

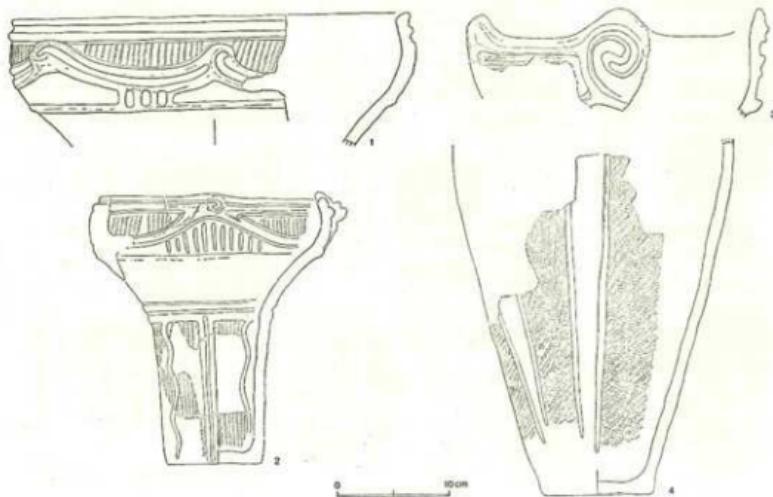
D-2 グリッド（第52図1～7）

1～3は勝坂式、4～6は加曾利E I式。1は爪形文が施された隆帶により渦巻、三角形のモチーフを描くもので2号住居跡出土土器（第10図2）に酷似する。2は地文に繩文R Lを施し、隆帶による横に連結する渦巻文を描出している。隆帶上には爪形文、交互押圧が加えられている。3は円筒深鉢口縁部片。無文口縁部下に整った爪形文が施されている。4、6、7は深鉢胴部。4は沈線懸垂文間が磨消されている。地文繩文R L。施方向を変え、羽状繩文となっている部分がある。5、6は地文燃糸L。6の燃糸文は繩の目がつまり絡条体条痕状となっている。7は曲線的沈線間を磨消している。

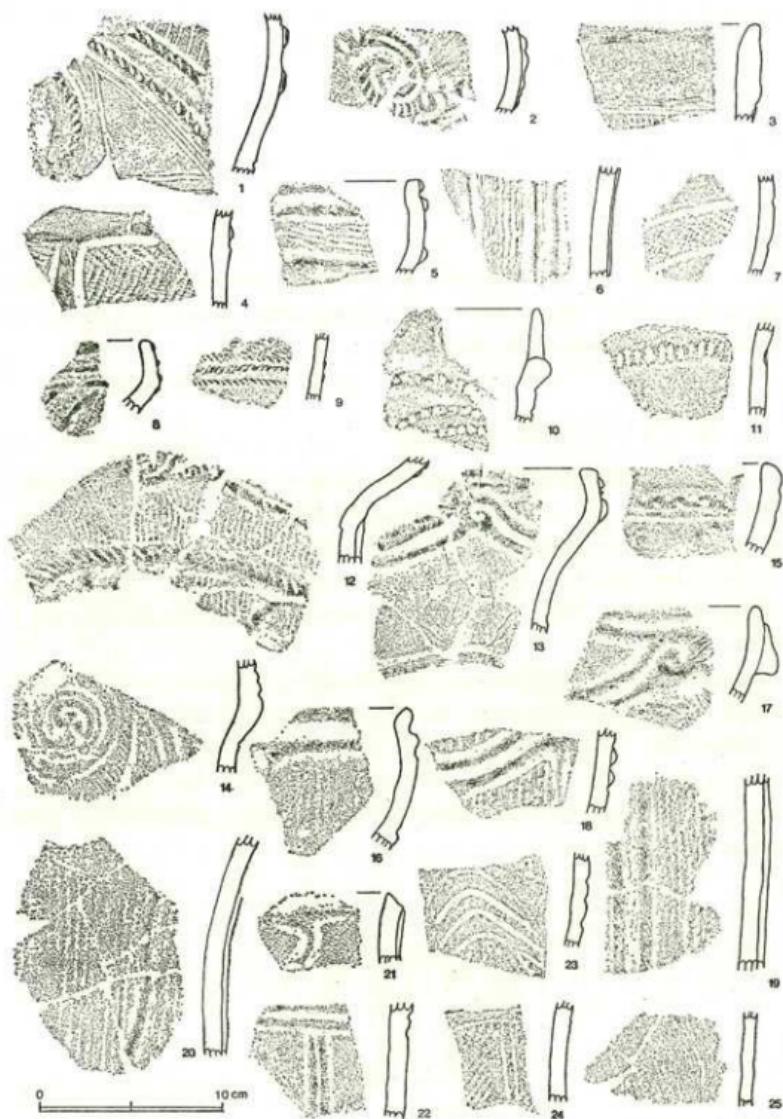
D-4 グリッド（第51図1～4、第52図8～25）

D-4 グリッドでは隣接して3ヶ所に遺物の集中地区がみられた。各地区とも径約2mの範囲でその下部には遺構は検出されなかった。

第51図1は推定口径35cm、キャリバー形深鉢口縁部。地文に燃糸Lを施し、隆帶区画を施している。連結部は渦巻状となり隆起する。区画隆帶の谷部と頂部無文部を画する隆帶との間には短隆帶が充填されている。2、口径19.5cm、器高23.8cmの小形深鉢。口縁部文様帶は1と同様の構成。区画は残存部からすると4単位構成と思われる。口唇下をめぐる沈線は区画連結部で渦巻状となり



第51図 D-4 グリッド出土土器実測図



第52図 D-2・D-4 グリッド出土土器拓影図

突起する。その下部には沈線が充填されている。直行、蛇行する隆帶懸垂文は各4本。地文は撲糸L。3. 推定口径24cm。口縁突起部の渦巻を基点として文様構成する。地文撲糸文R。4. 底径9.6cm。沈線懸垂文間の地文繩文RLを磨消している。沈線の幅は一定でなく、幅広、狭の差が著しい。

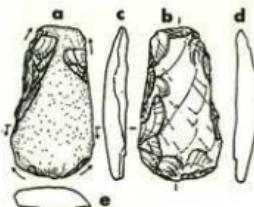
第52図8、9は諸磯b式、浮線文土器。キャリバー形深鉢、「く」字状を呈する波状口縁谷部片。浮線は素文のまま。9は胴部文様帯部分片と思われる。扁平な浮線上に矢羽根状刺みを加えている。10、11は阿玉台式土器。10は口縁上に突起をもち下部に竹管による結節状刺突を施している。11は深鉢胴部片、器厚7~8mmとうすいつくり。浅い連続刺突が施されている。12、14は勝坂式。12は地文に撲糸Rを施し、口縁部、胴上部に隆帶を貼付している。14は渦巻状沈線間に連続刺突を加えている。13、15~18は加曾利EⅠ式、キャリバー形深鉢口縁部片。渦巻、突起を基点として隆帶により区画を構成している。16、18の地文、撲糸L。19~25は深鉢胴部片。19~22は隆帶、24は沈線による直行、蛇行する懸垂文が施されている。23は連弧状沈線、25は蛇行する条線文が施されている。地文は19、20が撲糸L、21、24は繩文RL。

溝・グリッド出土石器（第53~83図）

当遺跡では、調査面積に比して多量の石器及び副産物が出土し、礫及び焼礫、フレイクを除き、393点の石器を数えた。このうち打製石斧、磨製石斧等の破損品及び風化の著しいものを除いて、332点を図示した。なお、住居跡に伴う石器はそれぞれの住居跡ごとに説明を加えた。したがってここではそれ以外の包含層出土石器261点を図示した。その大部分は、溝（2・3号住居跡及びピット群を切っている）より出土しており、その性格より全て流れ込みと考え包含層の石器として括り扱った。

なお、当遺跡は、繩文中期勝坂式期より、加曾利EⅣ式期にわたる遺跡であり、加曾利EⅠ式期よりEⅡ式期の住居跡が確認されている。出土した石器もほぼこの時期の範疇に属すと思われる。

これらの石器は、（A）打製石斧、（B）磨製石斧、（C）礫器、（D）刃器、（E）截石、（F）石皿・すり石・凹石、（G）石鏃、（H）その他等に分類される。以下各器種別に見て行きたいと思う。なお、実測図の左面をa、右面をb、左側縁見通し図をc、右面縦断面をd、左面横断面をeとして以下説明を行う。



石器転回表

(A) 打製石斧

打製石斧は、破片を合わせると 171 点あり、その内 151 点を図示した。

分類は、便宜上、側縁と刃部の形態に注目し、基本的には平面形態による分類を主として実施した。さらに大きさ、厚さ等を副次的要素として扱った。

— 側縁の形態 —

- 1 類 頭部より刃部に膨らみ、胴下半に最大幅を持つもの。
- 2 類 頭部より刃部へ直線的に開くもの。
- 3 類 頭部より刃部に開き、胴上半に括れを有するもの。
- 4 類 頭部と刃部が直線的であり平行を呈す、短冊形のもの。
- 5 類 胴中位が括れる、いわゆる分銅形を呈するもの。

— 刃部形態 —

- a 丸く、肩状を呈するもの
- b 若干丸味を有するもの
- c 直線的なもの
- d 尖頭状を呈するもの

以上の組み合わせにより分類を行った。

1 b 類 (1, 2, 4)

長さが 11cm を測る比較的大形で、扁平な剥片を素材としている。側縁は、膨らみをもち調整剝離を行い、頭部は、尖るように作り出している。刃部は細かい調整剝離が加えられている。自然面を多く残している。4 は、体部上半部側縁及び、刃部の b 面先端より a 面 1cm が磨耗している。

2 a 類 (47, 71)

長さが 8cm と小形なものである。47 は両面共に成形剝離を加え、頭部は右上方向から剝離が行なわれ、中位上半部及び刃部は調整剝離が施されている。71 は、頭部が直線的となっている。a 面には自然面を残す、薄手のものである。側縁は調整剝離が行なわれ、中央上部は磨耗している。刃部は、鋭角に成形剝離が行なわれている。

2 b 類 (3, 8, 10, 12, 42~45, 48, 70, 75)

両側縁には細かく調整剝離が加えられているが刃部はそれに比して荒い。長さにより、大・中・小形と 3 種に分けることができる。

大形のものでは、3, 8, 10, 12 があり、12cm を測るものもある。扁平な剥片を素材とし、側縁は特に上位を丁寧に調整を行い、頭部は尖るように作り出されているものがある (3, 8, 12)。10 は両面成形剝離を行い、刃部は粗く調整剝離を行っている。a 面右側縁は筋理面で剥落しており直線的となっている。

中形のものとしては 42~45 があり、10cm に満たないものである。42, 44, 45 は、刃部方向から成形剝離が行なわれ薄く作り出されている。なお 42 は刃部が磨耗している。44 は側縁中位が、45 は側縁上部が磨耗している。43 は、両面成形剝離を行ない扁平に作り出し、周縁を調整剝離している。

小形のものとしては 48, 70, 75 があり、8cm 前後を測る。いづれも薄い剥片を作り出し、周縁に

粗い調整剥離を行っている。70は、刃部先端より a 面の上方へ 2 cm 程の所まで磨耗痕が認められる。

2 c 類 (5, 6, 73, 123~125)

5, 6 は大形である。6 は、体部下半の自然面及び b 面全面の稜が目出たない程度に磨耗している。73は、頭部が一部欠損している。薄手のものであり、a 面に自然面を残す。123~125は、長さに比べ、幅が広いものであり、三角形の形態を呈するものである。厚みがある剥片を素材とし、頭部及び側縁に成形剥離を行い、刃部は、刃部方向より成形剥離を加え、薄く銳利に作り出されている。調整は殆んど行なわれておらず、全体に粗く作られている。

3 a 類 (7, 13, 81~84, 86~88, 91~94, 97, 98, 100, 112, 116)

側縁に括れを有するものである。括れは、片側縁は直線的に作られ、他側縁は大きく括れており、位置、大きさ等が非対称となるものである。全体に頭部は小さく、刃部に行くにしたがい広がり、また刃部は大きく丸味をもつ。当遺跡の中では 3 b 類と共に、最も多く出土しているものである。母岩からの一次剥離による扁平な剥片を素材とし、周縁に成形剥離を行い、括れ部には細かく調整剥離が行なわれている。刃部は側縁に比べると粗い調整剥離が行なわれている。自然面を多く有している。

大形のものでは、7, 81~84, 86~88, 112 があり、11 cm 前後を測る。7 は、いわゆる洋梨形を呈するものであり、周縁に一様に整形剥離が加えられている。84は、刃部、b 面左側縁が、86は両側縁中位下半が磨耗している。なお、86の a 面下半には斜位に擦痕が認められる。

中形のものとしては、13, 91, 93, 94, 100 があり、9 cm 前後を測るものである。13 は風化が激しく稜は不明瞭である。91, 93は、自然面を利用し、反った作りとなっている。なお 93 は刃部が磨耗している。100は、括れ部が磨耗している。

小形のものでは、92, 97, 98, 116 があり、それぞれ 8 cm 前後を測る。92, 116 は風化が激しく稜が明確でない。97は、刃部を研磨した後、先端部に剥離が加えられている。98は、最もくびれた部分が磨耗しており、刃部上端部では横方向の擦痕が認められる。

3 b 類 (35, 39, 40, 49, 69, 85, 89, 96, 99, 111, 114)

側縁の括れは小さく、刃幅、胴部幅、頭部幅の差が少なく、刃先はいくぶん丸味を持つものである。大形のものでは、35, 39, 40, 85, 111 がある。35は、a 面右側下半部が磨耗している。39は、12.7 cm を測り、カマ状に彎曲している。a 面左側縁下半には磨耗痕が認められる。40, 85 は側縁上半部が磨耗している。111は、自然面より薄い剥片を作り出し、周縁には、丁寧に調整剥離が加えられている。

中形のものでは、69, 89, 96, 99, 114 があり、9 cm 前後を測る。89, 99 は風化が著しい。96は括れ部中央及び刃部が磨耗している。114は、カマ状に彎曲しており、刃部が磨耗している。

小形のものとしては 49 がある。幅広であり、自然面、主要剥離面を大きく残している。

3 c 類 (90, 95)

90 は厚みがあり、a 面は大きなくびれ部に大きな成形剥離が行なわれている。側縁下半部及び刃部が磨耗している。95 は、頭部が丸く作り出されている。稜は風化しているため明瞭でない。

4 b 類 (29~34, 36, 37, 41, 46, 51, 127, 129, 131, 132, 135, 145)

短冊形を呈するものである。比較的厚みを有するものである。幅狭で細長く棒状に作り出しているものと、幅に比べ重量感があるものとがある。棒状のものとしては、11cm前後を測る大形のもの（29~34、36、37、41）と、小形のもの（46、51）がある。磨耗痕の位置は、30が中央に、31は体部上半部に認められる。又、厚みがあり重量感のあるものとしては、127、129、131、132、135、145があげられる。これらは欠損品が多く含まれているが、大きさなど他と比べ大きく、短冊形の中では特異である。

5 a 類 (148, 149)

いわゆる分銅形を呈するものである。完形品としては2点のみであり、148は18.6cmを測る大形のものとなっており、側縁全体に調整剥離が加えられている。149は括れ部のみ調整剥離が加えられており、同じ箇所が磨耗している。刃部は側縁に比べ粗い剥離が加えられている。

6 類その他 (14, 15, 18, 21, 23~28, 55, 126, 156, 158~160)

刃部のみであり、先端が尖るd類になるものである（14, 15, 18, 55, 126）。これらは幅が広く厚みがあるものである。14, 55は、先端部が磨耗しており、55は先端が丸くなっている。

21, 23~28は、母岩よりの一次剥離によって薄く剥がされた剥片を素材としたもので、周縁には調整が加えられている。これらは打製石斧とも考えられるが、調整等のあり方より、スクレイパー等の可能性も考えられる。

160は、柳葉形を呈するものであり、身に比して幅の狭い作りである。

(B) 磨製石斧

4 点出土した (152~155)

152は完形品である。乳棒状を呈しており、上位刃は丁寧に磨かれているが、以下稜を有し器面が荒れており明瞭な研磨痕は確認出来ない。なお、上下端部には剥離が施してある。

153は、定角形の磨製石斧の刃部である。側縁に稜を有し、表・裏面は良く磨かれており、側面は敲打されている。刃部先端に刃こぼれが認められる。

154は、上半部破片である。上端部には敲打痕が認められ、やや下位には横方向の擦痕が認められる。155は、下半部の大部分が欠損している。全体的によく研磨されており、頭部は丸味を呈する。

(C) 碓器

中形の礫を素材とし各方向より一次剥離を行い、調製剥離を加えて刃部を作り出したものである。自然面を利用して作られたもの（1類）と、大形剥片を利用したもの（2類）とに分けられる。

1 類 (161~164)

161は小形、162は大形のものである。上部に自然面を有し、下位に刃部が作り出されている。163は、母岩からの一次剥離による身の厚い礫を素材とし、両面より周縁を調整剥離することにより刃部が作り出されている。163は刃部のみ残存する。弧状に作り出している。いずれも厚みがあるものである。

2 類 (165~168)

いずれも自然面を有するが、1 類が1 次剥離の後、調整剥離は刃部付近から側縁に行なわれた結果大きく自然面を残すのに比べ、全体に成形剥離を行った後、下位に刃部を作り出しているものであり、一部には自然面を残すものである。いづれも小形のものである。166 は、縦長に剥離が行なわれ、横断面は、三角形を呈している。刃部は、a 面右側下位に作出されている。

(D) 刀器

剥片を素材とし、周辺部に刃部が作られたものであり、これらは搔器、石匙、横刃形石器等と称されるものであるが刃器として一括し形態により細別を行った。

1 類 (169, 174)

扁平な作りで、他に比べやや大形のものである。側縁が平行する縦長の剥片を素材とし、長辺の両側縁に丁寧な調整剥離を加えて刃部を作り出したものである。169 は自然面からの一次剥離による扁平な剥片を素材とし、刃部は、磨耗している。174 は大形の礫を母岩とし、縦長の薄い剥片を作り出し、長辺に調整剥離を行い、刃部を作り出している。

2 類 (157, 170, 171)

小形で、厚みがある剥片を利用し、両面より成形剥離が行なわれ、調整剥離により長辺を作り出し刃部としたものである。

3 類 (172, 173, 175, 176, 181, 182)

一次剥離による薄手の大形剥片を利用し、1 辺或いは2 辺に刃部が作られたものである。b 面には自然面を残す。

4 類 (178, 180, 183~185)

小形の不定形な剥片を素材とし側縁の1 辺に粗い調整剥離が施され、刃部としたものである。

5 類 (177, 179, 186~189)

薄く剥がされた剥片の側縁のいづれかの部分に使用痕が認められるものである。179 以外は小形であり、自然面を有するものが多い。

(E) 敲石

ここでは、敲打痕の認められるものを敲石として一括した。

1 類 (196~202)

棒状を呈する細長い礫を利用し、敲打痕が認められるものである。先端及び側縁に敲打痕があるもの (196, 197, 200)、先端部のみに認められるもの (198, 199, 202)、先端に剥離が施され、側縁に敲打が認められるもの (201) がある。

2 類 (203, 204)

板状を呈するやや幅広の細長い礫を素材とし、先端に稜打痕が認められるものである。表・裏面は平らであり、自然面の可能性があるが、整形された可能性も否定出来ない。

3 類 (206, 207)

当類は、敲打痕は認められないが、形状等敲石に準ずるものとここでは判断し、便宜的にここに一括した。だが再考の余地のあるものである。e面が方形になる棒状を呈する疎を利用している。小形であり、下端は欠損している。

4類 (208)

小形であり、平面が紡錘形を呈する薄い疎を用い、先端部に剥離を有する。剥離が認められるがおそらく用途に関連する剥離痕であろう。

5類 (209~211, 216)

隅丸長方形を呈し、側面には磨痕が認められるものである。敲打痕は先端に有する。211は風化が激しく、ザラザラしている。

6類 (214・215・217・218)

側縁の一部に敲打痕を有するものである。214はやや扁平な疎の中位を水平に切断することによって作出されたものであり、内一角を敲打痕として使用している。215は、大形で扁平な棒状を呈し、側縁・下端に敲打痕が認められる。側縁に磨痕が認められるが一樣ではない。217は扁平な丸い疎を素材とし、周縁2箇所に敲打痕が認められるものである。

(F) 石皿・すり石・凹石

一個の石器には凹みや磨面が共に認められるものが多く、分類基準を明確にしがたい面がある。石皿においてもその例外ではなく、凹みが認められることが多い。そこで、ここでは、石皿・すり石・凹石を一括して以下のとく、分類説明してみた。

1類 (219)

石皿片である。縁取りがなされている。a面には、皿状の浅い凹みを有する。

2類 (220・221)

板状を呈する小形の石皿である。隅丸長方形を呈し、磨面が若干凹んでいる。

3類 (224~235)

側面に磨面を有するものである。多くが欠損品であるが、隅丸長方形及び不正円形を呈するものと考えられる。224、230は表裏面が丸みを帯びている。232~235は小形のものである。233~235は球状に近い形態を呈す。

4類 (236, 237)

曲線のカーブを描く凹穴を有する。凹みの平面形態は不正円形である。凹石の形態は板状を呈している。236はa面に4個、b面に2個凹穴を有している。237はa面に3個凹穴を有している。これらの側縁は角状に成形されていたようであるが、一部の破片であり、不詳。

5類 (239)

皿状の凹穴を2個有する。板状を呈し、側縁は調整剥離が加えられ、隅丸方形に作出している。

6類 (238, 240~247)

ロート状の凹穴を有する。剥離が激しく小破片となっており、元の形状は詳らかでない。242は、左側にゆるやかな稜をもち、側縁が残存している。

7類 (222, 223, 248~253)

凹が浅い敲打により形成されたものであり、表裏面は平坦に作られ、側面は幅広い磨面を有する。248は、長円形を呈し、a面に2個、b面に1個凹穴を有する。249、250は、隅丸長方形を呈し、251、252は橢円形を呈し、共に、表裏面に1個ずつ凹穴を有する。251以外は半欠品である。

8類 (254)

ポート状の凹みを有する石皿片である。縁取りがなされ、片面には皿状の凹みを有し、対面にはポート状の凹みを数多く作る大形石皿の破片である。3号住居跡出土の石皿も同様である。

9類 (255~257)

曲線のカーブを描く凹みを有する。縁を利用し、凹石として使用したものであり、形状は一定していない。255は、a面に2個、b面に4個、256はa面に3個凹穴を有する。いづれも重複している。257はa面に1個凹穴が作られている。

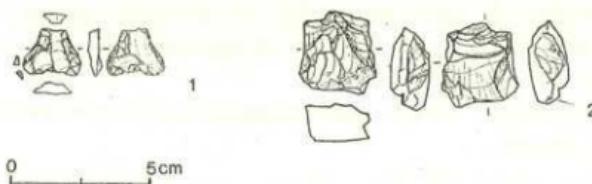
10類 (258~260)

皿状の凹穴を有する。258は細長い扁平な縁を素材とし、両面に1個ずつ長円形の凹みが作られている。上下端・側縁には剥離が加えられる。259は円縁を素材とし、a面に2個凹穴を有する。b面は剥落している。上下端は剥離が加えられている。260は棒状の縁の両面に細長い凹みを1個ずつ有している。体部の約殆が欠損している。

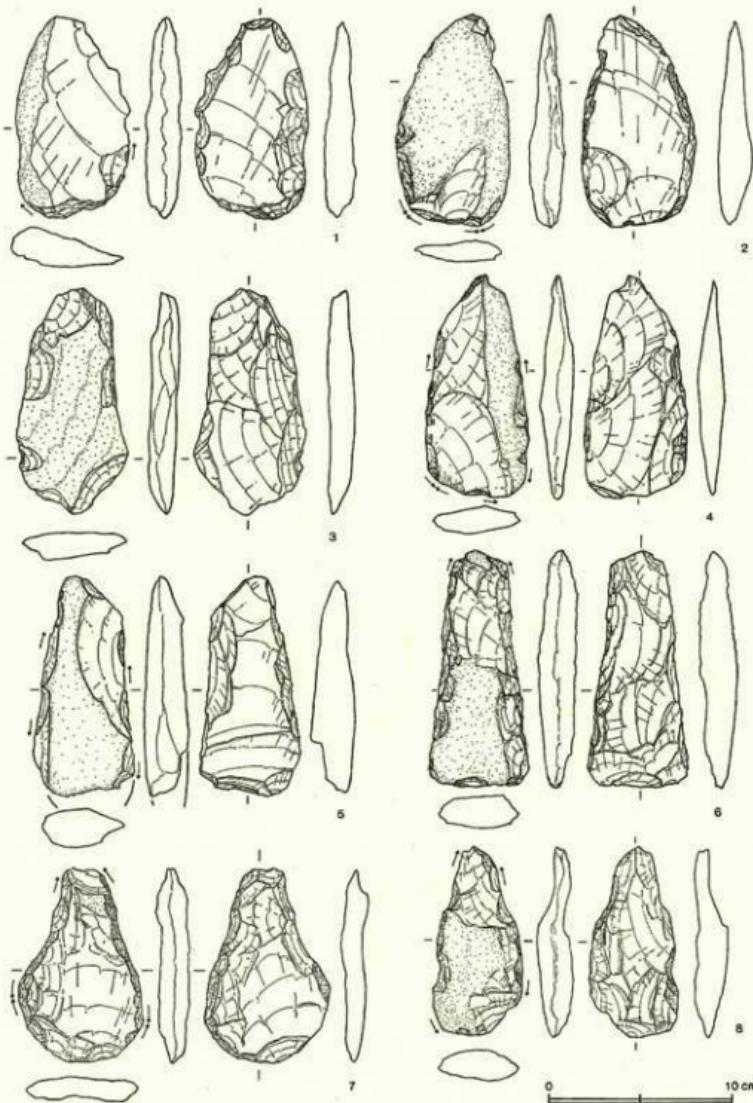
(H) その他

第53図2は、石核である。黒耀石を用いている。156は、厚みがある長円形の縁を素材とし、体部中位の両側縁に成形剥離による浅い括れを作り出している。刃部は細かく調整剥離が行なわれており、直線的に作られている。刃部上方には、斜方向に擦痕が認められる。158は円縁を素材とし、一次剥離による厚い剥片を用い、側縁の自然面はそのまま残し、剥離された2辺に調整剥離を行い刃部を作り出している。又a面は、敲打による浅い凹みを有している。これら2点は、刃部を有し、台としての要素を持っているものである。159は、a面に主要剥離面を、b面に自然面を有する厚手の剥片を素材とし、周縁に調整剥離を行っている。190~195は、器種認定の不明瞭なものである。190~191は、打製石斧などを作るさいの剥片と思われる。192は、片岩質であり、石皿片の可能性がある。また193は石棒、195は磨石の破片の可能性もある。

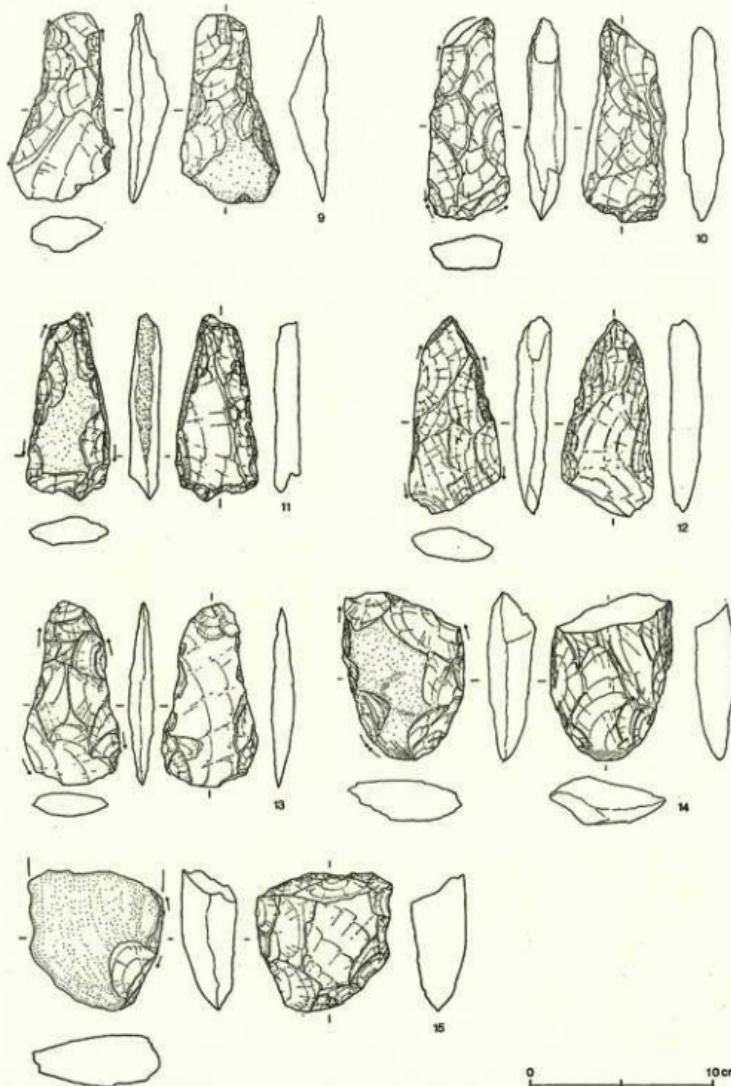
(稻生美代子)



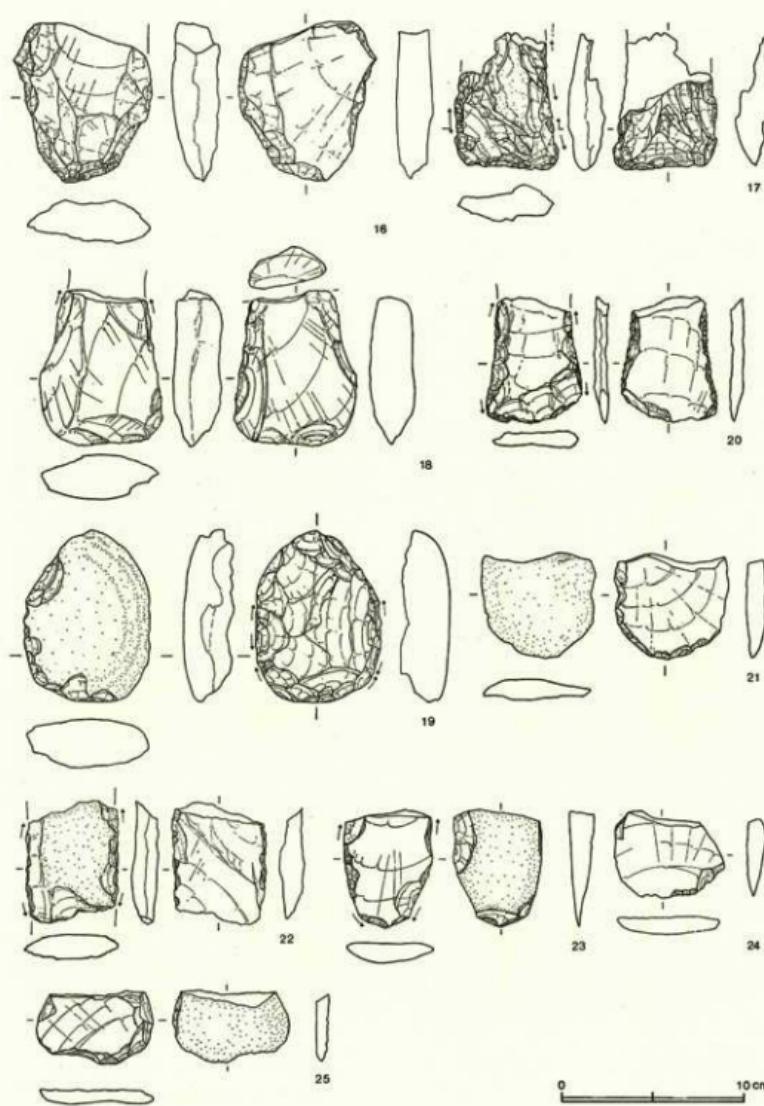
第53図 満・グリッド出土石器実測図(1)



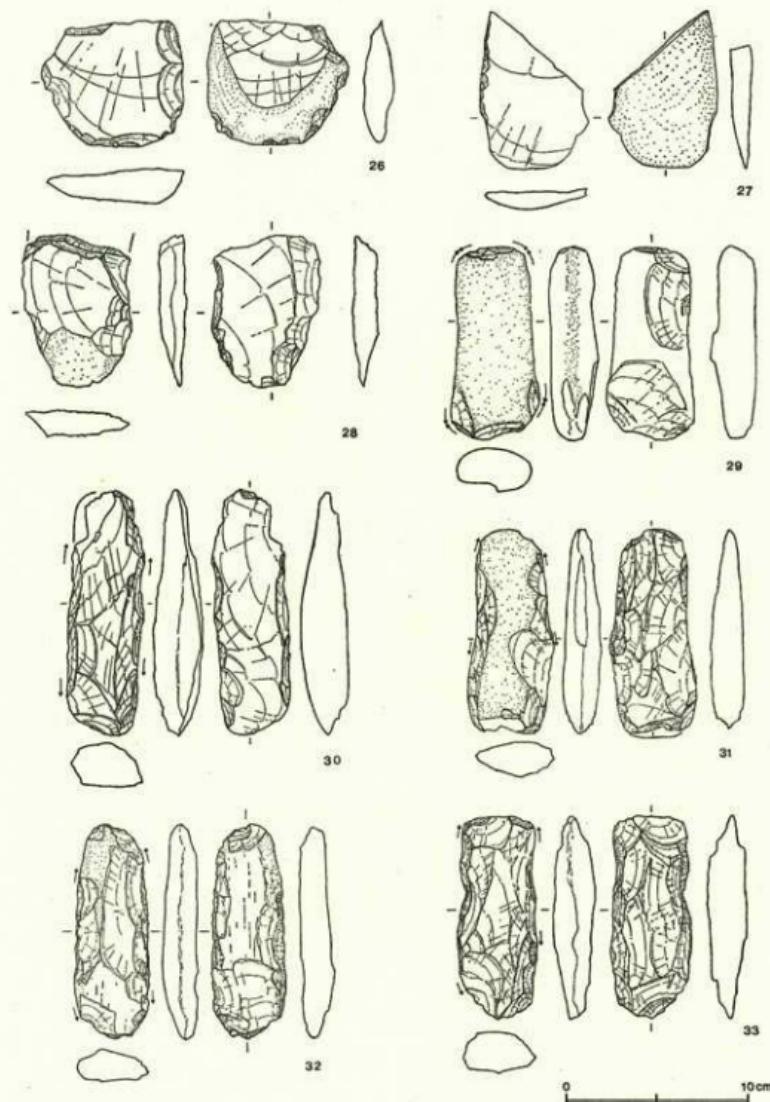
第54図 溝・グリッド出土石器実測図(2)



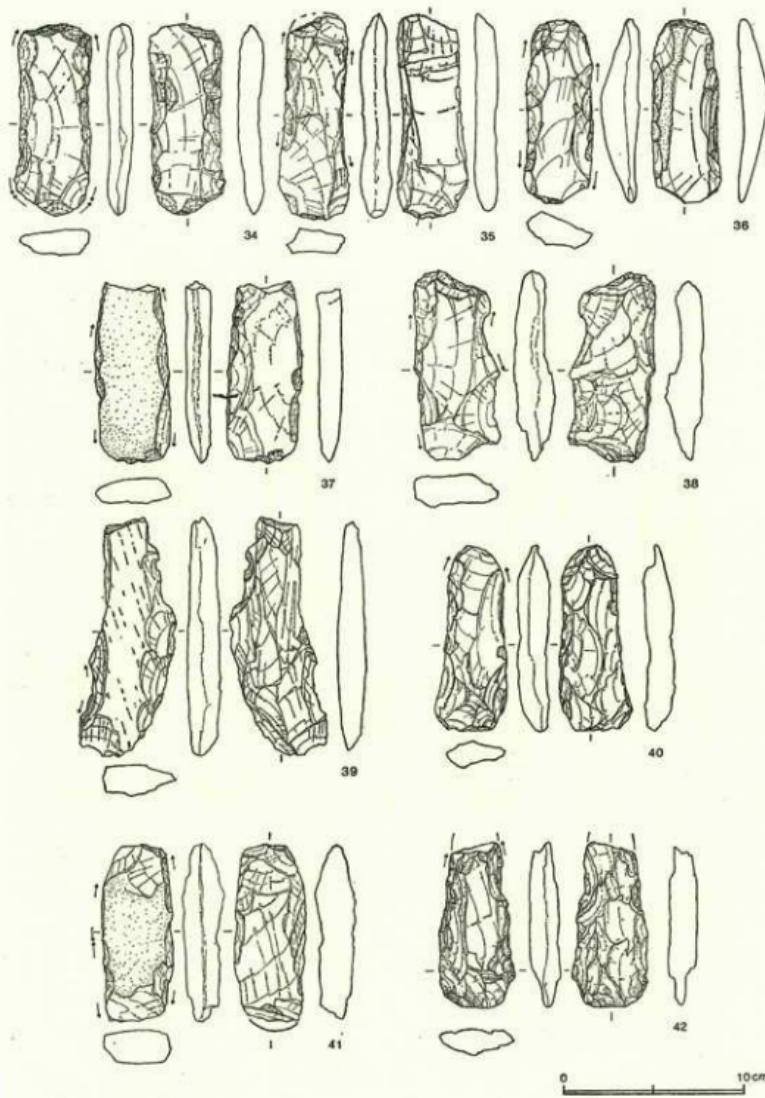
第55図 溝・グリッド出土石器実測図(3)



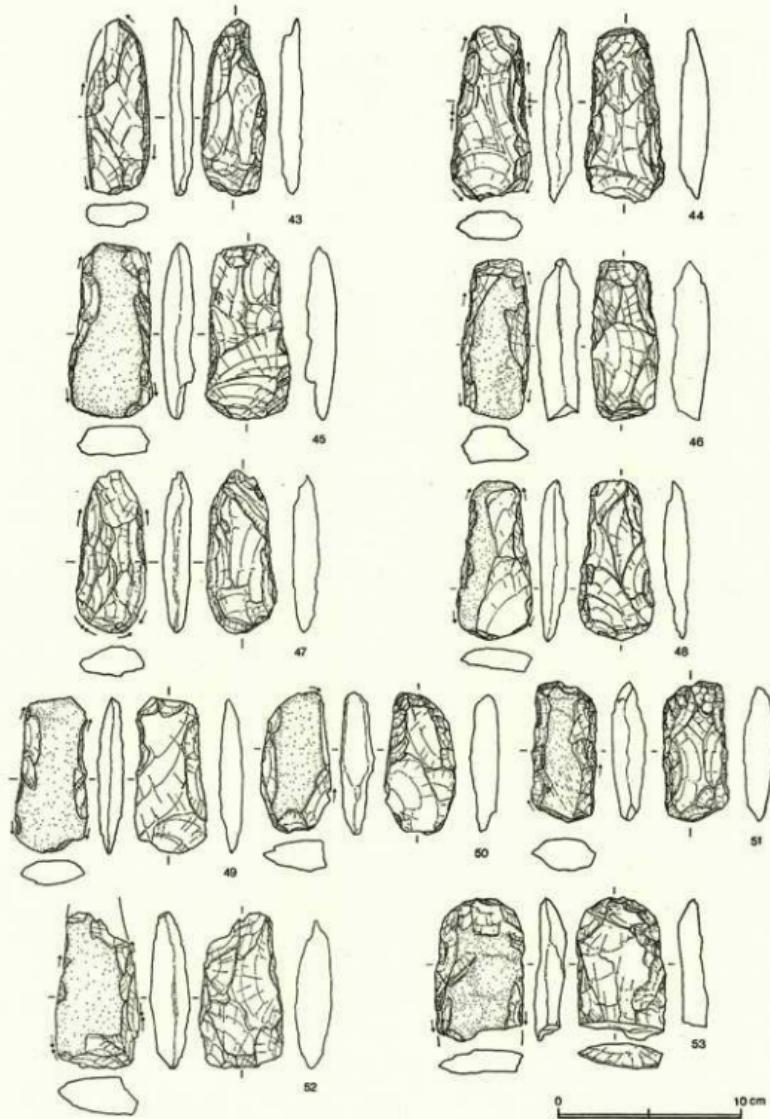
第56図 溝・グリッド出土石器実測図(4)



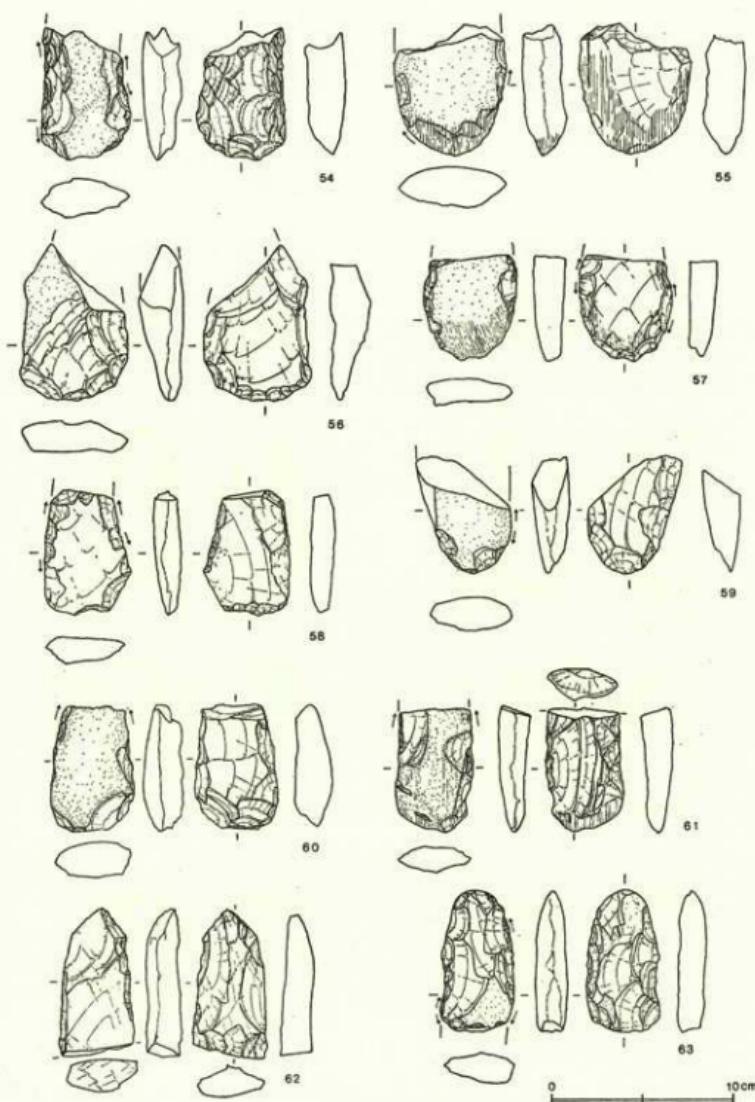
第57図 湿・グリッド出土石器実測図(5)



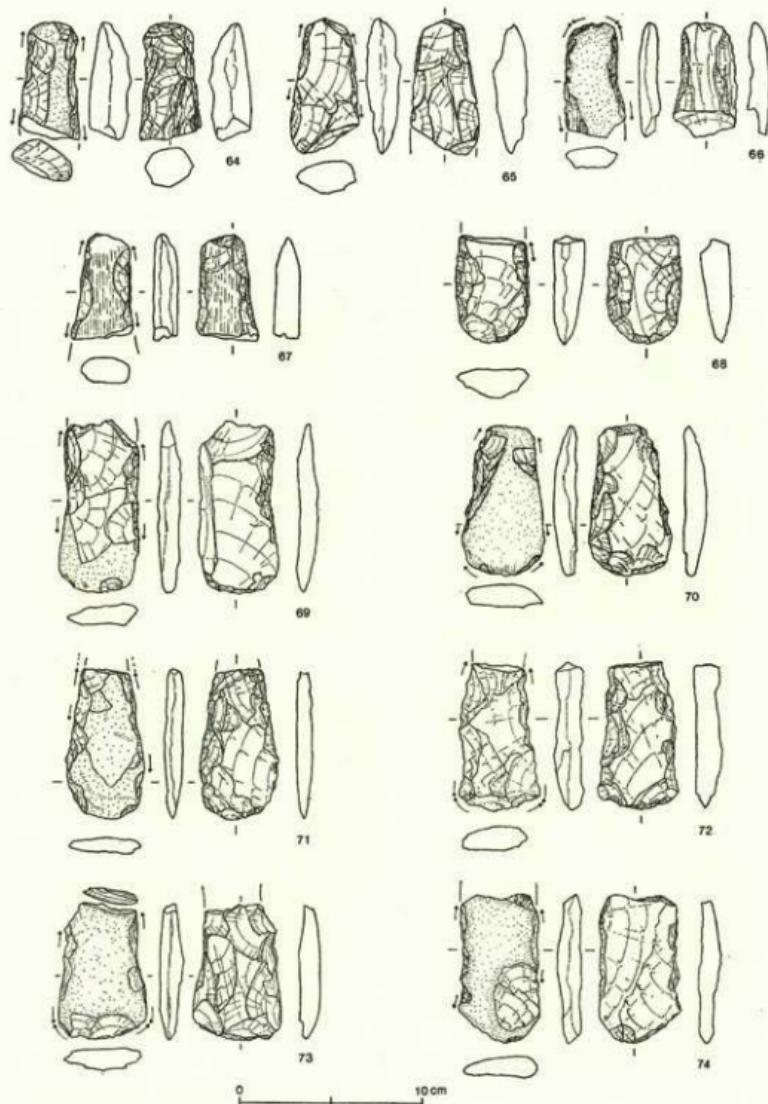
第58図 满・グリッド出土石器実測図(6)



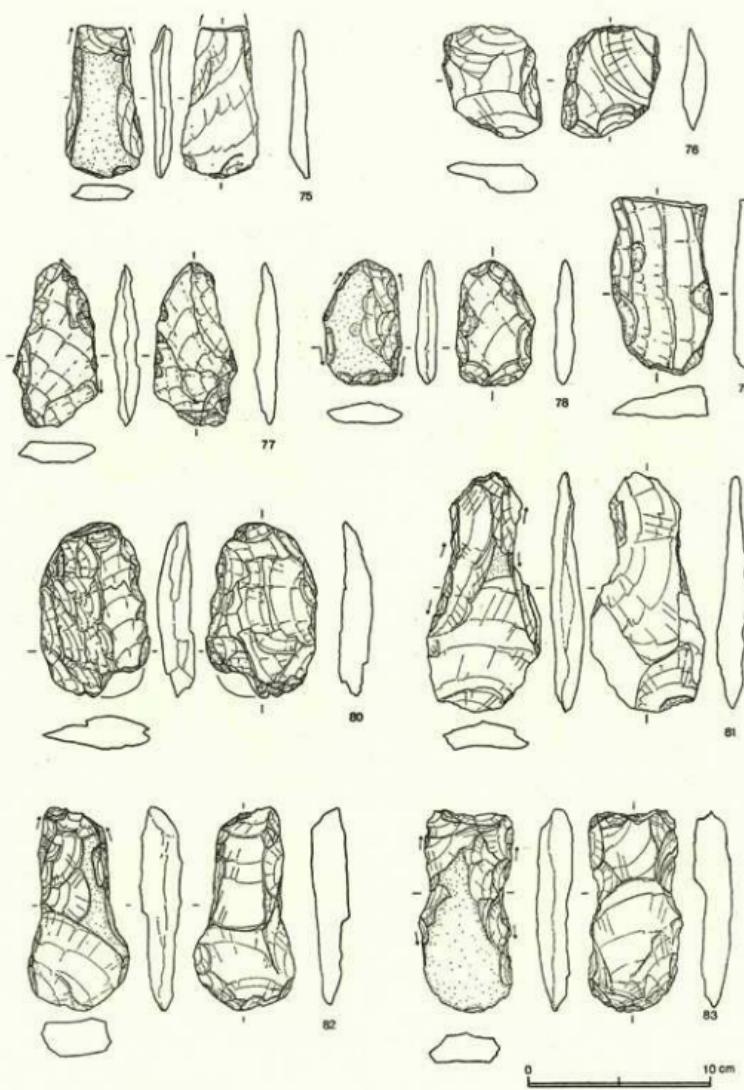
第59図 溝・グリッド出土石器実測図(7)



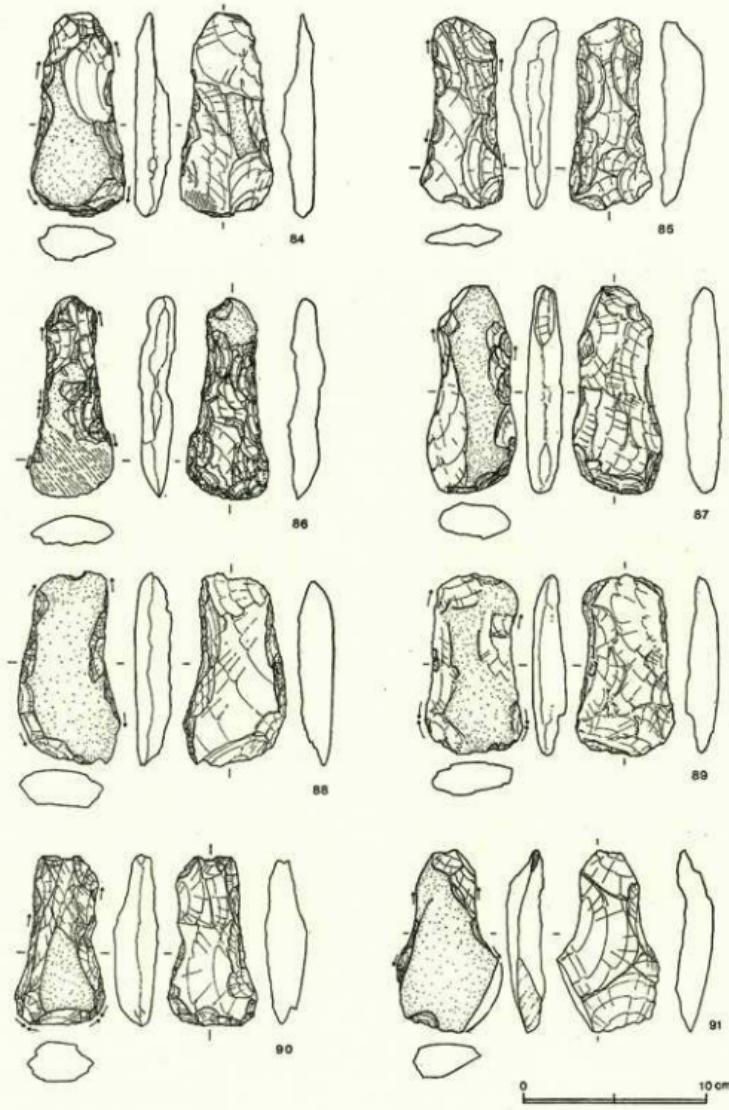
第60図 溝・グリッド出土石器実測図(8)



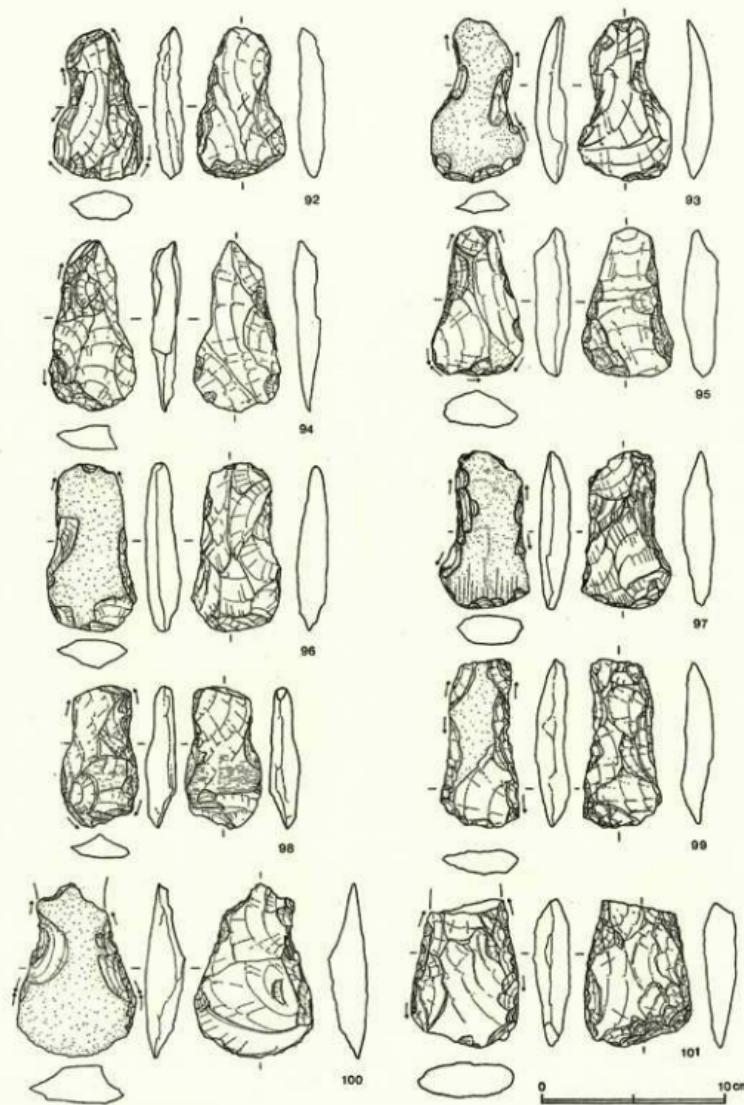
第61図 溝・グリッド出土石器実測図(9)



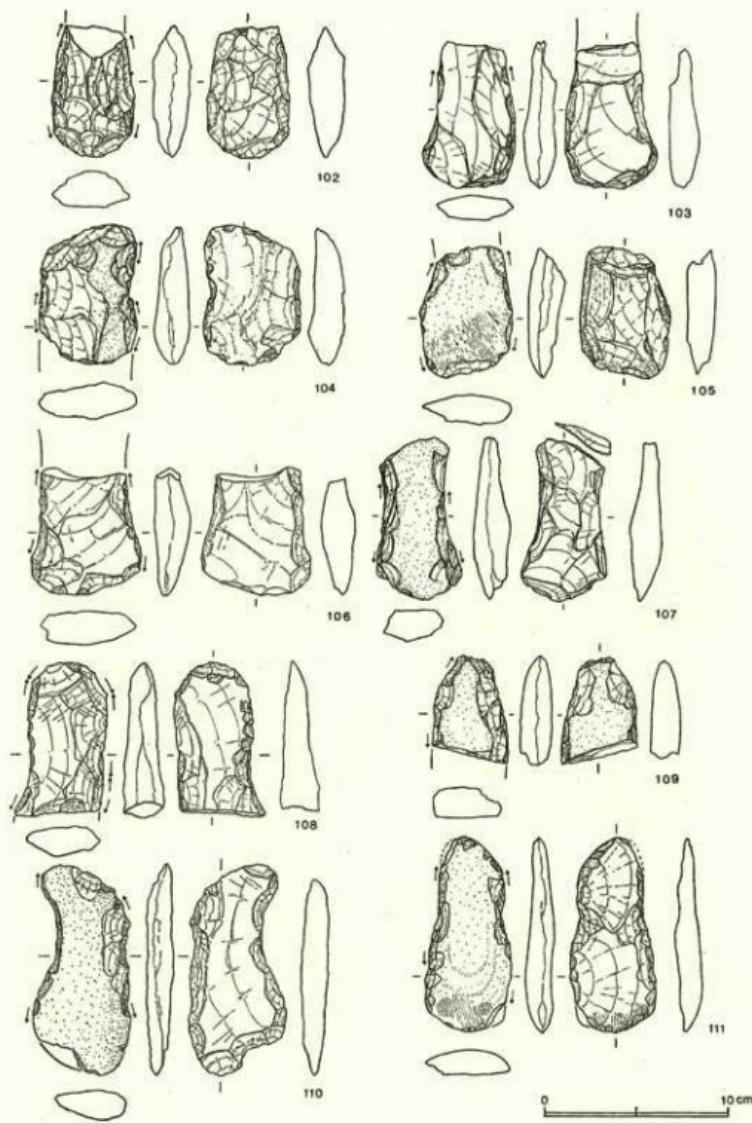
第62図 溝・グリッド出土石器実測図



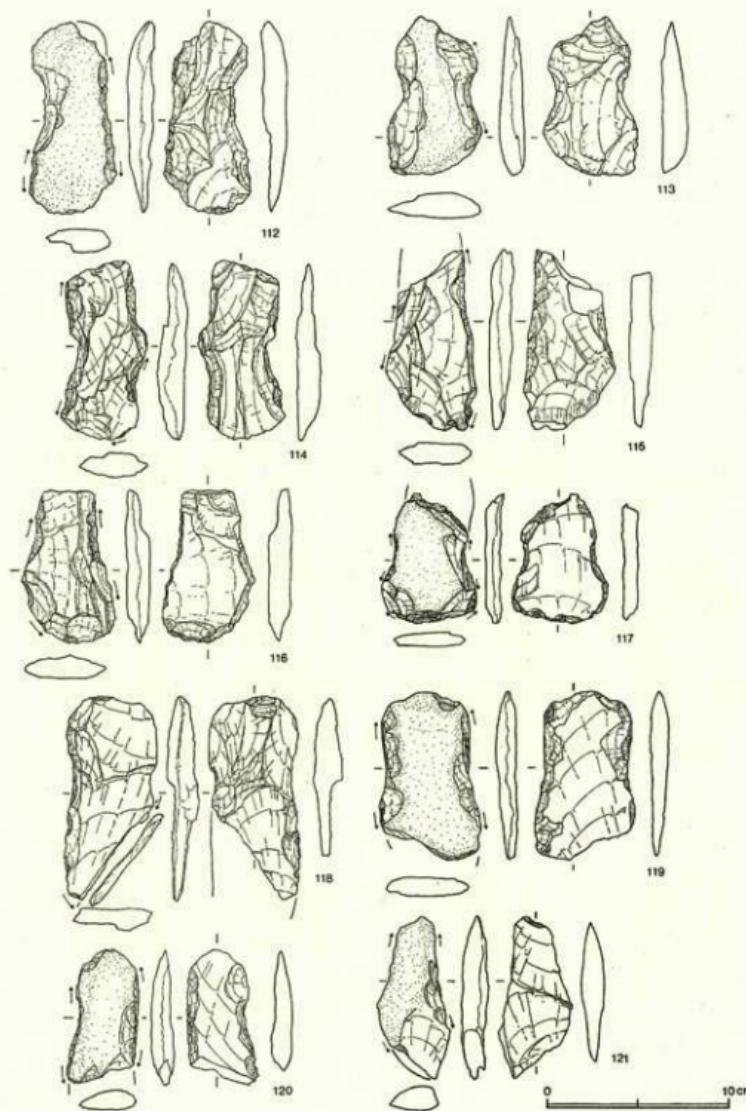
第63図 満・グリッド出土石器実測図



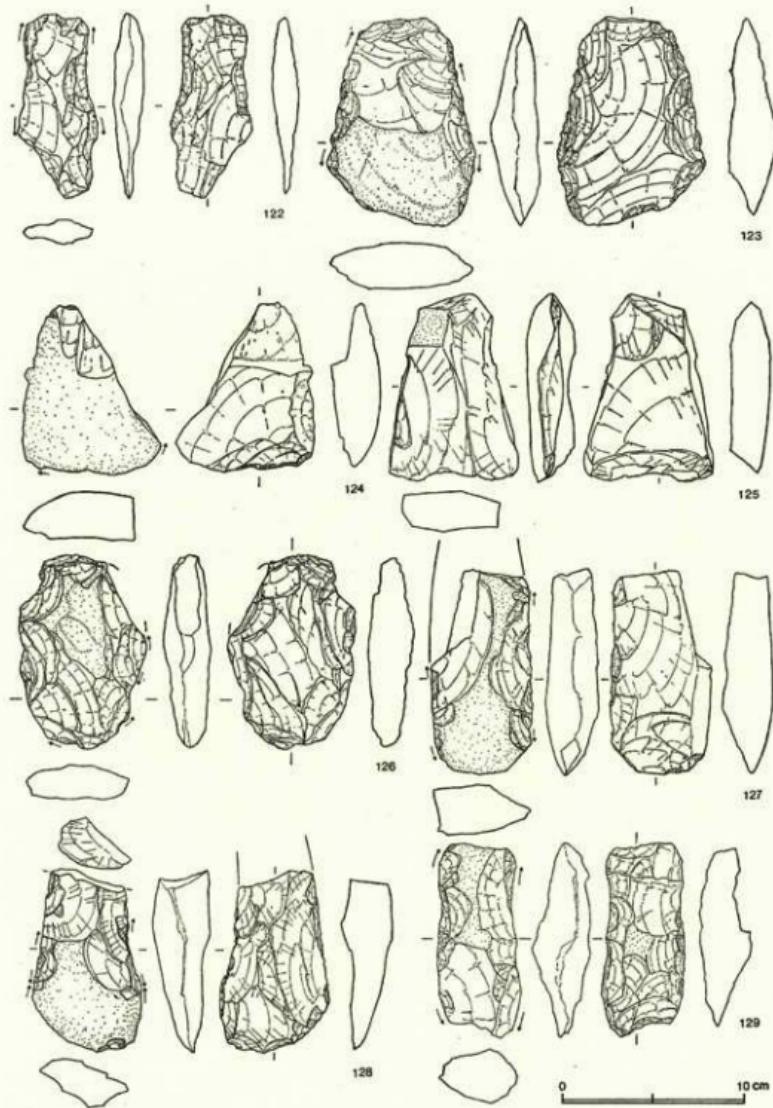
第64図 清・グリッド出土石器実測図2



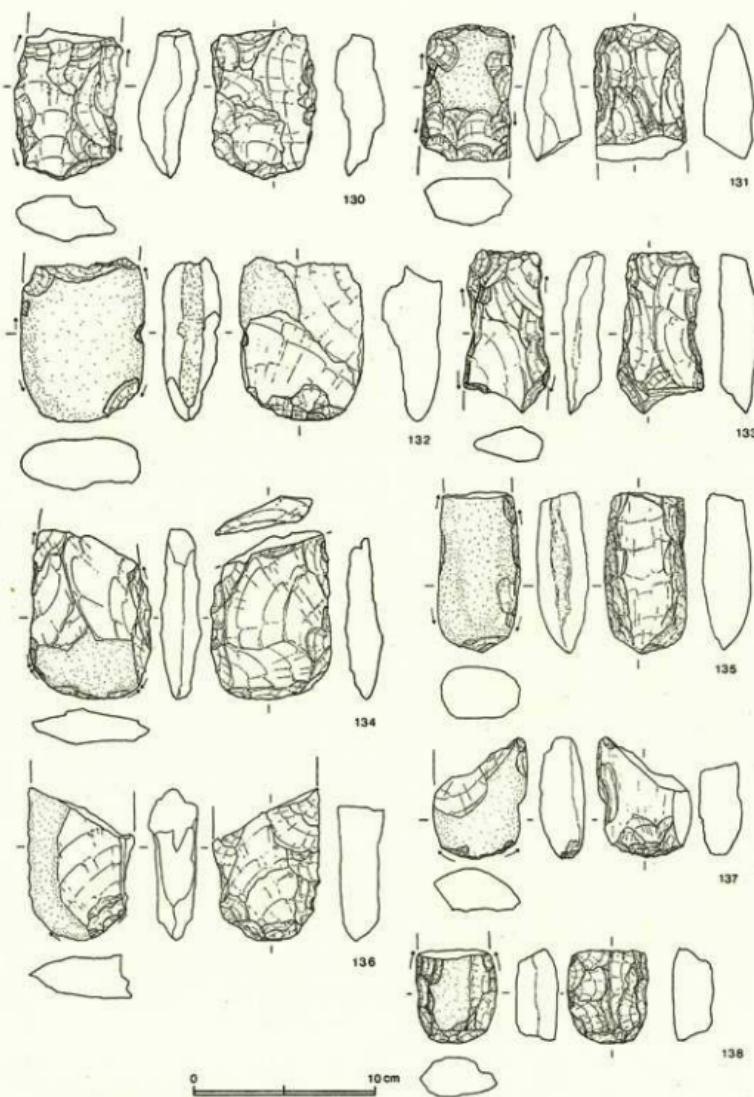
第65図 溝・グリッド出土石器実測図版



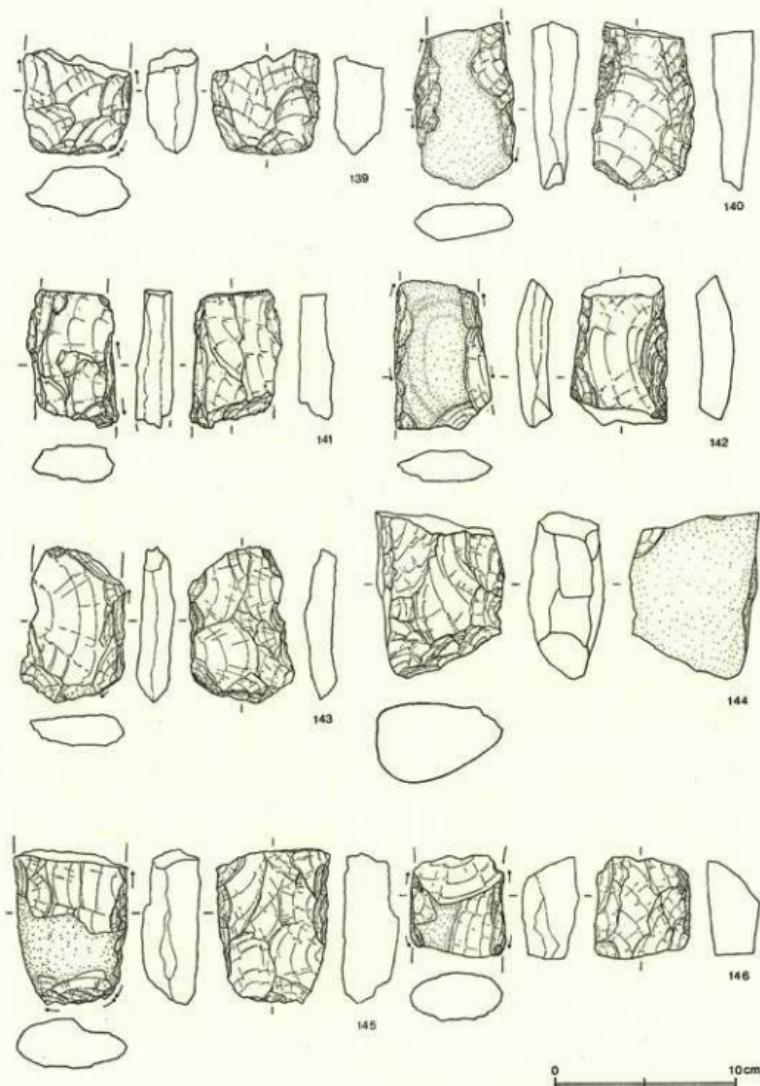
第66図 溝・グリッド出土石器実測図④



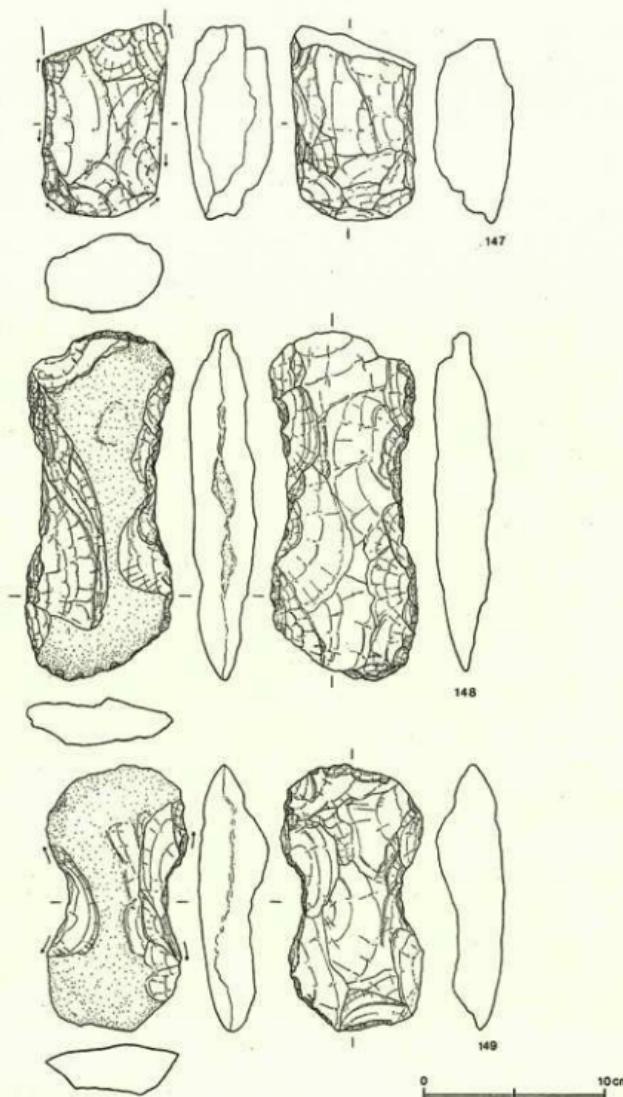
第67図 溝・グリッド出土石器実測図録



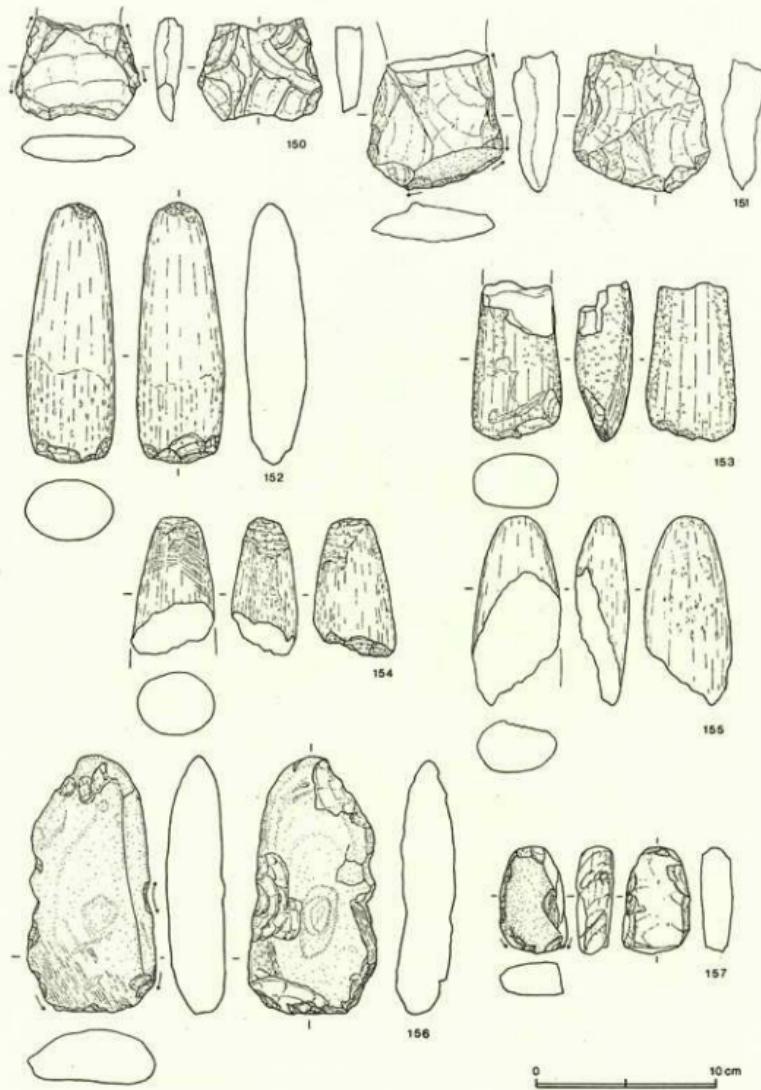
第68図 溝・グリッド出土石器実測図録



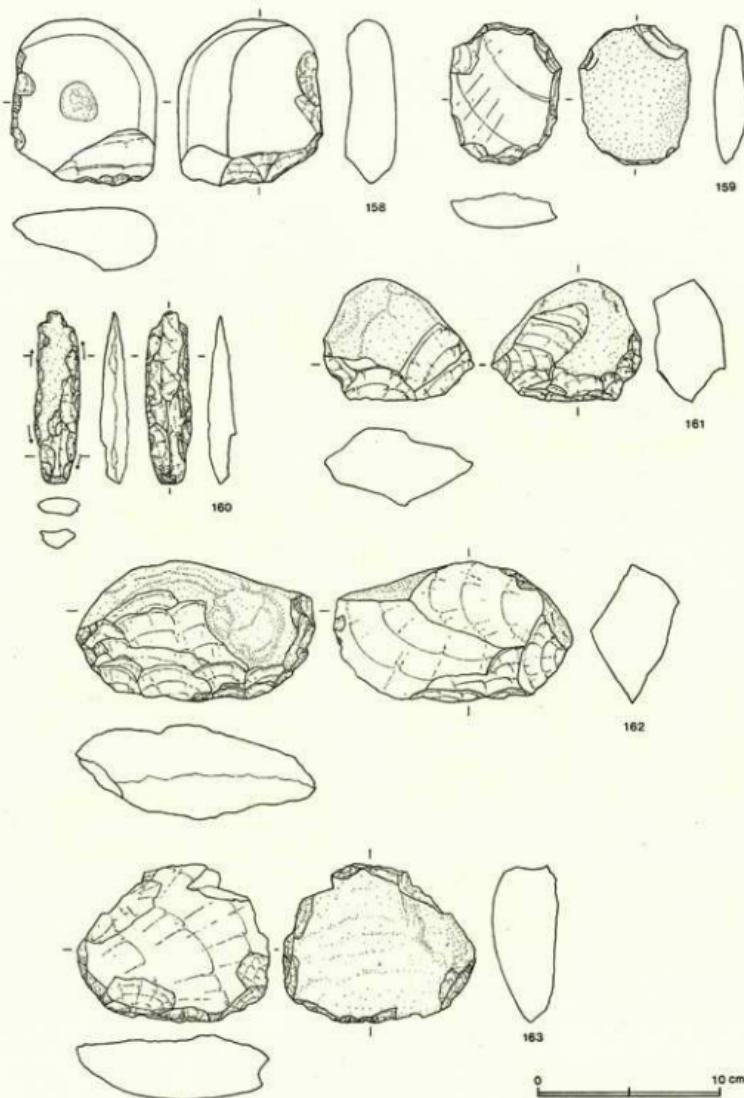
第69図 溝・グリッド出土石器実測図



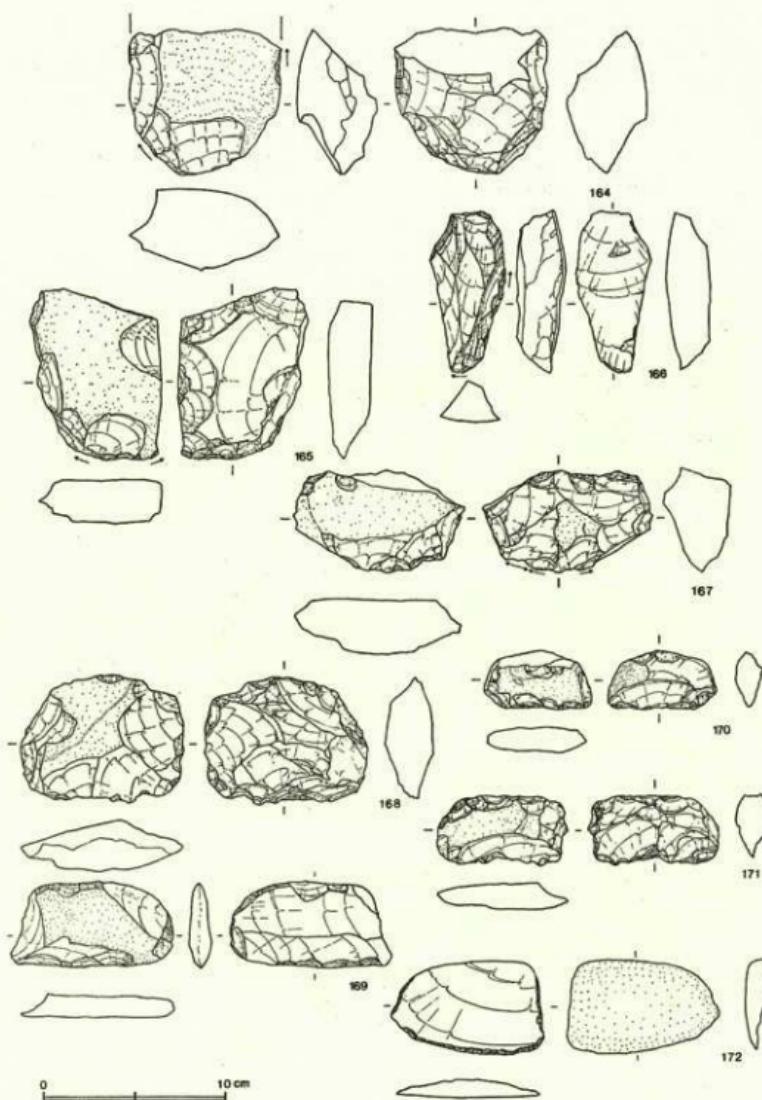
第70図 溝・グリッド出土石器実測図



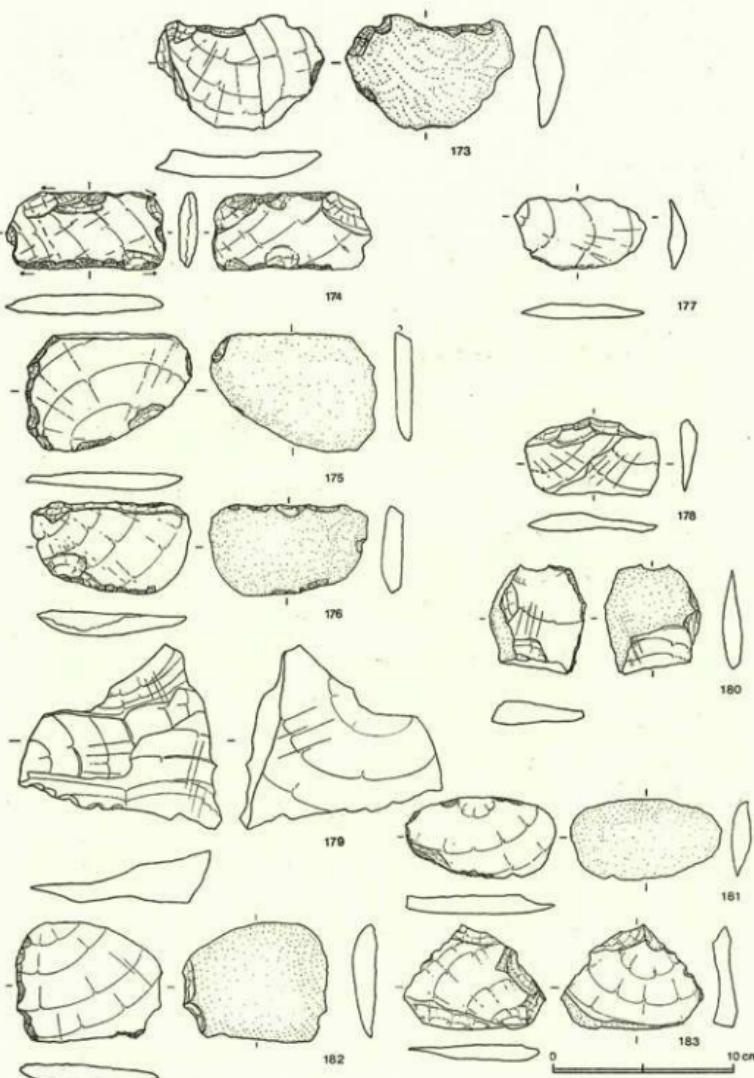
第71図 溝・グリッド出土石器実測図



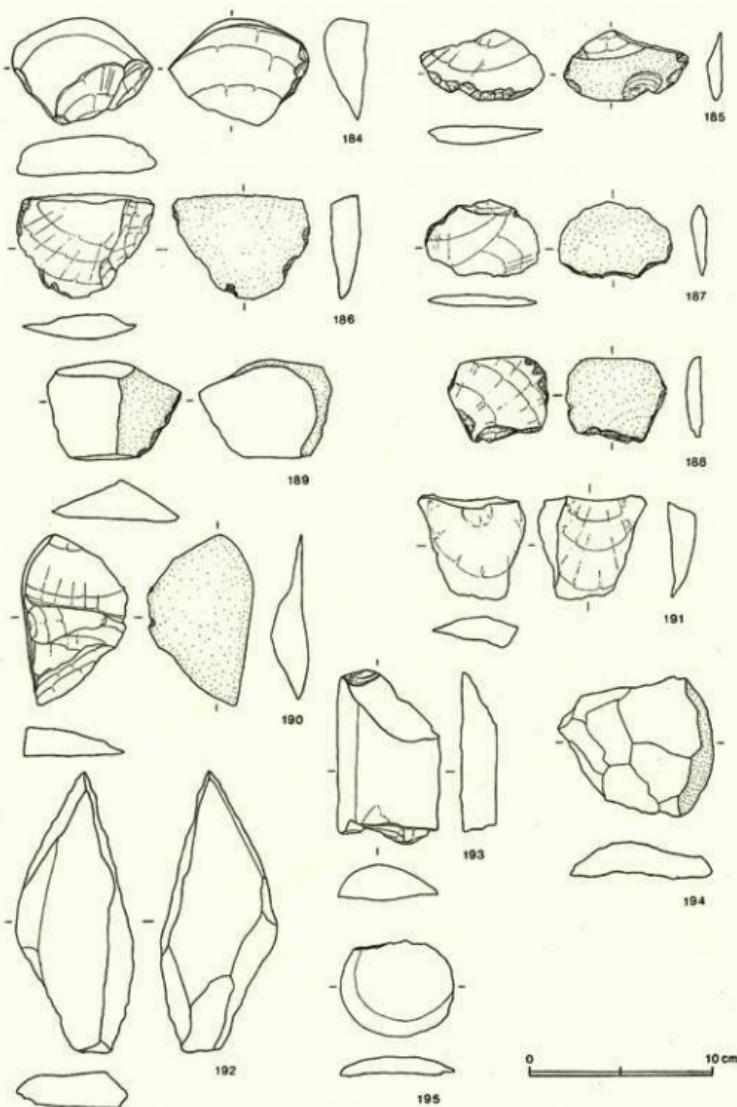
第72図 溝・グリッド出土石器実測図例



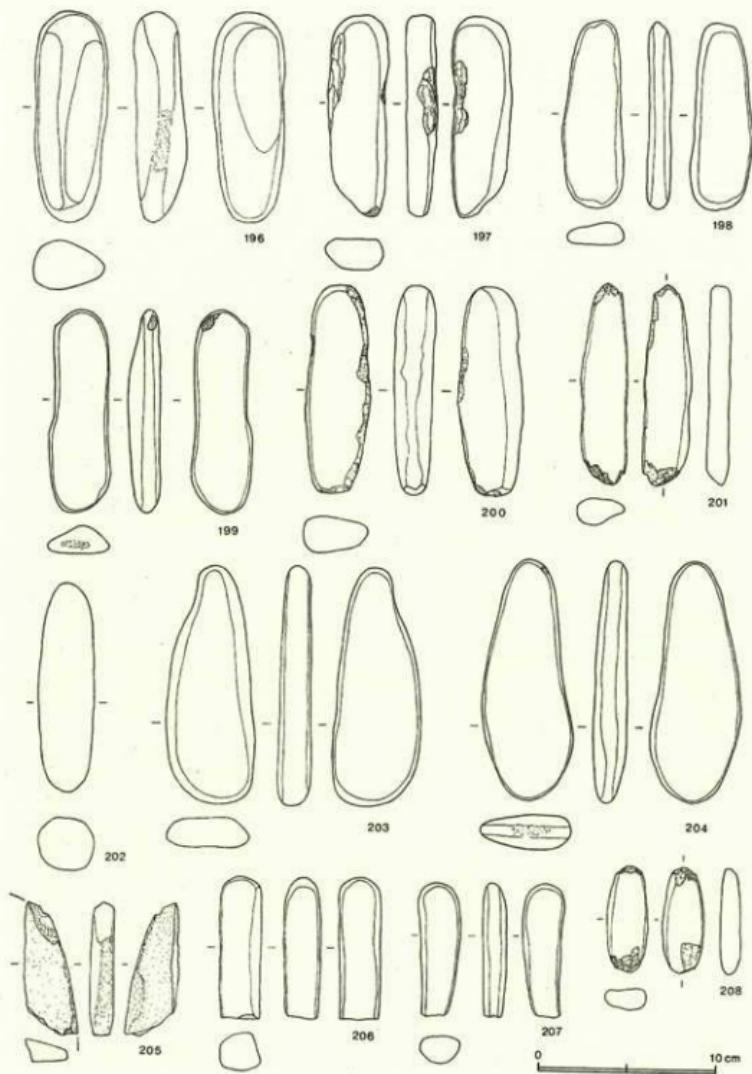
第73図 滝・グリッド出土石器実測図



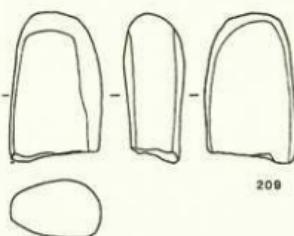
第74図 溝・グリッド出土石器実測図版



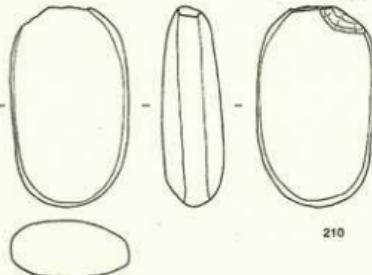
第75図 溝・グリッド出土石器実測図



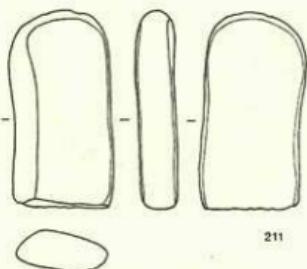
第76図 満・グリッド出土石器実測図録



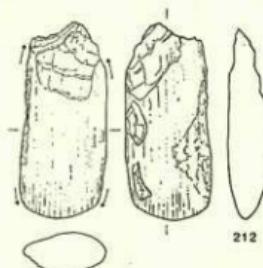
209



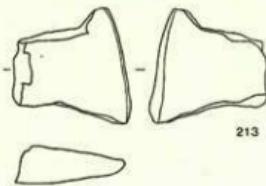
210



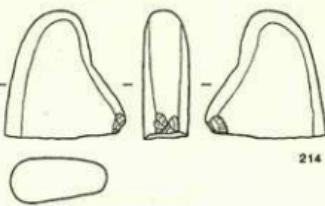
211



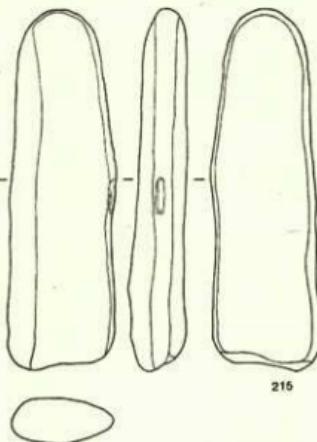
212



213



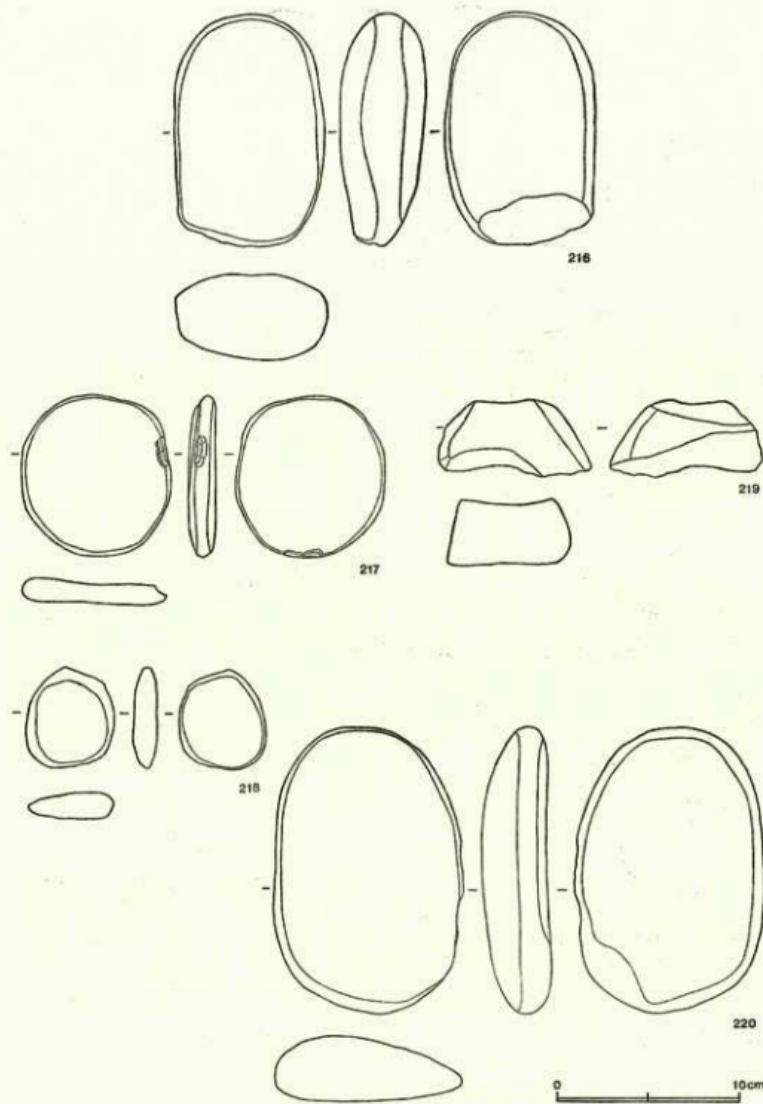
214



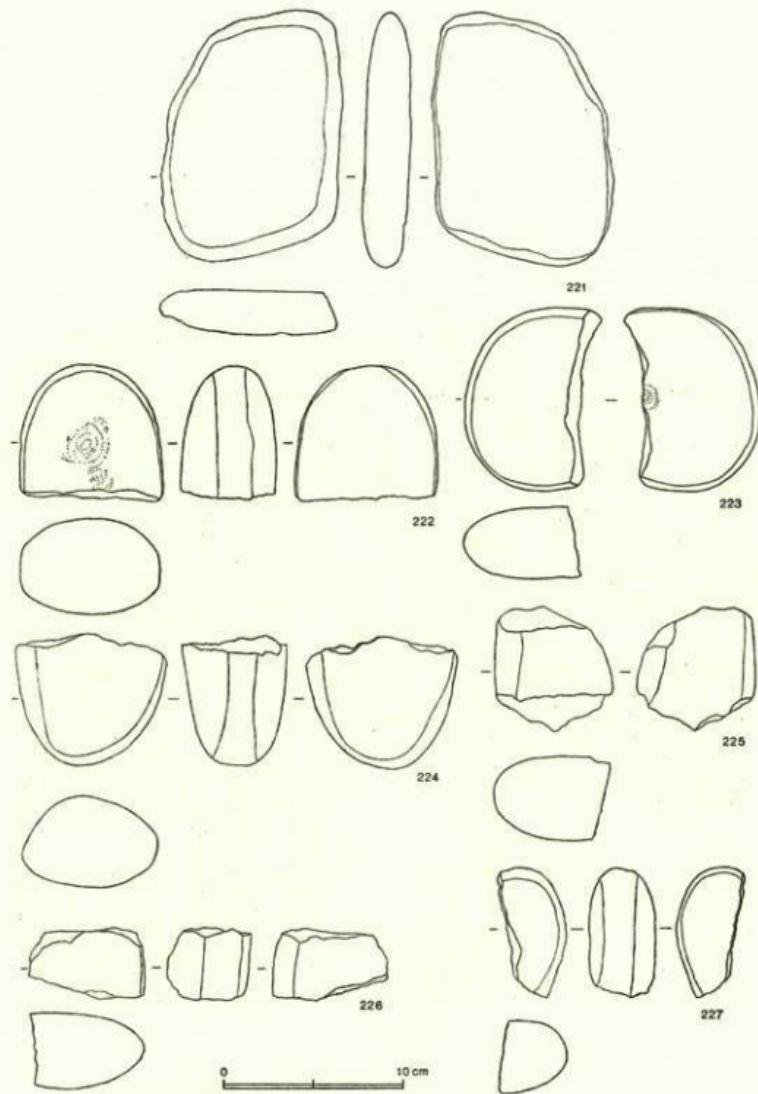
215

0 10 cm

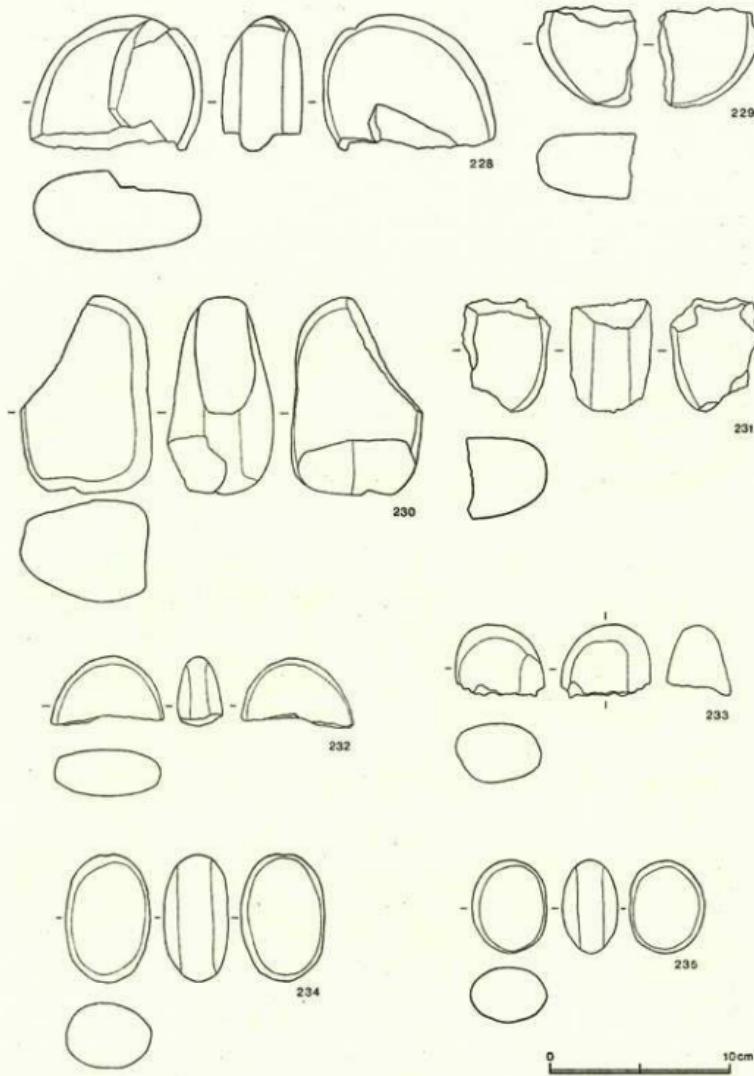
第77図 溝・グリッド出土石器実測図録



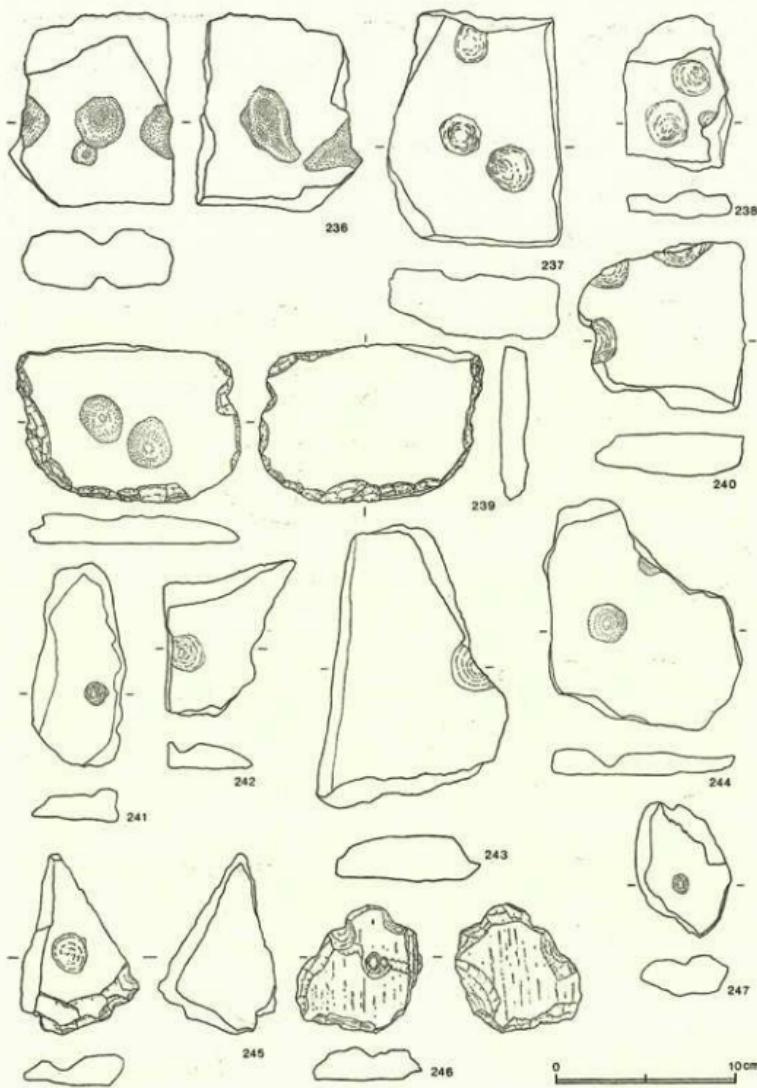
第78図 メシ・グリッド出土石器実測図録



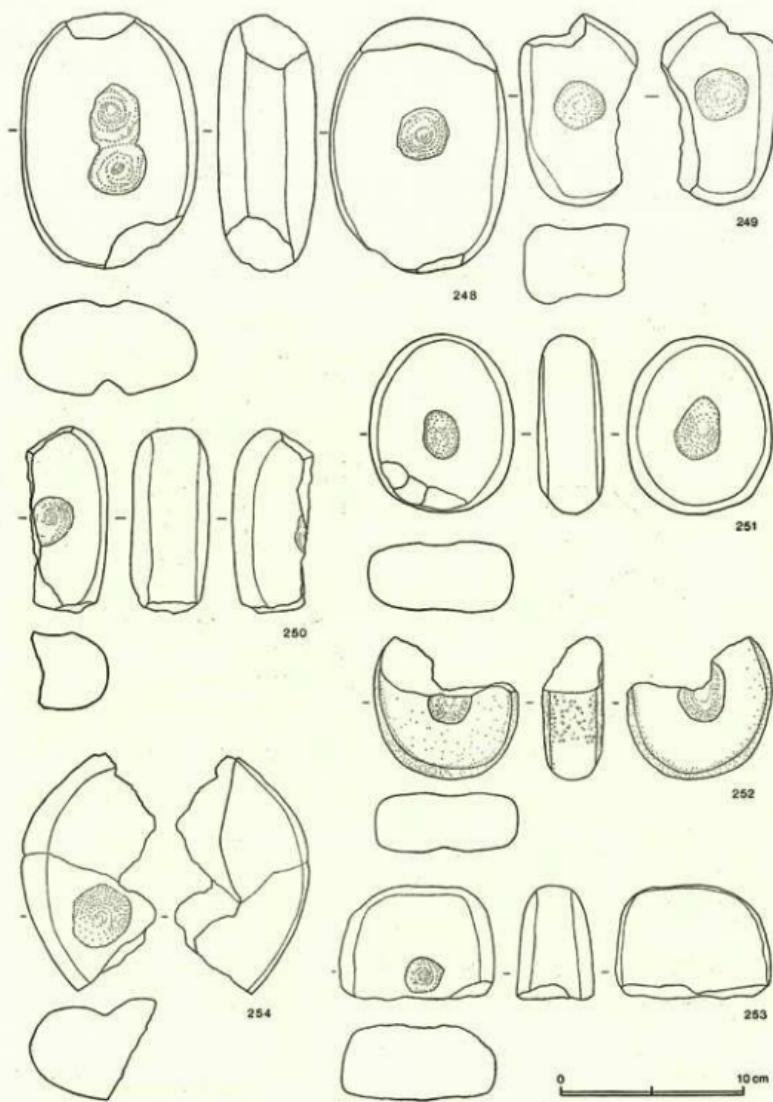
第79図 湿・グリッド出土石器実測図物



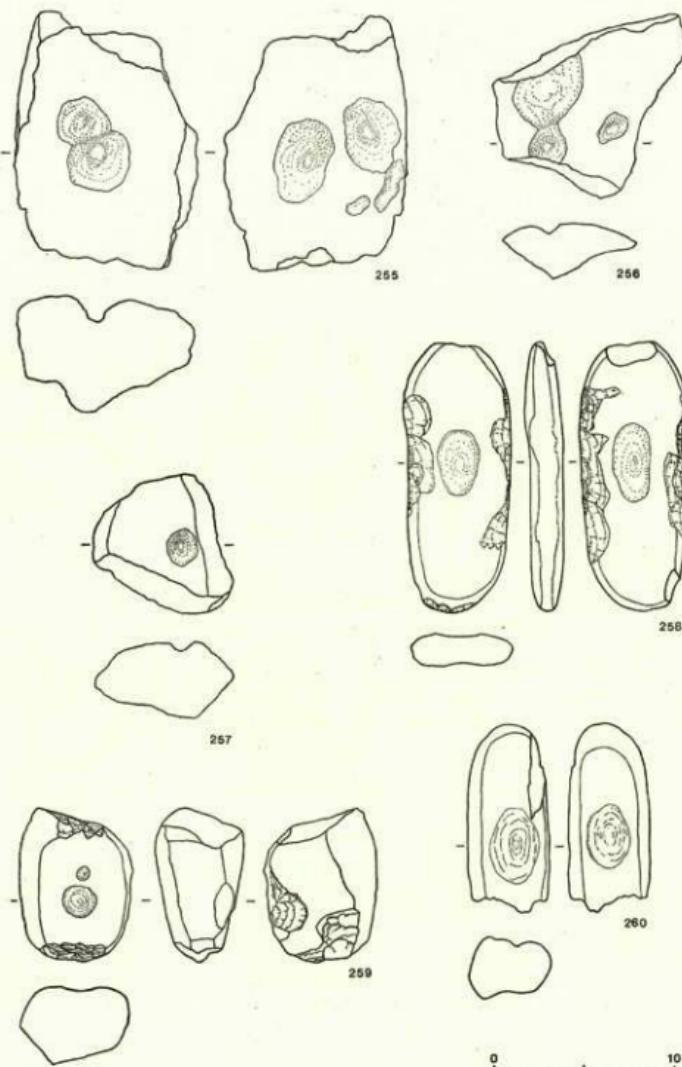
第80図 溝・グリッド出土石器実測図録



第81図 湿・グリッド出土石器実測図



第82図 溝・グリッド出土石器実測図(例)



第83図 湿・グリッド出土石器実測図(1)

番号	類別	出土地点	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 質	図番号	備 考
286	F-3	D-3 溝	(6.1)	(4.8)	4.4	157.0	砾岩	231	%欠
287	F-3	D-4 1号溝	(3.3)	6.2	2.5	66.5	石英閃綠岩	232	〃
288	F-3	C-3 溝	(3.7)	4.9	3.5	78.5	石英斑岩	233	%欠
289	F-3		7.0	4.7	3.6	157.0	石英斑岩	234	
290	F-3	D-4-1-21	5.1	4.1	3.0	88.5	細粒砂岩	235	
291	F		—	—	9.7	572.0			%欠
292	F		(6.1)	(8.0)	(6.4)	491.0	石英閃綠岩		〃
293	F		(2.6)	(9.5)	(3.9)	175.0			〃
294	F	D-4	(4.9)	(3.3)	(1.4)	30.0	細粒砂岩		〃
295	F	C-46	(4.2)	(6.5)	(3.7)	130.0	中粒砂岩		〃
296	F		(5.4)	(5.2)	(2.4)	105.0	石英閃綠岩		〃
297	F-4	E-3 溝	(10.5)	(9.1)	3.1	365.0	安山岩	236	凹穴のみ存
298	F-4	C-3 1号溝	(12.8)	(9.6)	3.4	710.0	綿雲母片岩	237	〃
299	F-6	B-3 溝	(8.6)	(5.9)	1.5	111.0	綿雲母片岩	238	〃
300	F-5	C-4 P-1	(8.6)	11.9	1.5	331.0	綠泥片岩	239	〃
301	F-6	C-3 溝	(9.4)	(9.1)	2.3	331.0	石墨片岩	240	〃
302	F-6	3-3 溝	11.2	4.9	1.8	159.0	石墨片岩	241	〃
303	F-6	C-3 溝	(7.4)	(6.7)	1.4	108.0	綠泥片岩	242	〃
304	F-6	C-4 溝	(14.8)	(9.9)	2.5	542.0	綠泥片岩	243	〃
305	F-6	D-4	(12.0)	(10.7)	1.2	235.0	綠泥片岩	244	〃
306	F-6	D-3 溝	10.0	(6.5)	1.7	104.0	綠泥片岩	245	〃
307	F-6	E-5-92	7.0	6.6	1.8	106.0	綠泥片岩	246	
308	F-6	A-4	6.8	5.2	2.1	109.0	綠泥片岩	247	〃
309	F-7	C-3 溝	13.8	9.6	5.3	1123.0	石英閃綠岩	248	
310	F-7	B-3 溝	(10.4)	6.4	4.3	339.0	石英斑岩	249	%欠
311	F-7	B-3-4 1号溝	(10.0)	(4.1)	4.1	236.0	粗粒砂岩	250	%欠
312	F-7	D-4 1号溝	9.7	7.9	3.5	439.0	石英閃綠岩	251	
313	F-7	C-4-105	6.8	7.9	3.2	242.0	安山岩	252	%欠
314	F-7	C-3 1号溝	(6.0)	8.4	4.2	330.0	粗粒砂岩	253	〃
315	F-8	C-4-242	12.1	(6.9)	4.7	502.0	安山岩	254	%欠
316	F-9	C-4 溝	(13.1)	10.1	5.1	1000.0	砾岩	255	凹穴のみ存
317	F-9	C-4-5	(9.2)	9.5	2.8	247.0	粗粒砂岩	256	〃
318	F-9	B-4 溝	(7.6)	7.1	4.1	239.0	綠泥片岩	257	〃
319	F-10	E-F-3 1号溝	14.7	5.6	1.8	288.0	綠泥片岩	258	
320	F-10		7.9	6.1	4.8	305.0	粗粒砂岩	259	
321	F-10	C-3 1号溝	(10.2)	4.5	3.4	257.0	石墨片岩	260	%欠

V 結 語

1 住居跡と集落について

嵐山町で縄文中期を主体とする集落跡が調査されたのは、本遺跡が初めてである。地形や遺物の分布状態を見ると調査を実施したのは遺跡の北側半分程であり、集落はさらに南側につづくことが予想される。しかし、平坦部の少ない丘陵であり、調査区域の住居跡の分布状態からも全体で20基程度のものであろうと思われる。

斜面による壁の流失や土質の問題により、住居跡の正確なプラン・規模・構造が確認できたものはないが、プランについてはピットの位置、数をその推定要素とした。ピットについても、その深さを比較するため各住居跡の柱穴深度表を作成して、エレベーションにかからないピットについてもそのプロフィールを観察できるようにした。

検出された縄文中期の遺構は、住居跡7基、土壙6基で、これにピット群が加わる可能性が強い。出土器は勝坂式末～加曾利EⅢ式に及んでおり、各住居跡の時期は次のとおりである。

勝坂式末～加曾利EⅠ式 1号、2号住居跡

加曾利EⅠ式 3号～5号住居跡

加曾利EⅡ式 7号住居跡

加曾利EⅢ式 6号住居跡

この他に、土壙（2号、5号、6号）からも、加曾利EⅠ式土器が出土している。

縄文中期の住居形態については、いろいろな分類がなされているが、（加藤緑 1975）、（安孫子昭二 1978）、（柿沼幹夫他 1977）本遺跡の住居跡は円形、梢円形プランを基本としている。しかし、前述したように遺存状態は良好とは言えないので、細部に亘る検討をするには充分な資料ではないが、いくつか気付いた点を以下に述べることにする。

プラン 円形を呈すものが、4号、6号住居跡で、梢円形のものは1号、3号住居跡であり、他は重複等により不明である。

壁溝 全周すると確認できたものはないが、1号、4号、5号、6号住居跡に存在する。6号住居跡のものは、部分的に完結しているもので、全周する可能性はないが、1号、4号住居跡は、全周している可能性が強い。傾斜地に構築されている住居跡については、斜面上方の壁下に壁溝が存在している場合が多いが、5号住居跡もその一例であろう。

炉 7基の住居跡のうち炉跡を確認できたものは、1号、2号、6号、7号住居跡の4基だけであり、他はそれらしい落ち込みは見られたが焼土は検出できなかった。1号、6号住居跡は埋甕炉であり、2号、7号住居跡は地床炉である。石器炉はない。

柱穴 8本柱穴の1号住居跡と壁に沿って巡る3号と、4号住居跡がある。1号住居跡の場合は主柱は4本であり、北側に2本の支柱と、南側に入口に関する施設と考えられる2本の柱穴がある。梢円形というプランもこれらの支柱、入口部の存在を意識して決定したものであろう。柱穴、炉、土壙はほぼ南北を指す主軸線を中心として対象的に位置しており、計画的にそして整然と構築

されている。

埋甕 6号と7号住居跡で確認された。両住居跡は重複しているが、本遺跡の中でも新しい時期のものである。

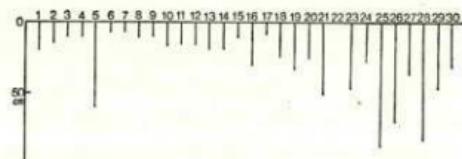
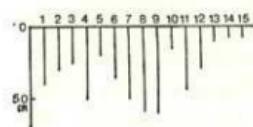
さて、以上のような住居跡の特徴をもつ中郷の集落はどのような変遷をしたのであろうか。出土土器から見た各住居跡の時期は前述したように、勝坂末期から加曾利EⅢ期まで及んでいるが、その中心は加曾利EⅠ期である。該当するものは、1号～5号住居跡であり、加曾利EⅠ、Ⅱ期の6号、7号住居跡とは埋甕の有無という住居構造上の点でも相異が見られる。1号～5号住居跡の5基の住居跡の中で土壙との位置関係が共通するものがある。つまり、1号住居跡と1、2号土壙、4号住居跡と6号土壙、5号住居跡と5号土壙であり、いずれも住居の東3～5mに土壙が位置している。3号住居跡内の東側に大形のピットがあるが、これを土壙と考えた場合には2号住居跡も同様な関係にあるが、残念ながら3号住居跡との先後関係を確認するには至らなかった。

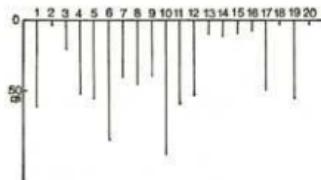
このような住居と土壙との関係は、新しい時期の6号、7号住居跡には見られないものであり、加曾利EⅠ期の一つの特徴と考えることもできるが、1号住居跡の住居構造と他住居跡との違いや3号住居跡には土壙が伴わないことなど問題も多い。本遺跡で最も古い要素をもつ1号住居跡が土壙を伴い、加曾利EⅠ期の中では3号住居跡だけが土壙を伴っていない。これらのことを考えあわせると、集落の変遷は、1号住居跡→2号、4号、5号住居跡→3号住居跡→7号住居跡→6号住居跡となることが予想される。しかし、土壙の存在にこだわれば、1号と2号、4号、5号住居跡が同時に存在した時期があったと考えることもできる。

調査を実施したのは集落の部分にすぎないが、これまでのまとめにかえて中郷集落を素描してみると、勝坂末期の要素をもつ1号住居跡が最初に出現し、土壙を住居の東に設ける。そして加曾利EⅠ期には1号住居跡と同様な土壙を伴う住居群が構築され中郷集落の最盛期を迎える。その後土壙はなくなり、加曾利EⅡ期になると埋甕をもつ住居が出現するが、住居数は減少し、そのまま加曾利EⅢ期へ引き継がれる。周辺地域の分布調査でもこれ以後の土器は採集されていない。

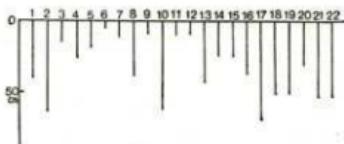
土壙と埋甕の存在はそのまま土壙をもつ集団と、埋甕をもつ集団と集団の相異を示すものなのか、あるいは同一集団内での変化としてとらえられるのかをここで述べる程資料は豊富ではないが、それぞれの機能や、住居と土壙との位置関係を考える上での資料となる遺跡であろう。

(井上尚明)

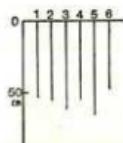




3号住居跡ピット深度表



4号住居跡ピット深度表



5号住居跡ピット深度表



6、7号住居跡ピット深度表

2 出土土器について

中郷遺跡で検出された土器群は諸畿 b式、勝坂式後葉、加曾利E I ~ IV式があるが諸畿 b式および加曾利E IVはグリッド出土の数片のみで、造構は検出されず、主体をなすのは勝坂~加曾利E II式土器であった。1~7号住居跡のうち2、4号住居跡をのぞくと覆土出土の土器は少量であるがその主体となる土器群から各跡の時期をみると、1、2号住居跡が勝坂式末、3~5号住居跡が加曾利E I式、6号住居跡がE II式、7号住居跡がE III式とすることができる。

勝坂式期の土器は2号住居跡でややまとまっている。勝坂式土器はいづれも終末期に位置づけられるもので、深鉢では口縁部に把手をもち、口縁無文部以下に横円区画をもつ第11図8等に代表され、これに繩文、幅広刺突、結節沈線、沈線が施された円筒深鉢、無文浅鉢が加わる。ただ1点新道以来の系譜を繼ぐ口縁部文様帶をもつ例(第11図6)が出土している。これらの土器群に中峰式近似土器(第10図1)および阿玉台式土器(第11図1~5)が混出している。

第10図1は無文口縁部がやや外反し、下部がふくらむ中峰的器形を呈し、鋸歯文ないし交互刺突文、隆帶貼付などにより特徴づけられる深鉢は関東西部では勝坂式末から加曾利E I式前葉にかけて散見される。県内では高井北遺跡5号住居跡(吉川 1976)、原遺跡(宮崎 1977)、花積遺跡2A号住居跡(下村 1970)、秩父山遺跡1号住居跡(赤石 1978)、下安松出土土器(三上 1971)などに類例が見られるが、本遺跡例は中峰式土器そのものに酷似する。高井北遺跡例と共に谷井編年(註)の井戸尻Ⅱ期(中峰古)に位置づけられよう。併出した阿玉台式土器は少く図示した土器群がすべてである。さらに上記の土器群に併行するのは4のみであり、1、2は粘土紐を芯とした小突起をもち古相を呈している。勝坂式後葉に位置づけられているいわゆる阿玉台IV式よりも古く、

混入したものと思われる。関東西部では藤内段階以降、阿玉台式土器の出土例がそれ以前より極端に減少しており、その分布は関東東部、北関東の一部に戻るようである。

加曾利E I式土器は3～5号住居跡から出土しているが4号住居跡でまとまっている。3、5号住居跡では一部E II式が混じっている。4号住居跡出土のキャリバー形深鉢は頸部無文帶をもち、口縁部地文は繩文が多く連結渦巻文が施されたもので加曾利E I式中葉以後に位置づけられる。5、6号土壇出土土器（第54図）、D—4グリッド出土土器（第51図1～3）、溝出土土器（第46、47図）の多くもほぼ同時期である。

加曾利E II、E III式土器も発掘報告以後、段階細分が進んでいるが、相当する6、7号住居跡では埋設されていた沈線懸垂文、条線文土器のほかに出土土器に恵まれず、それぞれE II、E III式の大作で把えておく。重複する両跡は台地肩部に位置するのに対し、先行する1～4号住居跡は緩斜面に位置しており、調査区内では時期が降るに従い集落が台地上に上の傾向が指摘できる。

（中島 宏）

（註）谷井 鮎 1977「勝坂式土器の変遷と性格についての若干の考察」信濃29卷4号、6号

参考文献

- 赤石光賀 1978「秩父山遺跡」上尾市文化財調査報告第5集
安孫子昭二他 1978「動坂遺跡」動坂貝塚調査会
岩井住男他 1970「勝坂」鳳翔7号
小田静夫、伊藤富治夫 1976「前原遺跡」国際基督教大学考古学研究センター
柿沼幹夫 1977「前島・島之上・出口・芝山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第12集
加藤 緑 1975「中期繩文人のすまい」Circum-Pacific
下村克彦他 1970「花賀貝塚発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第15集
田代 寛他 1980「根沢遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第34集
塙田 光他 1976「中峰式土器の研究」下総考古学6
服部敬史 1972「岳の上遺跡」東京都西多摩郡日の出村文化財保護委員会
三上嘉徳 1971「所沢市下安松出土土器」下総考古学4
水野正好 広域遺跡保存対策調査研究報告3「繩文時代集落の領域構造をめぐって」文化庁
宮崎朝雄、塙野博 1977「鴻巣市原遺跡出土の土器について 一加曾利E式土器発生期の状況」埼玉考古第17号
吉川國男他 1976「高井北遺跡」桶川市文化財調査報告書8